

---

# 嘘と話術とノラ猫    i f ~ ノラ猫と陽の当たる場所 ~

まあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嘘と話術とノラ猫 if ノラ猫と陽の当たる場所

### 【Nコード】

N8657S

### 【作者名】

まあ

### 【あらすじ】

嘘と話術とノラ猫のifストーリーです。ノラ猫『黒須伐』は振り分け試験にヤマが当たりAクラスに振り分けられました。勉強ばかりのクラスメートに囲まれ、彼の中にある闇は癒されるのでしょうか？

## オリキャラデータ（前書き）

どうも、毎度おなじみのまあです。

何本書くんだよ。と言っツツコミはすでに無意味です。

今回はノラ猫『黒須伐』をAクラスへと振り分けました。

Fクラスとは違う場所で伐は何を見つけていくんでしょうか？

## オリキャラデータ

黒須<sup>くろす</sup> 伐<sup>ばう</sup>

性別 男

所属 2 - A

文月学園に通う問題児。売春をしているややクザとつながっていると言っ危ない噂をされている。

実際は家族が借金を残し蒸発したため1人で生計を立てており夜遅くや朝までバイトをしている。現在は伐を拾った人間の保護の元、1人暮らしをしている。

容姿は中性的で美少女と見違えられる事も多い。

自分の容姿が金になる事を理解しているため、康太からはモデル料を取り、自分の写真集を扱わせている。

あまり人を信用していない節があり、1人で行う事が多いが、1人で生きているためか、交渉術は周りより飛び抜けており、交渉に使う情報を集めている節があり、学園の1部の生徒から『詐術師』と呼ばれている。

得意教科 日本史、数学、保険体育

苦手教科 なし

総合点数 2500～3200（テストの度に変動）

今回はAクラス設定のため、得意教科を3つとさせていただきます。また、本編とは違い黒猫は生きています。どんな人物かはおいおい。腕輪の能力は本編と同様に教科毎に設定されている事にさせていただきます。伐は点数にテストにより、点数の変動が大きいです。

召喚獣：伐をデフォルトしたタイプであり、武器は鋼系の付いた投げナイフ。防具は軽装でスピード重視の召喚獣。

腕輪

日本史『?』：データなし。

数学『魅了』：自分より点数の低い相手（50点以上差のある）の召喚獣を魅了する。

保険体育『毒』：伐の召喚獣に攻撃された召喚獣の点数を減らして行く。回避不可。

おつみ まこと  
近江 真

性別 男

年齢 27

伐を使える人間として認識しており、裏で起きた事件の情報等を集めに伐を利用する刑事。伐や黒猫と言われる裏の人間とも認識があり、事件を解決するためには汚い事でも平気でやれる人間。

## 第1問

「……だりい」

「……朝の第一声目がそれはどうなんだ？ それと制服を着たまま、堂々とタバコを吸うな」

桜舞うなか『黒須伐』は文月学園の校門をくぐるとそこには生徒達から畏怖の念を込めて『鉄人』と呼ばれている『西村宗一』教諭を見つけるなり、気だるそうなため息を吐くと伐の姿を見て西村教諭は大きなため息を吐いて伐の加えているタバコを取り上げる。

「……なら、チェンジだ。あんたのむさい顔よりは高橋先生の知的な顔が良いな。良い女だし、普通に美味そうだ」

「……お前は遅刻しておいてそんな言葉しか出てこないのか？」

「きただけマシだろ」

伐は西村教諭の顔など見たくないと思い払うように手を振り、西村教諭は伐が遅刻してきた事を責めるが、伐は元々、登校する気もなかったように欠伸をすると、

「……確かに初日から登校しただけも良しとするか」

「そうしろよ。それで、遅刻の取り締まりか？」

「……違う。これを渡そうと思ってな」

西村教諭は伐が登校してきた事には感心したのか頷き、懷から封筒を取り出して伐の前に差し出す。

「何だ？ 金か？ 悪いけど、あんたは趣味じゃないんだが、こんな厚さじゃ俺は買えねえぞ」

「……そんなわけがあるか。その中にクラス分けが入っている。確認して自分の教室に行くんだぞ。ただでさえ、遅刻しているんだ。いきなり、屋上でサボったりしないように」

伐は封筒の意味がわからないように首を傾げると西村教諭は大きなため息を吐き、クラスを確認して教室に行けと言つと、

「……めんどくせえな」

「……黒須、今回は学園長の計らいで本来停学だったところを特別に振り分け試験を受ける事ができたんだ。その事を忘れるんじゃないぞ」

「知らねえよ。あの妖怪の事なんてな……」

伐が気だるそうに封筒を開ける姿に西村教諭は学園長である『藤堂カヲル』に感謝するように言うが伐は西村教諭の言う事を聞く気があるわけもなく、封筒の中身を確認すると中には『黒須伐…… A クラス』と大きく書かれており、

「…… A クラスね。設備は極上に経験知らずの女か？ それなりに楽しめそうだ」

「……黒須、おかしいな真似はするなよ」

何か良からぬ事を考えているようで口元を緩めると西村教諭は伐がおかしな事をしないか心配のようで眉間にしわを寄せるが、

「さあな。それじゃあ、立ち仕事頑張れよ」

「……まったく、後は吉井だけだな」

伐は西村教諭の話など聞く気はないと言いたげに歩き出し、西村教諭は大きなため息を吐き伐の背中を見送ると伐以外にも遅刻をしている生徒がいるようで最後の1通の封筒を見る。

（……ここか？ センスのねえ。教室だな。教室にシャンデリアなんてバカじゃねえか）

伐は教室の後方のドアを開けるなり、目に飛び込んできたAクラスの教室の照明を見て眉間にしわを寄せると、

「黒須くん、遅刻ですよ。その空いている席があなたの席です。早く座ってください」

（……担任は学年主任の高橋洋子か）

伐の姿を見たクラス担任の『高橋洋子』教諭が伐に席に着くように言い、伐は返事をする事なく空いている席に座り、

（……それなりに良いパソコンだな。座り心地も良いし、寝るには最適だな）

自分の席の設備に目にやるとすでに授業はどうでも良いようで欠伸



をした後、目をつぶろうとすると、

「ちょっと、黒須くんだったわよね。自己紹介、あなたの番よ」

「あ？ めんどくせえな」

伐の斜め前の席に座っていた女子生徒が伐を小突き、伐は気だるそうに立ち上がり、

「黒須伐。別に覚えなくても良い」

「黒須くん、それだけですか？」

「別に話すような事もないです」

伐は名前だけ言って席に座り直し、あまりにもあつさりとした自己紹介に高橋教諭は首を傾げるが特に話す事はないと言い切る。

「そうですか？ それでは次の方……」

「ねえ。本当に自己紹介、あれで良いの？」

「そうそう。あんなあつさりじゃ、友達できないよ」

高橋教諭は自己紹介を先に進めると先ほどの女子生徒が伐に声をかけ、伐の斜め後ろに座っていた女子生徒も伐の自己紹介が不満なように伐に向かい言うが、

「良いだろ。俺は勘が当たってここにいるんだからな。お前らと違ってお勉強もする気はねえしな。この寝心地が良い席があれば良い。」

だいたい、見るからにお前らと俺じゃ『色』が違っただろ」

「……確かにね。どうして、君のような生徒がAクラスにいるかわからないよ」

伐は気だるそうにため息を吐くと伐の前に座っていた男子生徒は伐の態度が気に入らないようで伐の方を振り返り言つと、

「だから、勘が当たったって言っているだろ。普通にやればBには入れたと思うけどな。Aは出来すぎだ」

「そうなの？」

「確かにそんな感じはしないわね」

「ああ……それで、俺はいつまでこの話に付き合わないといけねえんだ？」

伐は相手をするのは面倒だが納得がいかなさそうの顔をしている3人の姿にもう1度、ため息を吐き、自分は本来Aクラスにいる学力はないと言い切ると女子生徒は首を傾げ、伐はこれで話は終わりにしたいと言つ。

「まあまあ、それでも同じクラスになったのは何かの縁だよ。ボクは『工藤愛子』。得意教科は『保険体育の実技』だよ」

「……処女が人をからかうような言い方をすると犯されるぞ。それとも犯して欲しいのか？」

伐の斜め後ろに座っていた女子生徒は自分の名前を『工藤愛子』と

名乗ると伐を挑発するように笑うが伐は表情を変える事なく、愛子を処女と斬り捨てると、

「く、黒須くんも愛子もこんなところで何を言っているのよ!？」

「そうだよ。もう少し、言葉を選べないのかい？」

もう1人の女子生徒と男子生徒は伐と愛子の言葉に顔を赤くして言う。

「あ？ 処女と童貞でもガキじゃねえんだ。それくらいで慌てるなよ」

「だから、それを言うのを止めなさいと言ってるでしょ!！」

「……うるせえな。と言うか、人の首をつかむなよ」

伐は慌てる2人を見て気だるそうにため息を吐くが、女子生徒は伐の言葉に問題があるためか伐の胸倉をつかみ叫ぶが、伐は気だるそうに女子生徒の手を払う。

「ちょっと、黒須くん、どうして、ボクが処女だって言うのかな？」

「あ？ なんもんわかるだろ。このなかで経験者の匂いがする人間はいないな」

愛子は伐に切り捨てられた事に納得がいかないようで伐を挑発するように笑うが伐は教室のクラスメートの顔を見渡して言い切ると、

「……黒須くん、あなたはここなんだと思っているのよ？」

「事実を言ったまでだろ。勉強だとか言って大切にしていると行き遅れるぞ……それとも、俺が女にしてやるうか？ ……の『木下優子』」

女子生徒は伐の胸倉をつかむと伐は彼女の名前を知っていたようで『木下優子』と呼ぶと彼女の耳元で艶のある声でささやく、

「な、何で、あたしの名前を知ってるのよ！？」

「そりゃ、あんたは有名人だしな。まあ、あんたより、弟の『秀吉』の方が有名か？」

優子は身の危険を感じ取ったようで伐から放れて声をあげると伐は表情を変える事なく、優子と彼女の弟の事は知っていると言う。

「確かに、木下さんの弟くんは『演劇部のホープ』らしいからね」

「それ以外でも有名だけどな。まあ、そこは姉としての威厳を守るために伏せておくか」

男子生徒も優子の弟の事を知っているようで頷くと伐はそれ以上に何か知っているとと言うと優子は伐を睨みつけているが、

「それで、俺はいつまでこんなくだらない話に付き合わないといけねえんだ。俺に関わらなければお前らに都合の悪い事は言わないでやるから、静かに寝かせろよ」

「黒須くん、君は何と言うか。もう少し言葉を選べないのかい？」

「悪いな。あんたらと違って育ちがよくねえんだよ」

伐は興味無さそうに目を閉じると男子生徒はため息を吐き、伐はめんどくさくなってきたようでもう聞く気はないと話を切る。

## 第1問（後書き）

どうも、作者と

伐「……」

主人公の伐です。何か話してくださいよ

伐「……うるせえな。これはなんだよ？　ただでさえ、本編も遅れてるし、他も書かねえといけねえんだろ」

まあ、そうですね、書きたかったので

伐「……バカじゃねえの」

そうですね。それで、今回はルート未定です。本編とは違うところを狙ってみようと思ってます。

伐「なら、誰だ？」

優子が瑞希。

伐「腐女子と巨乳娘？」

ええ、本編では伐は瑞希が苦手ですしね。かわらせるのも面白いかな？と本来は明久×瑞希推奨なんですけど、他のifですし、遊んでみようかと

伐「……無責任な発言だな」

まあ、今更ですね。

## 第2問

(……タバコ、吸ってくるか)

伐は目が覚めたようで欠伸をすると流石に教室でタバコを吸うわけにはいかないと思っているようで席を立つと、

「黒須くん、どこに行くつもり？ もう直ぐ授業が始まるわよ」

「まあ、FクラスがDクラスに試召戦争を仕掛けたから、自習なんだけどね」

「あ？ FがDに？ それも初日からか？」

優子と愛子が伐に声をかけ、伐は愛子から聞かされた『Fクラス対Dクラスの試験召喚戦争』に意味がわからないと言いたげに眉間にしわを寄せ、

「……自習なら、それこそ、別にここにいる必要もねえだろ。せつかくだしな。少し、見学でもしてくるか」

「ちょっと、堂々とサボるつもり？」

「ああ。だけど、その前に……」

伐は試召戦争を見学するつもりのもうでサボると言つと席のパソコンに向かい、

「何するつもり？」



「あ？　どんな人間がクラスに分けられてるかと思つてな」

「ちょ、ちよつと、何を始めてるのよ!？」

「……Dクラス代表は『平賀源二』……あの、暑苦しい熱血バカか？　他には目立った人間はいないな。Fクラス代表は『坂本雄二』……確か悪鬼羅刹とか言われていたバカか？　昔は神童とも言われていたって話だから、頭の回転は悪くないはずだな。他はバカばかりだが……『土屋康太』、ムツリスケベ『木下秀吉』、えんげきはか『吉井明久』、かんさつしよぶんしゃ『島田美波』に……ん？　『姫路瑞希』か？　これだな。FクラスがEを無視してDを攻めた理由は」

伐は文月学園のシステムからDクラスとFクラスの名簿を探しだし、たようで当たり前のようにな戦力の分析を始め出すと、

「ちよつと、黒須くん、何をしてるのよ!？　こんな事をしてバレたら停学よ!!」

「……うるせえな。別に俺が停学になろうがお前には関係ねえだろ。文句を言うなら、名簿を覗くんじゃねえよ」

優子は伐の行動に驚きの声をあげるが伐は優子には関係ないと言い切り、

「姫路さんがFクラスに？　彼女がAクラスにいないのは驚いたけど、まさかFクラスにいるなんてね」

「振り分け試験で途中退席でもしたんだろ。病弱な美少女ってイメージだからな。保健室でもよく見たからな」

「……黒須くんの場合は授業をサボって保健室で寝てた口だね」

「ああ。昼寝は保健室のベッドに限る」

伐の口から出た『姫路瑞希』の名前に伐の前の男子生徒が振り返り言う。伐は瑞希がFクラスにいるであろう理由を推測して話し、

「となるとFの戦術は時間稼ぎか？　つまんねえな」

「時間稼ぎ？　どうしてそんな事が言えるんだい？」

伐はFクラスとDクラスの試召戦争の決着が見えたようで気だるそうに欠伸をすると男子生徒は意味がわからないようで首を傾げる。

「久保、学年次席のくせにその程度の事もわかんねえのかよ。勉強しかできねえのは使えないね」

「……ああ。ご教授願えるかい？　黒須くん」

伐は男子生徒の名字を呼ぶと男子生徒『久保利光』は自分がバカにされている事がわかったようで眉間にしわを寄せながらも伐に説明を求め、

「簡単な事だ。試験召喚戦争が始まれば回復試験が受けられる姫路は直ぐに回復試験を受けて点数が補充できればDクラス程度じゃ敵う相手もいねえからな。それまでは数学の得意な島田ぜっぺきを中心にしてフィールドを展開、教科選択で数学以外に変えられたら観察処分者のバカを餌に時間稼ぎ、バカに目が言っている間にFクラス数人でDクラス1人をぼこる。Dクラスは最下級クラスのFクラスに負け

るわけではないと思っっているから相手をなめている分、戦術もなく力でごり押し、だけど、Fクラスには康太がいるからな。Dクラスの動きは丸見え、後は『姫路瑞希がFクラスにいるわけがない』という思い込みを使っつての奇襲』で終わりだ」

「確かに黒須くんの説明を聞くと良くできた作戦かとも思うけどそんなに簡単に行くかしら？ それに姫路さんがいるなら、回復試験を正式に受けてからの方がいいんじゃない」

伐の説明に優子は納得できる事もあるが、それこそ瑞希がいるなら初日から試験召喚戦争を仕掛ける意味がないと言っが、

「回復試験を申請すればFクラスは他のクラスへも試験召喚戦争を仕掛ける準備ができていと教える事になる。そうすれば、姫路がFクラスにいる事がばれるだろ。だからこそその初日だ。他のクラスだつて自分達の戦力を理解していない。クラスの中だつてまとまってないからな。連携も何もできない」

「それはFクラスも同じじゃないの？」

「本来はな。だけど、バカが集まりFクラスだ。設備に対する不満を煽り、扇動する人間が出てきたらどうなると思っ？」

「……扇動に乗せられるわね。間違いない」

伐は初日に仕掛ける事にも意味があると言っつと伐の言葉に優子は頭が痛くなつてきたようっで頭を押さえて言っつと、

「まっつたく、努力も何もしない人間がそんな不満を言っつ資格もないはずなのに」

「だけど、それが人の真理だ。楽をしたい。自分より上の人間の足を引っ張り、自分より下だと思いこませたい」

優子はFクラスの考えに納得がいかないと言う表情をし、伐はそれが人間だと言い切る。

「……その考えはどうなんだい？」

「否定できるのか？ 成績だけに捕らわれてこの設備に満足しているお前らが、少なくとも今の時点でお前らは下のクラスや俺みたいな人間を見下しているだろ」

利光は伐の言葉に不快感を覚えたようで眉間にしわを寄せながら言うが伐は先ほどからクラスメートから自分に向けられている視線に気づいているようで利光の言葉を鼻で笑うと、

「先に言っておく、野良猫<sup>おれ</sup>は嘘には鼻が利くんだ。下手な建前<sup>リアル</sup>はいらねえよ。ただ敵意には敵意で返して貰う。現実<sup>ガキ</sup>も知らない子供が野良猫<sup>おれ</sup>に勝てると思わない事だな」

「……黒須くん、わざわざ、ケン力を売る必要はないんじゃないかな？」

「ケン力を売っているのはあいつらだろ。曲がりなりにも俺は振り分け試験でここに振り分けられたそれを認めないで小馬鹿にした目で見ているんだ。悪意や敵意にはそれ相応の対応をさせて貰う。それだけだ」

伐は常識知らずのクラスメートに向かい関わるなと言うが利光は伐

の言葉の意味を理解していないようで眉間にしわを寄せたまま伐に態度を改めるように言うが伐が考えを改めるつもりはなく、興味無さそうに言う教室を出て行き、

「……本当に黒須くんって、Aクラスとしての自覚はないのかしら、あんなケンカ腰で言われたら誰も話をしないわよ」

「ないんじゃない。と言うか、あんまり、勉強を必要だと思ってないんじゃないかな。後はぼく達とは違うところを見ているとか？」

優子は伐の背中を見てため息を吐くと愛子は苦笑いを浮かべ、

「……黒須が言っている事は間違ってない。少なからず、黒須と距離を取るうとしている人間は多い」

「代表？」

今まで何も言わなかったAクラス代表の『霧島翔子』は伐の言っている事にも一理あると言う。

「……黒須はAクラスの生徒、それをみんなは忘れないでほしい。せつかく、1年同じクラスなんだから、人から拒絶されるのは辛いから」

「そうだね。確かに口は悪いけど、ここまでの事をきっちり説明してくれる当たり悪い人には見えないしね。あ！？ あれだ。黒須くんって猫だ」

「猫？ 確かに気まぐれな猫かもそれも可愛げのない」

翔子は伐と誰かを重ねあわせているのかクラスメートに向かい言う  
と優子と愛子は伐を猫だと意見が合致したようであり、

「黒須くんはツンデレにゃんこ」

愛子は楽しそうに伐を猫だと言うとクラスメート達も愛子の言葉に  
何か納得が言ったようで教室にはところどころから笑い声生まれ  
る。

その日の試召戦争は伐の予想した通りの展開で幕を閉じ、伐はAク  
ラスの生徒達からそれなりの信頼を得たようである。

## 第2問（後書き）

どうも、作者と主人公です。

伐「……」

第2問目から『ツンデレにゃんこ』扱いに不満そうですね。

伐「当たり前だ」

まあ、D対Fの試召戦争の結果でそれなりに伐の重要性を理解したであろうAクラスの面々に伐はどう巻き込まれるんでしょうか？

### 第3問

(……しかし、まさかあの姫路瑞希にあんな弱点があるとはな。面白い情報だ。何かに使えるかも知れないからな。覚えておこう)

F対Dの試験召喚戦争が決着の付いた翌日の昼休み伐は屋上でタバコを吸っていると屋上ではFクラスの面々が昼食を食べており、瑞希が作ったであろう弁当を食べて卒倒している姿を見て伐は面白いものを見たと思いながらも関わるのは面倒だと思ったようでタバコをくわえたまま校内に入って行くと、

「こんなところにいたわ……って、あんた、何してるのよ!？」

「……うるせえな。お前に関係ねえだろ」

優子は伐を探していたようで伐を見るなり、ため息を吐くが伐がタバコを吸っている姿を見て声を上げ、伐は優子の反応に気だるそうに返事をするが、

「関係ないじゃないでしょ!! 黒須くんは自覚はないかもあなたは2年生の最上位クラスの生徒なの。あなたがおかしな事をするにあたり達まで指を刺されるの」

「……連帯責任ね。くだらねえ」

優子は伐のタバコを取り上げると伐は懷から携帯灰皿を取り出し、気だるそうに優子からタバコを取り返して携帯灰皿に押し付ける。

「黒須くん!!」



「……うるせえな。これを吸うか。女を抱かねえとイライラするんだよ。これを取り上げるなら、お前が相手をしてくれても良いんだぞ」

「な、何を言ってるのよ!？」

優子は伐の様子に声をあげると伐はタバコを制限するなら代わりの物を用意しろと言い、優子の腰に手をまわすと優子は顔を真っ赤にして伐を怒鳴りつけて拳を振りまわすが、

「……1人で暴れて何してるんだ？ 俺は教室に戻るぞ」

「待ちなさい。黒須伐!! あんたを殺すわ。あたしの事をバカにして許さないわ!!」

伐は表情を変える事なく優子の拳を交わすと何事もなかったかのようになり1人で教室に向かい歩き出し、優子は伐の態度が気に入らないようで伐に向かい叫ぶと、

「……うるせえな。バカにしてるつもりはねえよ。弟に男共の目は言ってるが、お前も負けてねえよ。ただ、周りに取りつくろってるより、素を見せた方がいいんじゃないのか？ 少なくとも弟と同じ土俵でやって行くのは分が悪いぞ。男の視線を集めたいなら需要と供給を考えろ」

「へ!？」

伐は気だるそうに優子をバカにしていないうと優子は伐の言葉が予想外だったようできょとした表情をすると、

「ちょ、ちょっと、それってどういう意味よ!？」

「うるせえな。静かにしろよ。キャンキャン騒ぐな」

優子は伐の言葉の真意が気になるのか大声をあげるが伐は面倒くさそうに言い、1人で先を歩きだした時、

「黒須くん、優子、戻ってきた。黒須くん、早く入って」

「……何なんだよ」

優子が伐と優子を見つけると伐の手をつかみ教室に引っ張り込み、伐は気だるそうにため息を吐く。

「やっと、帰ってきたね」

「……久保？ 何だ？ これは？」

優子に腕を引っ張られた伐を見て利光がため息を吐くと伐に向けてクラスメートの視線が集まり、伐は意味がわからないようで眉間にしわを寄せると、

「昨日の試召戦争なんだけど、黒須くんの言う通りに決着が付いたんだけど、どうも納得がいかない事があってね。黒須くんに見聞きたいんだ。現状で言えば、君が1番、彼らFクラスの事を理解してそうだからね」

「そう言う事です。黒須くん、お願いできますか？」

利光と1人の女子生徒がこの集まりをまとめているようで伐に意見を聞きたいと言う。

「……なんで、俺がそんな事をしないといけねえんだよ」

「君はAクラスの生徒のはずだろ。それに君は僕達を勉強だけしかできないと言ったんだ。僕達にも僕達なりにその言葉に思ふ事があってね。君の言う勉強以外の事を学ぼうと思ったわけさ」

「そう言う事です。黒須くん、お願いします」

伐は面倒だと言いたげに眉間にしわを寄せるが利光と女子生徒が気にする事はなく、

「……だりい」

「あはは。黒須くんもこの人数を相手じゃ形無しだ」

伐は面倒だとため息を吐くと愛子は伐をからかうように笑い、

「……それで、久保に佐藤、何が納得がいかな……なんだよ？」

「いえ、黒須くんが私の名前を知ってるとは思ってなかったんです。自己紹介の時も直ぐに寝てしまったようですし」

伐は眉間にしわを寄せたまま、利光と女子生徒の名字を呼ぶと女子生徒『佐藤美穂』は驚きの声をあげると、

「……これでも人の名前と顔を覚えるのは得意なんだよ」

「そうなんだ……意外ね」

「確かにね」

伐は不機嫌そうな表情で言うが優子と愛子は伐は人の顔と名前を覚えるような事はしな思っていたようで意外だと言い切り、2人の意見に多くのクラスメートが納得しているようで大きく頷く。

「……それで、何を聞かせろって言うんだ？」

「えーとですね。FクラスがDクラスに勝ったんですけど、設備の交換はしていないんです。これには何の意味があるのかと思ったんです」

「せっかく、試召戦争に勝ったのに設備の交換をしないんだ。何かあると思ってるね」

伐は眉間にしわを寄せたまま、改めて、聞くとFクラスは設備の交換をしていないようにで利光と美穂は伐にその意味について何かわからないかと聞くと、

「設備交換の代わりに何か交換条件を出したんだろ。Fクラスがどこまでの設備を狙ってるかは知らないけどな」

「でも、せっかくの設備交換だよ。勿体ないじゃない」

「……今の設備より、上になればここで良いと満足する人間が出てくる。上の設備を取るのに貪欲さに欠けてくるだろ。モチベーションの低下を防ぐためには間違った選択じゃないだろ。後は交換条件に何かあるかだ。それは俺の知った事じゃない」

「ならさ。Fクラスは次にどこを狙ってくると思う？」

伐はFクラスとDクラスの間に関係が結ばれたと言うと愛子は伐に次のFクラスの標的がわからないかと聞く。

「……最初にDクラスを狙ったのが次の布石だとしたら、Bクラスだ」

「何で、そう思うんだい？ ……Dクラスの隣はBクラスと言う事に関係あるのかい？」

伐は次のFクラスの標的はBクラスだと言うと利光は2学年の校舎をパソコンのディスプレイに表示したようでクラスの配置を見て伐に聞くと、

「それもあるだろうな。Dクラスに伏兵を置くこともできるしな。姫路を使つて戦況がある程度思い通りに動かす事は可能だからな」

「伏兵か？ 考えもしなかったね」

「……実際、俺はFがどう動くかは知らねえよ。だけど、Bクラスの代表を討ち取る駒つてのは限られてるからな。Dクラス戦で姫路の存在はばれたからな。俺なら、姫路を囷にして、康太の保険体育で代表を落とす」

「それって、BクラスとFクラスで戦ったらFクラスが勝つて事？」

伐はB対Fの試召戦争はFに軍配が上がると言うと言つて愛子は流石にF

クラスがBクラスに勝つ事はないと言うが、

「……Bクラスの代表は『根本恭二』だ。元神童と比べると格が粗末すぎる。根本は彼女のCクラス代表の『小山友香』を使って何かしてくるだろうけどな」

「……黒須くん、あなたって、2年生全員の顔と名前を一致させてるとか言わないわよね？」

伐はBクラスの代表では相手にならないと言い切ると伐の言葉に優子は何かあったようで眉間にしわを寄せながら言つと、

「……これでも人の名前と顔を覚えるのは得意なんだよ」

「……」

伐は表情を変える事なく言つとクラスメート達は流石にないだろうと思いつつも真意を確かめるのは抵抗があるようで微妙な沈黙が起きる。

## 第4問

「じよ、『冗談ですよね?』」

「さあな。想像に任せる……他にないなら、俺は寝るぞ」

美穂は顔を引きつらせながらも伐に聞くが伐は欠伸をすると、

「ちよつと、授業はサボる。出て来ても寝てるってどう言う事? 少しは真面目にやろうとは思わないの?」

「……うるせえな。俺は大学に進学するような金もねえんだ。だいたい、何が楽しくてこんな役にも立たないものをやる必要がある。成績さえ良くて何もしないのはお前らを見ればわかるだろ」

優子は伐の態度が気に入らないようで伐に態度を改めるように言うが伐は表情を変える事なく言い切り、その言葉に昨日から、伐の頭の回転の速さについて行けないクラスメート達は黙ってしまうが、

「……黒須、雄二はきつとAクラスを狙ってくる。黒須ならどうする?」

「あ? ……別に何かする必要はないだろ。どうせ、考えたらずのバカのやる事だ。AとFじゃ、どれだけあがいたって埋められねえ差があるからな。相手の挑発に乗らなければ負けねえ……乗りそうだな。思いっきり」

翔子は微妙になっている空気の中、気にする事なく、雄二は必ずFクラスを率いてAクラスに試召戦争を仕掛けてくると思っているよ

うで伐に意見を求めると伐は挑発に乗らなければ良いと言うが優子を見てため息を吐く。

「な、何よ？ あたしに何かあるって言うの？」

「……いや、思いつきり、乗せられそうだと思ってな。素が出てるぞ。姉上」

「な、あんたはあたしの何を知ってるって言うのよ？」

「……とりあえずはお前の特殊な趣味と被ってる猫の中身」

優子は伐のため息を意味がわからないようで不機嫌そうな表情をして伐のため息を意味を聞くと伐は優子は挑発に簡単に乗ると判断したようのため息を吐くと携帯を取り出してメールを打ち、

「……な、なんで、あんたがこれの事を知ってるのよ！？ って言うか、どうして、あたしのメールアドレスを知ってるのよ！？」

「……お前に教える筋合いはねえよ。だいたい、アドレスがお粗末すぎだろ。ひねりも何もない」

「ま、まあ、優子も黒須くんも落ち着いてよ。それで、代表、どうしてFクラスがAクラスを狙って来るって言えるの？」

伐のメールは優子の携帯電話に届いたようで優子はメールの内容に顔を真っ青にしながらも伐の胸倉をつかもうとするが愛子と数人の女子生徒が伐と優子の間に割って入り、優子を止めると愛子は翔子がFクラスは必ずAクラスに試召戦争を仕掛けてくると言う理由を聞く。



「……根拠はない。でも、雄二だから」

「代表はFクラス代表の坂本くんと知り合いなのかい？」

翔子は根拠はないと言うと利光が翔子と雄二の関係が気になったように首を傾げながら聞くと、

「……私と雄二は幼なじみ」

「そうなの？ それじゃあ、代表は坂本くんが何を考えているかわからない？」

「……そこまではわからない。でも、雄二は必ずAクラスに挑んでくる」

「……まあ、それだから考えたらずなんだけどな」

翔子は雄二との関係を話すと愛子は翔子にどうなるか聞くが翔子は首を振り、伐は気だるそうにため息を吐き、

「……まあ、仮にBクラス対Fクラスが始まったら、こっちに飛び火してくる可能性もある事だけは各自考えておけ」

「飛び火？ いったい、どう言う事だい？」

伐はある程度、先は見えたのか気だるそうに言い、その言葉に利光は眉間にしわを寄せて聞き返す。

「……さっきも言っただろ。小者と単純バカは付き合ってるんだ。」

情報操作くらいはしてくるだろ」

「えーと、Cクラスが漁夫の利を狙ってるのか？ でも、2人が付き合ってるって知ってる人間がいるかよね？」

「……それくらいは自分達で考えろよ。お前らに付いてるのは飾りか。まあ、元神童がいるんだ。うちにも楔は打ち込んでくるだろうな」

優子は伐の言葉に首を傾げると伐はそれくらいは自分達で考えろと言いながらも翔子の言葉でFクラスの目標はAクラスだと確信したようであり、面倒そうにため息を吐くと、

「ちょっと、黒須くん、それってどういう意味よ？」

「……うるせえな。俺はお前らに付き合う理由はねえんだよ。知りたかったら、こっから先は有料だ。金か女を用意しろ」

「……金か女って君は言葉を選べないのかい？」

優子は伐の言葉に聞き返すが伐はこれ以上は答える気はないと言うと伐の言葉に利光は眉間にしわを寄せるが、

「言い方が悪かったか？ 容姿が良いなら男でも良いぞ」

伐は表情を変える事なく更なる問題発言をする。

「ちょ、ちょ、ちょっと、黒須くん、あなたは、いきなり何を言いつけるのよ」

「何、動揺してんだよ。木下<sup>ふじよし</sup>」

優子は伐の言葉にいろいろと危ない妄想が頭の中をよぎっているように慌てて伐に聞かされた伐の表情が変わるわけもなく、

「く、黒須くん、君は突然、何を言ってるんだい？」

「あ？ 別におかしな事は言ってるねえだろ。愛だとか生ぬるい事を言ってるわけじゃねえんだ。楽しめればそれで良いだろ」

「で、でも、黒須くんは男の子だよな」

利光は伐の言葉に慌てて声をかけるが伐の表情は変わる事もなく、愛子は顔を引きたらせて伐に言う、

「ああ、だから、どうした？」

「だから、どうしたじゃないよ。君はそう言うのは世間的に問題があるとは思わないのかい？」

「知らねえよ。お互いが同意するなら何も問題ねえだろ。本人同士より、木下やそこら辺で妄想世界に入り込んでいる腐女子の方が迷惑だろ。他人に自分の趣味を押し付けるんだからな」

「う、うん。そうかもしれないけど……あれって、どうしたら良いかな？」

伐は愛子の言葉など気にする気もないように気だるそうに言う、優子を中心に数名の女子生徒は伐と男子生徒の絡みを想像しているように妄想世界に飛び立っており、愛子はどう反応して良いのかわか

らないようである。

「……勝手にやらせておけよ。後、久保、言っておくが基本的に多くの人間はノーマルだからなお前の価値観で動くなよ」

「な、何を言ってるんだい。君は!？」

「慌てるとばれるぞ……寝るか」

伐は気だるそうにため息を吐くと優子達と同じように妄想の世界に飛び立とうとしている利光に声をかけると利光は慌てて何も無いと言うが伐は利光の反応にすでに興味はなくなっているようで欠伸をして自分の席に戻ると目を閉じる。

## 第5問

「……やっぱり、やる事が汚いねえな。流石は器の小さい小者」

Fクラス対Dクラスの試召戦争終結後、数日が過ぎるとFクラスがBクラスに試召戦争を開始し、伐は自分の席に座ると気だるそうにつぶやくと、

「何々？ 何があつたの？」

「あ？ 何でもねえよ。お前には関係ない」

愛子は伐のつぶやきが聞こえたようで伐に聞くが伐は愛子には関係ないと言つが、

「原因はそれかな？」

「……人の物を勝手に取るんじゃないよ」

愛子は伐の耳にイヤホンが付いている事に気づき、伐の耳からイヤホンを抜き自分の耳に付けようとすると伐は愛子からイヤホンを取り上げ、

「……タバコ、吸って来る」

「そう。行つてらっしゃい」

「……愛子、普通に見送らないでよ。黒須くん、待ちなさい」

立ち上がり教室を出て行こうとすると愛子は伐を見送り、優子は慌てて伐を止めようとする。

「……うるせえな。お前に迷惑をかけてねえだろ」

「十分、かかってるわよ！！ あんたがタバコを吸う事は止めないわよ。せめて学園では止めなさいよ。あんたが何かするたびに西村先生になんであたしがあんたの居場所を聞かれないといけないのよ」

「あはは。優子、完全に黒須くんの保護者になってるよね」

「それでも、黒須くんは気にしないけどね」

伐は気だるそうにため息を吐き、優子には関係ないと言うが優子はすでにAクラスで教師との窓口になっているようで伐の事で西村教諭に捕まった事があるようで伐を怒鳴りつけると伐と優子の様子に愛子は苦笑いを浮かべ、利光はため息を吐くと、

「……黒須、待って」

「……断る」

翔子が伐を呼び止めるが伐は直ぐに断るが、

「……話を聞いて欲しい」

「だ、代表！？ い、いきなり、何をしてるんですか！？」

翔子は伐に話があるようでスタンガンを取り出し、伐に押し当てる  
と優子は目の前で翔子が突然、行った行動に驚きの声を上げる。

「……く、黒須くん、生きてる？」

「工藤さん、指で突きながら聞くのは失礼じゃないかな？」

愛子は翔子にスタンガンを喰らい倒れた伐を指で突くと利光は眉間にしわを寄せながら愛子を静止するが、

「ちょっと待つて！？ 愛子も久保くんもなんで、そんな反応なの！？ 代表もなんでそんなものを持つているんですか！？」

「……護身用？」

「なら、仕方ないよね。代表、キレイだし」

「……ありがとう。愛子」

優子は常識ではありえない状況を声を上げるが教室は翔子の言葉に翔子ならあり得るから問題ないと言う空気になり、

「……あ、あたしがおかしいのかな？」

「そ、そんな事はないと思いますよ」

優子は頭を押さえながら自分が悪いのかと言うと美穂が優子は悪くないと言う。

「……おい。これはどう言う事だ？」

「……黒須に聞きたい事があったから」

「……あたしは間違ってない。この状況がおかしいだけ。そうよ。あたしは間違ってないわ」

伐が目を覚ますと伐は席にロープで縛り付けられており、伐を席に縛り付けたであろう翔子は表情を変えずに伐に聞きたい事があるといい、優子は目の前で行われている本来あるわけのない状況にぶつぶつと自分に言い聞かせるように言うと、

「……さっきも言っただろ。俺がお前に付き合う義理はねえよ」

「簡単に脱出しちゃうんだ」

「縛る趣味はあっても縛られる趣味はねえよ」

「……黒須くん、君はいろいろと発言を考えた方がいいんじゃないかな？」

伐は直ぐにロープを外すと愛子は苦笑いを浮かべ、利光は眉間にしわを寄せるが伐が気にする事はなく、

「……これで良い？」

「……何だ？ 早く言え」

翔子は伐の前に封筒を出すと伐は直ぐに封筒の中身を確認し、翔子の質問に答えると言う。

「だ、代表、何をしてるんですか？」



「……情報にはお金を払う価値があるってお父さんが言ってた」

「……流石、霧島家の1人娘」

優子は翔子の行動に驚きの声を上げるが伐は翔子の家の事を知っているようで少しだけ感心したように頷き、

「それで、何が聞きたいんだ？」

「……FクラスがBクラスに試召戦争を仕掛けた。Fクラスを勝たせるにはどうしたら良い？」

伐が翔子に何を聞きたいのかと聞くと翔子は始まっているBクラス対Fクラスの試召戦争でFクラスを勝たせたいと言う。

「……それは旦那をBの設備に起きたいのか？ それともAクラスに挑むようにけしかけたいのか？」

「……後者」

「……俺に言わなくても旦那はここを狙ってくるぞ。くだらないプライドのためにな」

伐は翔子の言葉に2つの答えが浮かび上がったようで翔子に2つの質問を投げ返すと翔子はFクラスと戦いたいと言い、伐はFクラスがBクラス戦を終えればAクラスに仕掛けてくると言う。

「……だからこそ」

「……まあ、依頼は受ける。それが野良猫<sup>オレ</sup>の流儀だからな」

「ちょ、ちよつと、黒須くん、だから、どこに行くのよ」

翔子は伐から視線を逸らす事なく言う。伐は席から立ち上がり、教室を出て行こうとし、優子は慌てて伐を止めようとするが、

「……木下<sup>ふじよし</sup>、これをやるから、大人しくしておけ」

「ちょ、ちよつと、何よ。これ!？」

「いらないのか？　なら、他のヤツにやるか」

「そんな事はないわよ!!　いるわよ」

伐は優子の相手が面倒になってきているようで懐から薄い本を取り出す。優子はその本を見て慌て、伐は懐にしまおうとすると優子はがっちりと本をつかみ、

「……なら、今から俺はサボるから目をつぶれ。と言うか、関わるな」

「な、何よ？　あたしだって、あんたに関わり合いたくなんてないわよ」

「なら、覚えておけ。世の中ってのは見ないふりをすれば見えないんだ」

伐は付いてくるなと言うと優子は伐を怒鳴りつけるが伐は表情を変え、事なく関わるなと言うと、

「少し試召戦争を眺めてくる。西村が来たら知らないと言え、それで充分だろ。答えようとするから答えを探さないといけなくなるんだ。わからねえもの、わかりたくないものは答えを探す必要なんてねえんだよ」

優子が真面目に対応しているのはくだらないと言い、教室を出て行く。

## 第6問

(……さてと、どこから行くかな？ 今の時間なら小者の指示でFクラスを荒らしてるくらいか)

伐はBクラス代表の根本恭二の姑息な作戦を盗聴していたようで気だるそうにため息を吐き、

(まあ、別にFクラスの教室がどうなろうとどうでも良いが、脅迫のネタがあるにこした事はないからな)

Fクラスの教室に向かい歩き出すが、

(……流石に教師がいる廊下を堂々と通れないか？ まあ、気にしなくても良いか。誰がどのクラスかなんてこの騒ぎのなかじゃ気付かないだろうからな)

廊下ではFクラスとBクラスの試召戦争が繰り広げられており、伐は廊下を進むのを考え直すが気にする事なく、試召戦争の間を通り抜けて行き、

(……Fクラスは良くて100点近辺、Bクラスは150から180点、良くて200点か？ ……となるとBクラスの総合得点は2200点くらいと考えておけば良いか。Fクラスは1000点以下だな)

目に映る召喚獣の点数に各クラスの総合得点を予想すると、

(……いたな。姫路瑞希。数学は400点オーバー？ 腕輪持ちか)

視線の先には姫路瑞希が映り、彼女の召喚獣の頭の上には412点と表示されており、召喚獣には特殊能力が使える腕輪が装備されている。

(……腕輪の能力は？ 熱線か？ 一瞬で1匹を消し炭かよ。2発目は見れないか。見えれば対策くらいできるんだけどな)

瑞希の召喚獣の腕輪が光ると左腕から熱戦が飛びBクラスの1人の召喚獣を焼き払い、伐はもう1度、腕輪が発動する事を待つが、

(……使いそうにはないか、まあ、ここで時間をつぶすよりは先に進むか)

瑞希の召喚獣は2発目の熱戦を出しそうにないため、伐はFクラスの教室に移動して行く。

(……やってるな。小者は旦那と協定中だったな。小者がここに居れば楽だったんだけどな……ふーん、4人ね。さてとこれをどう使うかだな)

伐はFクラスの前に着くとFクラスの教室内ではBクラス生徒4人が卓袱台や筆記用具を破壊しており、伐はそれを止める事なく証拠を集めるとその証拠をどう使うか考えながらFクラスの教室を離れて行き、

(……この後は放課後まではあまり進展はないだろうから、タバコを吸って……買っのを忘れた。ったく、失敗した……なら、教室で寝るか)

伐はしばらくは小競り合いが続くと思っっているようでタバコを吸いに屋上に行こうとして制服を漁るがタバコの箱の中は空であり、伐はため息を吐くと教室に向かい歩き出す。

「あ、黒須くんが戻ってきた？ 試召戦争ってどうだったの？」

「……知りたかったら、自分で見てこいよ」

伐が教室のドアを開けると愛子が伐に気づき近寄ってくるが伐は愛子の相手をする気もないため、軽くあしらうと自分の席に戻ると、

（……腕輪か？ 能力は確認しておかないと姫路とは戦えないな。旦那がAクラスとの試召戦争で何を仕掛けてくるかはわからないが、試召戦争をFクラスとの前にこなしておく必要性はあるな……俺の成績で腕輪が使えるのは数学と保険体育か？ 後は日本史は少し足りないか）

パソコンから文月学園のシステムに入り込み、自分の各教科の点数を確認しはじめ、

「ちょっと、黒須くん、今度は何を始めたの？」

「……うるせえな。お前には関係ねえだろ」

「そう言わないでよ。今度は何を見てるの？ ……これ、黒須くんの振り分け試験の点数だね？ うわ、400点オーバーが2教科もあるの？ ボクは保険体育だけなのに」

愛子は伐が何をしているのか気になっているようで伐のパソコンを覗き込むとパソコンのディスプレイには伐の総合得点と各教科の点

数が表示されており、伐の点数を見て驚きの声を上げる。

「……ヤマが当たっただけだ。まあ、この3教科はある程度コンスタントに取れるはずだけだな。後はまともにできるのは英語はできなくもないが文法なんて知らねえよ。言葉なんて伝われば良いんだからな。それより、邪魔をするな」

「……何となく、黒須くんはそんな感じだよね。それで、自分の点数を確認してどうかしたの？」

伐は愛子がうつとうしいと追い払うように言うが愛子はどこかに行く気はなく、伐が何をするつもりなのか聞くと、

「黒須くん、試召戦争で何かあったのかい？」

「……何故、集まる」

「気にしないでください」

利光と美穂も伐が何をするのか気になるようで伐の横から伐のパソコンのディスプレイを覗き込む。

「それで、自分の点数を確認してどうしたの？」

「……さっき、姫路の腕輪の能力を見てきた」

「……姫路さんは腕輪を持っているのかい？」

愛子は伐が何をするつもりかと改めて聞くと伐は眉間にしわを寄せて瑞希の腕輪の能力を見たと言うと利光は驚きを隠せないようであ

り、

「……霧島と俺の考えではFクラスはこの後、Aクラスに仕掛けてくるからな。姫路を押さえる事くらいは考えておく必要があるだろ。まあ、実戦で確認するのが1番、楽だな……」

「……なんで、あたしを見るのよ？」

伐はこの後の事を考えると試召戦争を体験するのも良いと言うと優子に視線を送り、優子は伐の視線に自分がバカにされていると思つたように伐を睨みつけると、

「何、お前のせいで、たぶん……確実に明日の午後くらいにCクラスと試召戦争になると思つてな」

「ちょっと、何よ。それ！！ Cクラスと試召戦争？ あたしはCクラスに恨まれるような事はした記憶はないわよ」

「大丈夫だ。お前はしてないと言つても必ず、起きる。キャラが被つてるからな。同族嫌悪つて奴だ」

伐は優子が原因で試召戦争が起きると言うつと優子は自分に心当たりはないと言つが伐は優子の様子などどうでも良いようであり、

「……そろそろ、時間か？」

「ちょっと、どこに行く気よ？ 説明しなさいよ！！」

「……うるせえな。そのうちわかるから、その時を待つてろよ」



伐は待っていた時間になったように一人で教室を出て行く。

## 第7問

(……Cクラスが漁夫の利を狙っていると言う噂を聞いて協定要請ね……こんな見え見えの作戦にひっかかるなよ。元神童も所詮は元か)

伐はBクラスの『根本恭二』の立てた策にハマリ、Cクラスへの協定を結びに行ったFクラスを眺めながらため息を吐くと、

(噂の出所くらいは調べるよな。それに気付けば協定違反を盾にCクラスの教室で小者を討って終わり。康太の保険体育の点数も隠せるんだけどな。まあ、元神童の浅い底が見れたんだ。それに試召戦争の実戦を体験すると思えば俺にとっては都合が良いけどな。まあ、我らが代表様からの依頼もあるし、協力くらいしてやるけどな)

伐は面倒そうに頭をかいた時、雄二を先頭にFクラスの主力生徒が勢いよくCクラスの教室から出てくるのを見て、伐は気だるそうに歩きます。

「雄二!! ここは僕が引き受ける!! 雄二は姫路さんを連れて逃げてくれ!!」

(……自己犠牲? くだらねえ)

『吉井明久』はFクラスの代表の雄二と主力の瑞希を逃がすために追つてであるBクラスの生徒の前に立つと明久に協力するつもりなのか『島田美波』も明久に続くが伐はそんな2人の姿を鼻で笑うと、

「……下位クラス相手に待ち伏せね。Bクラスも程度が低いな」

『何だと貴様!!』

『こいつもFクラスか？ このザコどもと一緒に鉄人の鬼の補習室に送ってやる』

伐はBクラスを小馬鹿にし、Bクラスの生徒は伐に向けて伐を見下すように言い放つが、

「アキ、あいつ、誰？」

「わからないけど、逃げるチャンスかな？」

明久と美波は伐の登場に自分達が逃げるチャンスと思ったようでBクラスの生徒から少しづつ距離を取り始め、

「補習室送り？ やれるもんならやってみな。やるからには全員で来いよ。群れないと何もできないザコども……ん？ そうだな。試召戦争だから名乗らないといけないのか。黒須伐。別に覚えなくても良い」

伐は気だるそうにBクラスの生徒を挑発し、自分の所属クラスを名乗る事なく、自分の名前を名乗ると、

『ああ、お前を直ぐに補習室に送って坂本を倒さないといけないからな。Bクラス……』

「……残念だったな。ルールも理解していない。バカども、お前らは試召戦争中对戦クラス意外に試召戦争を仕掛けたルール違反で退場だ」

廊下にいたBクラス生徒全員が伐に試召戦争を仕掛けるが召喚獣システムが発動する事はなく伐はBクラスの生徒を鼻で笑う。

『ど、どう言う事だ』

「悪いな。俺はAクラスなんだよ。試召戦争はクラス対抗戦だ。破った人間は退場ってな。知ってるか？ ルール違反は試召戦争終了まで補習室行きなんだ。残念だったな。補習室へはお前らが送られるみたいだぞ」

意味がわかっていないBクラス生徒達に伐は気だるそうに説明をすると伐はBクラス生徒とこれ以上は話をする事もないと言い、振り返り歩き出すと伐の背後から西村教諭がBクラス生徒を補習室に運んで行く声が聞こえ、

(……さてと、これで兵力は減ったが、後は小者と元神童がどう動くかだな。まあ、これからやる事は盗んだ姫路の弱点を使つての脅迫くらいか？ まあ、脅迫も程度の低いものだろうけどな。少しだけ様子を見るか。小者だから後がなくなってきたからな。直ぐに動くだろうし)

伐は気だるそうにため息を吐くと恭二の次の作戦を持つようでCクラスの教室から恭二が出てくる事を待ち始めると、

「間違つて他のクラスに試召戦争を仕掛けて退場？ 使えないバカどもだな」

「恭二、大丈夫なの？」

「当たり前だ。所詮、Fクラスなんだ」

恭二は彼女であるCクラス代表の『小山友香』にかっこを付けているのかこの程度は何ともないと言い、

(……しかし、あの女、あの小者のどこを評価してるんだ？ まあ、男の趣味が悪いのもいるからな)

伐は2人の様子を見て気だるそうにため息を吐く。

「まあ、見てな。戦力を削るってのはこうやるんだよ」

「そう。期待してるわよ」

(……あれが姫路の鞆から盗んでいたものか？)

恭二は得意げに友香に封筒を見せるのを見て伐はそれが直ぐに何かと理解すると、

「それじゃあ、俺はこの件で少し姫路と話してくるから、昇降口で待っていてくれ」

「わかったわ」

恭二は瑞希を脅迫するために行くようで友香に待っていると一言い1人で歩いて行き、

(……あの程度の策を自慢するあたり、予想以上の小者だな。まあ、それなりに恥はかかせてやるか)

伐は恭二の背中を気だるそうな視線で見ると次の行動に移ろうとその場を離れる。

「どう？ 恭二、上手く行った？」

「ああ、これを見せたら、直ぐに頷いてくれたぜ」

しばらく、時間が明き、恭二は瑞希への脅迫を済ませてきたようで友香の隣に並ぶと友香に自慢げに言い、

（……見れば見るほど小者だ。それでも依頼を受けたからな）

伐は恭二の相手をするのも面倒になってきているようで眉間にしわを寄せると、

「おい。気をつけろよ」

（……彼女の前でカッコつけたいのもわかるが相手は選べよ。一先ずは回収だな）

自然に恭二が自分から伐にぶつかる場所に移動し、伐の計算通りに恭二は伐にぶつかりと恭二は自分からぶつかったにも関わらず、伐を威圧するように高圧的な態度で伐を怒鳴りつけ、伐は恭二の声など気にする事なく瑞希の封筒を恭二の制服から抜き取り、恭二をくだらないものを見るような視線を向ける。

「お前、聞いているのか？」

「……ぶつかってきたのはそっちだろ」

「おい。調子に乗るんじゃない？　ぐっ！？」

恭二は伐の視線が気に入らなかったようで伐の胸倉をつかむと伐は気だるそうにため息を吐くと恭二の腹にひざ蹴りを喰らわせ、膝を付いた恭二を見下し、

「おい。口のきき方には気をつけろよ」

「ちょっと、あなた、何をするのよ！！」

恭二の髪をつかみ言うつと友香が伐を怒鳴りつけるが、

「あ？　こっちは正当な事を言ってるんだ。女の前だからって自分がぶつかったのにずいぶんと調子に乗ってるな？　威圧じゃなくて、お前に必要なのは謝罪だよな？　違うか？」

「て、てめえ」

「何だ？　俺は何もしてないのに胸倉をつかまれたんだ。謝罪もしないでずいぶんと反抗的だな」

伐は友香の言葉など知らないと言うつと恭二を地面に転がし、腹を蹴りあげる。

「こ、こんな事をして、良いと思ってるの？」

「ずいぶんと気丈じゃないか？　良いも何もそのバカが……何だ？　自分からケンカ売ってきたくせに気を失いやがった。つまんねえ」

友香は伐が表情を変える事なく恭二を蹴りあげている姿に声を震わ

せながら言つが伐は恭二の意識が途切れるまで恭二の腹を蹴るとつ  
まらなさそうに恭二と友香を置いて歩き出す。



## 第8問

(……まあ、わかつてはいたが、まんまと乗せられたわけだな)

伐は気だるそうに優子につかみかかる勢いで宣戦布告をしている。クラス代表の友香を見て気だるそうにため息を吐くと、

「……黒須くん、あたしが小山さんに敵意を向けられる理由を教えてくださいませんか」

「小山さん、凄い勢いだっただね」

友香が帰った後、額に青筋を浮かべた優子が伐に声をかけ、愛子は先ほどの友香の様子に苦笑いを浮かべる。

「……あ？ 何で、俺が原因だつて決めつけるんだ？ 悪いが、俺は個人的には小山はバカにしたが、あいつの敵意はお前に向かってただろ。俺には関係ねえよ」

「それなら、何で、あたしがあんな事を言われなさいいけないのよ！……」

「……お前の本性が関係してるんだろ」

伐は自分には関係ないと言うが優子が納得するわけもなく、伐を怒鳴りつけるが伐は優子の問題だと言い立ち上がると、

「……開戦は午後からだっただね。俺は少し出てくる」

「うん。いつてらっしゃい」

「待ちなさい！！　あたしの質問に答えなさい！！」

「木下さん、落ち着いてください」

伐は気だるそうに教室を出て行き愛子は伐を見送るが優子は納得がいかないため伐を追いかけて行こうとするが美穂と数名の女子生徒が優子を引き止める。

（……さてと、これの使い道をどうするかだな？　コピーは終わらせてあるからな。返して恩でも売ってくるか？　しかし、今時、ラブレターね。それも観察処分者相手に……Ｃクラスの小山たんじゅんばかと言い、男の趣味が悪いな）

伐は廊下に出ると昨日、恭二の懷から抜き取った瑞希の手紙の中味を確認しており、気だるそうにラブレターを眺めながら欠伸をした時、

「そ、それは？　お、お前、それをどうしたんだよ！！」

「ん？」

伐の持つているラブレターを見て、明久が伐に殴りかかってくるが、伐は欠伸をしながら明久の拳を交わすと、

「ぐっ！？」

「……いきなり、人に殴りかかってくるとはどう言っ了見だ？」

表情を変える事なく明久のみぞおちにひざ蹴りを喰らわせるとバランスを崩した明久の足を払い、躊躇する事なく明久の腹に蹴りを入れながら聞く。

「お、お主、いきなり、何をするのじゃ!？」

「ん？ 妹の方」

「ワシは男じゃ!？」

躊躇する事なく、明久に制裁を加える伐を見て、優子の弟である『木下秀吉』が驚きの声を上げるが伐はどうでも良いようで気だるそうに秀吉を妹と言うと秀吉は声を上げて自分は男だと言うが、

「おい。人にケンカ売ってきたくせに何、這いつくばってるんだ？  
ゴミクズ」

伐は気にする事なく、しゃがみ込むと明久の髪をつかみ無理やり苦痛に満ちた明久の顔を覗き込む。

「お、お前がなんで、それを持ってるんだよ？」

「これ？ 昨日、拾ったんだよ。お前みたいに意味もなく俺にケンカ売って来たバカを這いつくばらせた時にな」

明久は伐を睨みつけるが、伐は気だるそうに言うつと、

「それじゃあ、何で、姫路さんは」

「……… 知るかよ。これがその姫路とか言う奴に制限をかけるのに必

要なら、ダミーでも用意したんだろ」

明久は驚きの表情を隠せないようにで呟くが、伐は気だるそうに言う  
と、

「それで？ 事の真相を確かめる事なく、野良猫<sup>おれ</sup>にケンカ売った意味はわかるか？ ちなみに俺がこれを拾った時はケンカ売って来た小者は気を失って惨めに地面に這いつくばってたぞ」

「う、ご、ごめん。僕の勘違いだった」

明久は伐に謝ろうとするが、

「……悪いな。今の話を聞いたら、今からお前がどうなるかわかるよな？」

「で、できればわかりたくないかな？」

「そうか。わからないなら、教えてやろう」

伐は明久の謝罪など聞きいれる事なく、明久の頭を床に叩きつける。

「一先ずは腕の2本と足2本で許してやる」

「それは許した行動じゃないのじゃ!？」

明久は反応できないが伐は気にする事なく言い、秀吉は伐の行動に驚きの声を上げると、

「うるせえな。邪魔するなら、お前も同じ目にあわせるぞ。ゴミク

ズの1人や2人、くたばろうと戦況には関係ねえだろ」

伐は秀吉を含めたFクラスだけではなく、Bクラスの生徒も見下したように言うつ伐に向けて敵意の視線が向けられるが、

「別に殺つてやつても良いが、今は試召戦争中だろ……そう言えば、昨日もクラスも確認しないでケンカ売って補習室送りになったバカがいたな。まあ、そんなバカ、FはまだしもBにはいない……ああ、昨日のバカどもはBだったな。程度が低い同類は哀れだね」

伐は自分に向けられる敵意を鼻で笑い、伐に向けられる敵意はさらに強くなって行く。

「そうだな。もう1つ、良い事を教えてやる……俺にケンカを売るのは勝手だがな。その時は覚悟はしておけよ。その程度の敵意にはなれてるんだよ。つまらなすぎて、欠伸がでる」

「な、何を言っておるのじゃ？」

伐は自分に向けられる10数名から敵意はつまらないとため息を吐くと秀吉は伐の言葉が信じられないようではあるが、

「なら、受けてみるか？<sup>リアル</sup> 現実も知らない子供ども<sup>ガキ</sup>、俺は殴り合いでも一向に構わないぞ」

伐は小さく口元を緩めると伐は淡々とした口調でまるで小さな子供が悪意もなく虫けらの命を奪うような邪気のない笑みを浮かべると、そんな伐の笑みに周りにいた生徒達は自分達が伐にとって虫けらと変わらないと本能で察したようで伐の周りから距離を取り、

「やれやれ、その程度の気概もないのか？　まだ、このバカの方がマシか？」

「ぐほっ！？」

「ん？　起きたか？　気付けにもう2、3発、蹴るか」

伐は気だるそうに床に倒れたままの明久の腹をけると明久は痛みで目を覚ますが伐はそんな明久を見て特に興味もなさそうに5発、腹に蹴りを入れると気だるそうに欠伸をしながら歩き出し、

（……ん？　そう言えば、これ、どうするかな？　まあ、どうでも良いか。一先ずはタバコ休憩だな。試召戦争にでねえと木下がうるさそうだし）

伐は懐にある瑞希のラブレターの事を思い出すが興味はないようで瑞希のラブレターを懐にしまったまま、タバコ休憩をするために屋上に向かう。

## 第9問

(……この使い道ね。別に觀察<sup>バカ</sup>処分者も焚きつけられてるみたいだしな。これの必要性はないか?)

伐はタバコをくわえながら瑞希のラブレターを眺めていると、

「あ、あの……」

「ん？」

遠慮がちに伐を呼ぶ声が聞こえ、伐は声のした方向を見ると瑞希が伐に近づいて良いのかわからないようで少し距離を取って立っている。

「……何かようか？」

「あ、あの。よ、吉井さんと木下さんから、あなたが私のラブレターを持ってしていると聞いて」

伐は不機嫌そうに返事をする。瑞希は自分の心配事の原因であるものを伐が持っている事を聞いてここにきたと言つと、

「……これか？」

「は、はい。あ、あの、それを返していただけませんか？」

伐は瑞希とラブレターを交互に見た後に瑞希の目の前に出すと瑞希は伐に近づいてくるが、

「……こんなものにかまけてるなら、自分のやるべき事をしたらどうだ？ お前の都合でクラスの奴らに迷惑をかけてるのに、気にするのはこんな紙切れか？」

「そ、それは……」

伐は気だるそうに瑞希の行動を責めると瑞希は伐の言葉に口どもつてしまう。

「……そうだな。Bに勝てたら返してやる。できなかったら、見せものにでもしてやるよ」

「そ、そんな、酷いです。あなたに何の権利があつて」

「……拾い主にはそれくらいの権利があつても良いだろ。これのせいでバカどもに因縁を吹っかけられたんだからな。文句があるなら状況を理解しないで俺にケンカを売ってきた。お前の想い人にでも言えよ」

伐は気だるそうに欠伸をしてタバコを携帯灰皿に押し付けると立ち上がり、瑞希に返す条件を言つと瑞希は伐を非難するように言うが伐は文句は明久に言えと言いつつ瑞希の肩を叩くと彼女が気づかないように彼女のポケットの中にラブレターを戻し、屋上を後にする。

（……俺も甘いね。まあ、あのままからかつてるとあの人の約束も破りそうだしな）

伐は階段を降りながら、自分の行動に苦笑いを浮かべていると、



「黒須くん、いつまで遊んでるつもり？」

「……何だよ。俺がどこにしようが俺の勝手だろ？」

「そんなわけないでしょ。Cクラスとの試召戦争も始まるの。あなたがいないと始まらないでしょ？」

優子は伐を呼びにきたようで伐を見つけるなり怒鳴り声を上げ、伐は気だるそうに優子には関係ないと言うが優子は伐の腕をつかみ伐に教室に戻るように言う。

「……俺がいないと始まらない？ たかがCクラスだろ。それに作戦を立てるくらいに頭が回る奴がいたとしても、小山は力攻めたんじゅんばかでくる。戦術も何も必要ないだろ」

「そう考えられる人間がウチのクラスにいると思う？ 前に黒須くんが言った通り、悔しいけどあたし達はそう言う作戦とかを考える能力は今はないの」

「……今ね。それはいずれは身につけるって事か？ ずいぶん強気だな」

伐は自分がいなくてもどうにかなると言うが優子はAクラスが試召戦争をするには伐は重要なピースだと言うと伐は優子の言葉にくすり笑うと、

「何よ？ あたしにはそんな力がないって言うの？」

「……さあな。ただ、求めなければ何も手に入らない。少なくともお前はその資格は持っているんじゃないのか」

優子是不機嫌そうな表情をすると伐は気だるそうに言い、

「……タダ働きは野良猫おれの流儀に反するんだけだな。まあ、あのリクライニングシートは寝るのにちょうど良いからな」

「……授業中は居眠りしないで」

仕方ないから協力してやると言うとな優子は伐の言葉にため息を吐き、

「……ほら、行くぞ」

「わかってるわよ。と言うか、あたしが呼びにきたんでしょ!!」

2人はAクラスの教室に戻る。

「戻ってきたね。やっぱり、黒須くんを連れてくるのは木下さんが一番だね」

「……久保、わけのわかんねえ事を言うな」

伐と優子が戻ってきたのを見て利光が言うとな伐はくだらない事を言うなと言い、

「……黒須、優子から話は聞いてる?」

「ああ、しかし、俺に何をすれと言うんだ? それしだいに対応が変わってくるんだが」

「対応が変わるってどう言う事よ?」

翔子は伐に状況を確認すると伐は気だるそうに自分の役回りを教えろと言うと、優子は伐の言葉の意味がわからないようで文句がありそうに首を傾げる。

「……決まってるだろ。こう言う人数のある戦場で必要なのは戦略を考える軍師、その作戦を遂行するのに部隊をまとめる部隊長、後は戦況の変化に対応するために軍師、部隊長間を行き来する人間が必要だ」

「一先ず、軍師じゃないの？ 黒須くん以外にまともに戦略を立てられる人もいないだろうし」

「そうね……まずは作戦を立てないといけないからね」

伐は気だるそうにとりあえず、必要とされる役回りをあげると愛子と優子は伐に軍師の位置に立てと言うと、

「……それは俺の立てた作戦に全面的に従うって事で良いんだな？」

「……黒須、それはどう言う事？」

伐は全権を任せるかと言い、翔子は首を傾げる。

「そうだろ。俺を信用しないで勝手に戦われて総崩れって、惨めな真似はしないだろうな？ って事だ。俺が退けと言ったらどんなに有利な状況でも指示通りに動く事はできるかって事だ。頭は良くても場慣れしてないからな。Ｃクラス程度が相手なら余裕だろうが、人の心情に付け込んでくるバカが相手だとそこに付け込まれるからな。現に付いてきた奴がいるから、俺達はＣクラスと試召戦争をす

る事になつてゐるんだろ」

「……それって、この試召戦争にFクラスが関わっているって事？」

伐はCクラスなど眼中にないと言うと伐の言葉に優子はこの試召戦争がFクラスが原因で起きていると理解したようで眉間にしわを寄せると、

「……今頃、気づいたのかよ。少し考えればわかるだろ。小山はお前を名指しでここにきたんだ。お前の弟がお前のマネをして挑発したんだろ」

「……そう。秀吉がね」

「ゆ、優子、どうしたの？ 目が怖いよ」

伐は気だるそうにこの試召戦争がFクラスの策略だと言うと優子は眉間にしわを寄せながら弟の秀吉の名前を呟くと優子の様子に愛子は苦笑いを浮かべる。

## 第9問（後書き）

番宣

リトルバスターズ！の二次小説を投稿しました。

『あの日の約束』と言う作品です。

神北小毬の幼なじみが主人公な作品です。リトルバスターズ！もやっ  
ったよ。って人たちは見てくれると嬉しいです。

## 第10問

「それで、どうするつもりだ？」

「黒須くん、君はどう言う作戰を考えているんだい？ それを参考に教えてくれないかい？」

伐は気だるそうに言う。利光は伐にどんな作戰を考えているかと聞き、クラス全体も伐に説明を求めるような空気になっているおり、

「……作戰ね。現状で作戰と言えるものを考えられると思うか？」

「それって、作戰はないって事？」

伐はため息を吐くと愛子は伐の言葉に首を傾げる。

「作戰はないと言うよりは今回は戦力分析と適正検査だ。さっき言った人間を見極めるためのな。後は1つやっておきたい事は……」

「……腕輪の能力」

「そう言う事だ。現状で腕輪持ちは俺と代表様と工藤の3人。Aクラスでも腕輪持ちは3人か」

伐は今回はクラスの人の適正と腕輪の能力を見たいと言うと、

「3人だけなの？」

「……ああ。現状で今の学年での腕輪持ちは5人。うち意外だとF

の姫路に土屋康太」

愛子は予想していたよりも腕輪所持者が少なかったようで驚きの声を上げるが伐は興味無さそうにAクラス以外の腕輪保持者の名前を上げ、

「……腕輪は使ってみないと能力はわからないからな。代表様は使う機会がなくても少なくとも俺と工藤のは確認しておきたい」

「姫路さんの腕輪は熱線だったわよね？」

「ああ、数学はな」

「数学は？　と言うのはどう言う事だい？」

伐は腕輪を使ってみたいと言うと優子は瑞希の腕輪の事を思い出しながら言うが伐は気だるそうに数学しか能力は確認してないと言い、利光は首を傾げる。

「400点オーバーは腕輪を持つ。能力は1つとはどこにも書かれていない。もしかしたら教科事で違う可能性だってあるだろ」

「……黒須の言う事も一理ある」

伐は腕輪の能力が1つとは限らないと言うと翔子は伐の言う事は正しいと頷くと、

「それじゃあ、黒須くんは2教科の腕輪を持っているわけだから、能力は確認したいよね？」

「そうだな。少なくとも1つ、姫路の腕輪で能力がわかっている数学は確認する必要がある」

愛子は複数の腕輪所持者である伐の腕輪の能力確認は必要だと頷き、伐は数学だけでも確認したいと言う。

「それじゃあ、黒須くんは今回は前線に出ると言う事で良いのかい？」

「そうだな。今回は前線で個人の戦い方が見たい。それで次以降を決めるのが妥当だな」

「……作戦立てるって言った意味がないじゃない」

利光は伐の今回執る作戦を言うと優子は前置きはなんだつたと言いたいようにため息を吐き、

「意味はあるだろ。お前らは他人の評価に敏感だからな。格下だと思っている俺に品定めされるんだ。おかしい事はできないだろ」

「……伐くん、口が悪いよ」

伐はクラスメートを挑発するように笑うと愛子は苦笑いを浮かべる。

「今回は力攻めだ。だけど、これだけは守れ。お前らは戦闘つてもになれていないだろうからな。実戦でなれるんだ。戦闘は必ず1対1に持ち込め、戦闘なれしてなくても100点程度の差があるはずだ1対1じゃ余程の事がないと負けない。それくらいはできるだろ？」



「……当然でしょ」

「後は、戦闘が終わったら、直ぐに回復試験を受けに行け。連戦が起きる可能性もあるからな」

「連戦ですか？」

伐はクラスメートに必ず、1対1に持ちこめと言うと優子是不機嫌そうに頷くが伐は気にする事なく、戦闘を行った人間には回復試験を受けるように言つと美穂が意味がわからないようで首を傾げると、

「……黒須、説明」

「……ああ。回復試験を受けさせる理由は3つ。1つ目は戦闘を経験しない人間をなるべく出したいくない。前のめりにもならないだろ」

「……確かに回復試験を心がけていれば前のめりになる事はないね」

翔子は伐に詳しい説明を求めると伐は気だるそうに説明を始め出し、利光は伐の意見には頷き、

「2つ目は今も言つたが連戦への対応。そして、3つ目はCクラスを全員補習室に送るため」

「……3つ目はいらなくないかな？」

伐は続けて2つ目と3つ目の理由を言つと愛子は苦笑いを浮かべるが、

「やるからには2度と逆らわないように徹底的に潰す。逆らう気な

んで2度と考えられなくなるくらいにな」

伐は表情を変える事なく言い切る。

「後は各自で課題でも決めろよ。さつさと1匹倒して、腕輪を取りに行くのかな」

「……確かに試召戦争中は単体教科で回復試験を受けれるから1教科に絞るのは悪くない」

伐は各自課題を持って今回の試召戦争に挑めと言つと翔子は伐の意見に頷き、

「……私達はFクラスの策略に巻き込まれてCクラスと試召戦争をする形になった。これは試召戦争を学ぶと考えて各自、考えて動いて欲しい。Cクラスを格下だからと考えて油断しないように」

「違う。代表様、下位クラスは見下せ」

翔子は代表として戦意をあげるように言うが伐は翔子の言葉は違うと言つと、

「あいつらは格下だ。だから、負けるわけにはいかねえんだよ。負けた時点でお前らも格下のゴミクズだ。搾取される側になるって事だ。負けて惨めな思いをしたいなら手を抜け。格下に負けそうになつている奴がいたら助けようと思うな。見捨てろ」

「黒須くん、それは言い過ぎじゃないかな？」

伐はCクラスを見下せと言い、利光は伐の言葉に割って入るが、

「これで良いんだよ。このクラスの成績はこいつらのプライドそのものだ。成績で負けたくないなら考える。負けな<sup>て</sup>いたための最善の手段をな。各自でそれを考えられるなら、他のクラスからの謀略がある<sup>ろ</sup>うが各自で対応できるだろ」

伐は負けないための手段を自分自身で考えろと言つとクラスメート達は息を飲み、

「蹴散らせ。蹂躪しろ。正義だなんだときれい事を並べたって結局は勝ち続けた奴の良いように歴史は塗り替えられるんだ。それくらい、お勉強が得意なお前らは理解出来るだろ？」

伐は気だるそうに欠伸をする。

## 第11問

「……左だ」

『は、はい』

Cクラスとの試召戦争が始まると伐は気だるそうに先頭に立ちながら、その的確すぎる目でCクラス生徒にAクラスの生徒を振り分けて行く。

「……1対1に持ち込めとは言ったけど、黒須さんの指示で戦場に行道ができてくるなんてね」

「……わけがわからないわよ」

伐は必ず1対1になるように人数を振り分けて行くためか、召喚フィールドには戦っていない人間が通り抜けて行く人間に回せる戦力はCクラスにはなく、伐の後ろから優子、愛子、利光の3人が後を付いて歩いて行くが、

「そんな事を言ってるくらいなら相手がいないなら戦争でも眺めてるよ。実戦経験もねえんだ。戦い方でも学んでろよ」

伐だけはこの試召戦争自体をくだらないガキの遊び程度にしか思っていないようで欠伸をした時、

『あいつが指揮官よ。ここで仕留めないと抑えきれないわ』

Cクラスの生徒の1人が伐がAクラスの要だと判断したようでCク

ラスの生徒8人が展開されていた数学のフィールドで伐に試召戦争を仕掛ける。

「黒須くん、手伝う?」

「必要はねえよ……まあ、実戦経験のないお前らに実戦つてのを見せてやるか」

「……そんな事を言つて負けないでよ」

愛子は流石の人数差に協力しようかと伐に言つが伐は気だるそうにため息を吐くと優子は伐をジト目で睨むと、

「まあ、お前ら、成績上位組は今日は試召戦争はお預けみたいだな」

『ずいぶんと余裕ね』

伐は面倒そうに1歩前に出るとCクラスの女子生徒の1人が伐を睨みつけるが、

「余裕? 当然だろ。目にも映らないようなゴミを払うのに本気を出す必要もないだろ」

伐は気だるそうな口調ではあるが女子生徒のすぐそばまで移動して耳元で言つと女子生徒は何が起きたかわからないように目を見開いて伐から逃げるように3歩ほど後ろに下がる。

「……威勢は口だけかよ。つまんねえな」

「黒須くん、遊んでないで始めなさいよ。戦闘の意思がないと思わ

れるわよ」

伐は女子生徒の様子に欠伸をすると優子はため息を吐きながら伐に召喚するように言い、

「……わかつてる。腕輪の能力も試したいからな。試<sup>サモン</sup>獣召喚」

伐は気だるそうに召喚獣が呼び出されるキーワードを口にすると伐の目の前の床には機械的な魔法陣が描かれて行き、伐の召喚獣を現れ、

『う、腕輪持ち!?!』

『あ、あんなにガラが悪そうなのに!?!』

伐に試召戦争を仕掛けたCクラスの生徒達はAクラスに見えない伐が腕輪を持っている事が信じられないようで驚きの声を上げるが、

「……なるほど、攻撃する位置によって削れる点数も違うわけか」

伐は興味無さそうにCクラスの生徒の召喚獣の1体の心臓部分に武器であるナイフを突き立てている。

「く、黒須くん!?! き、君は何をしているんだい!?!」

「あ? 分析に決ってるだろ。攻撃する位置や角度によって削れる点数。例えば」

『!?!?!』

利光は伐が表情も変える事なく、人の形をしている召喚獣の心臓にナイフを吐きだしている姿に慌てて声を上げるが伐は気にする事なく、1体の召喚獣が一瞬で倒された事より、倒された方法に顔を青くしていると、伐の召喚獣はその生徒の召喚獣の腕を切り落とし、

「心臓部を狙えば1撃、腕1本だと30点くらいか？ 足はどうなるんだ？」

『ちょ、ちよつと！？ こ、こいつは何なのよ！？』

伐は表情を変える事なく、次は足を落とすと言つと伐の様子を見た女子生徒は腰が抜けたのか廊下に腰を落とすが、

「足も腕と変わらないな。次は首だな……後、6匹か？ 他に試すべきは」

「ちょ、ちよつと、黒須くん！？ 何してるのよ！？」

伐は気にする事なく、Cクラスの生徒の召喚獣の首を切り落とし、召喚獣の頭は床に転がり、優子は伐の手で行われている惨殺に顔を青くして伐を止めようとする。

「……なんだよ？」

「いくらなんでもやり過ぎでしょ……！」

伐は気だるそうに優子を見るが優子は流石に伐の行動が人道から外れていると言つと、

「さっきも言っただろ。仕掛けてきたって事はこれくらいされる覚

悟があつたつて事だ。だいたい、俺はあくまでも召喚獣を倒しているんだ。知るか……まあ、このままだと腕輪の能力を使わなくても終わりそうだから……悪いな。そんな単調な攻撃を喰らってやるほど、俺はぬるくないんだよ」

『な、何で、あいつはあんなに召喚獣を上手く扱えるんだ！？』

伐は優子の言葉を鼻で笑うと伐が優子と話し始めたのを好機と思い男子生徒の召喚獣が伐の召喚獣に襲い掛かるが伐の召喚獣は男子生徒の召喚獣を交わすとナイフを使う事なく、男子生徒の召喚獣を蹴りあげ、男子生徒は驚きの声を上げるが、

「決まってるだろ。ただ、突撃とかつまねえ指示しか出せねえバカが勝てるわけねえだろ。召喚獣を動かす時の感覚を見定めるほどの学習能力も……悪いな。ゴミクズにはそんなものはないか」

「……わかるのかな？」

「……どうかな」

伐は召喚獣の攻撃箇所以外にも操作性も確認していたようでそれくらいもできないかと言うと愛子と利光は顔を引きつらせ、

「まあ、ある程度は理解できたからな。もう、飽きたからな」

伐は気だるそうに言った時、伐の召喚獣の腕に付けられていた腕輪が光り、

『な、何！？ 何なの！？』



『止める！？ 何をするんだよ！？』

『こ、こっちのセリフよ！？』

伐と対峙していた6名の生徒の召喚獣は同志討ちを始め出す。

「……混乱？ 魅了と言ったところか？」

「……何か、黒須くんらしい、特殊能力かな？」

伐は目の前で起きている同志討ちに自分の召喚獣の腕輪の能力を見て気だるそうに言っていると愛子は苦笑いを浮かべながら伐らしい能力だと言い、

「まあ、能力もわかったからな」

「……お願いだから、見てる生徒がトラウマにならないように終わらせてよ」

伐は気だるそうに自分と対峙していたCクラスの生徒の召喚獣を始末しようとするとうと優子は倒し方を考えるように言っが、

「……知るか」

伐は優子の言葉を聞きいれる事なく、Cクラスの生徒の召喚獣を殲滅する。

## 第12問

「あ、あなたは昨日の!？」

「ん？ 悪いな。覚える価値のない人間の名前と顔は覚えられないようにしてるんだ」

伐はAクラス生徒を引き連れてCクラスの教室の中に入ると友香は伐の顔を見て驚きの声を上げるが伐は友香の事など知らないと言い、

「……あれは黒須くんの挑発だと思うかい？」

「……でしょうね。黒須くんの言葉を信じれば2年生全員の顔と名前を一致させてるんだから」

利光は伐が友香を挑発しているのかと優子に聞くと優子はため息を吐き、

「おい。遊んでるヒマがあったらさっさと片付けろよ。身の程を覚えてやりに来たんだからな」

「了解」

伐は気だるそうにAクラスの生徒達にCクラスの生徒を片付けろと言つと愛子は元気よく返事をする、教室には召喚フィールドが広がって行く。

「後はこのザコか？」

「……誰がザコよ。あなたと言い、木下優子と言い、私をバカにして!!」

伐は試召戦争がはじまったのを見て気だるそうに友香を雑魚と言うと友香は伐に向かい吠えるが、

「ザコにザコって言って何が悪いんだ？　Fクラスに寄せられた事も気づかないで考えも無しにAクラスに試召戦争を仕掛けた能無し代表様」

伐は友香の相手が面倒だと言いたげに気だるそうにため息を吐くと、

「Fクラスに寄せられた？」

「……小山さん、言わせて貰うけど、あたしは今、始めてCクラスの教室にきたのよ。朝にここをきたのはあたしの双子の弟」

友香は伐の言葉が信じられないように顔を引きつらせると優子はため息を吐きながらCクラスを挑発したのは秀吉だと言い、

「な、何よ！？　それ!？」

「バカに寄せられるって事はお前、Fクラス以下だな。妹の方が言った事も間違ってるだろ」

友香は知らされた事実の声を上上げるが伐は欠伸をしながら、友香をFクラス以下だと言い切った時、

「黒須くん、Cクラスの生徒倒し終わったよ」

「終わりました」

愛子と美穂はCクラスの生徒を倒し終えたと言う。

「そうか。後はこの代表様だけか？」

「簡単になんかやられないわよ」

伐は気だるそうに友香だけだと言うと友香は伐を睨みつけるが、

「とりあえず、お前らは回復試験を受けて来い。使った教科だけだから、1時間もあれば終わるだろ」

「……黒須くん、君は何をするつもりなんだい？」

伐は友香の視線を気にする事なく、Aクラスの生徒に回復試験を受けるように言う。利光は伐の言葉の真意がわからないようで首を傾げると、

「ん？ 時間稼ぎ、お前らの点数差だとこのザコを瞬殺するだろ。使い方もなれてないんだしな」

「じ、時間稼ぎですって」

伐は気だるそうに言い、友香は伐の言葉が頭にきたようで拳を握り締め、怒りをあらわにする。

「……とりあえず、黒須くんがおかしな事をしないかはあたしが見てるから、みんなは戻って回復試験を受けてきて」

「そう？　じゃあ、任せたよ。優子」

優子は伐を1人にすると友香の身が危険だと判断したようで自分もここに残ると言うつと愛子を先頭にAクラスの生徒は教室に戻って行き、

「さてと、何で勝負する。最初に言っておく、数学、保険体育、日本史は400点周辺だ。それ以外はCクラス程度だから、考えて選べばお前に有利な点数もあるかもな」

「……そこまで挑発する必要があるの？」

伐は気だるそうに友香に教科を選べと言うつと優子はこれも伐の挑発の一環だと思っているようであめ息を吐く。

「……英語で勝負よ」

「逃げたか。さすがザコ」

「う、うるさいわよ！！　Cクラス代表小山友香がAクラス……」

「……黒須伐。別に覚えなくても良い」

友香はすでにCクラスの負けは理解しているが伐に一矢報いるつもりのように伐に試召戦争を挑むと伐は面倒そうにため息を吐くと友香は伐に向かい試召戦争を挑むが伐のフルネームがわからなかったようで一瞬、止まると伐は欠伸をすると自分の名前を名乗り、

「黒須伐に英語勝負を挑みます。試<sup>サモン</sup>獣召喚！！」

「黒須伐。受ける。試獸召喚<sup>サモン</sup>」

友香は感情をぶつけるように召喚獣を呼び出すが対称的に伐は冷めきっている。

「……黒須くん、大丈夫なの？」

「大丈夫なんじゃないか？ どうせ、感情に任せた突撃くらいしかできねえだろ」

2人の召喚獣が呼び出されると友香の召喚獣の方が伐の召喚獣のより点数が高く表示されており、優子はため息を吐くが伐は友香はたいた事などできないと言つと、

「バ、バカにしないで、英語に関しては私の方が成績が良いのよ！  
！私の事をバカにした事を後悔させてやるわ！！」

友香は声を上げて伐の召喚獣に一直線に突進してくるが伐の召喚獣はその突撃を難なくかわすと友香の召喚獣に足を引っ掛け、友香の召喚獣は床にダイブし、

「……ここまでバカか？」

「……あまり、言わないであげなさい」

伐は友香の召喚獣の様子にため息を吐くと優子は友香が哀れになってきたようで苦笑いを浮かべるが、

「バ、バカにするな！！」

「だから、熱くなるんじゃないよ」

友香はそんな2人の様子にさらに頭に血が昇っているようで怒りから殺意に変わった視線を向け、伐は気だるそうに友香の召喚獣の四肢に自分の召喚獣の武器であるナイフを突き立てる。

「黒須くん、何してるの？」

「物理干渉はできないから、そう言う演出になっていると言う事で良いんだな。まあ、これで、動けないだろ。後は回復試験の時間まで補習室に送らなければ良いだろ」

優子は伐の行動の意味がわからないようで首を傾げると伐の召喚獣のナイフは友香の召喚獣と床にしっかりと突き刺さり、友香の召喚獣の動きは完全に封じられており、伐は決着がついたと言いたげに欠伸をするが、

「黒須くん、でも、戦闘の意思がないって判断されたらどうするの？」

「んなもんは定期的に召喚獣を切りつければ良いだろ。指を1本ずつ落として行くとかな。まあ、点数は変わらなくても頭を使うって言うのはこう言う事を言うんだ。単純な代表様」

優子は伐の行動にため息を吐くが伐は眉1つ動かす事なく、Aクラスの回復試験が終わるまで友香の召喚獣の点数を削り続けると言い、友香は召喚獣が動かせないように悔しそうに伐を睨みつける。

### 第13問

「黒須くん、回復試験、終わったよ」

「……そうか」

Aクラスは回復試験を終えたようであ子を先頭に翔子、利光、美穂のAクラスの成績上位陣がCクラスの教室に入ってくると伐は気だるそうに召喚獣に指示を出し、友香の召喚獣に止めを刺すと試召戦争終了の声が響き、召喚フィールドは閉じて行き、

「……」

「えーと、小山さん、あんまり、落ち込まないでね。はっきり言って相手が悪すぎたから、ぼく達も黒須くんが何を考えて作戦を立てるかなんて全くわからないし」

友香は何一つできなかったためか怒りをすでに通り越したようであ然としており、愛子は苦笑いを浮かべるが、

「……戦後処理か？ どうするんだ。代表様」

「……別に、設備を落として貰うだけで良い。私達からは特に言う事もない」

伐は気だるそうに戦後処理は翔子に任せると言うた翔子は何もないと言ひ、

「……わかったわ」



友香は頷く。

「代表様、俺の立ち位置はこのままで良いのか？」

「……私は良いと思う」

「……そうね。悔しいけど、今は誰も適任者はいないでしょ」

伐は自分のAクラスでの立ち位置を改めて翔子に聞き、翔子はこのまま伐に軍師的な位置にいて欲しいと言うと優子はため息を吐きながら翔子の言葉に頷き、伐の立ち位置が決まると、

「……なら、俺は軍師として言わせて貰う。俺達AクラスはCクラスに試召戦争を仕掛ける」

「ちょ、ちょっと、黒須くん、何を言ってるのよ!？」

伐は聞いたものが寒気を感じるような冷たい声で、Cクラスに試召戦争を仕掛けると言い、優子はいきなりの伐の言葉に驚きの声を上げるが、

「決まってるだろ。見せしめだ。こいつらをFクラスの設備以下になるまで叩き潰す」

「そ、それはやり過ぎじゃないかい？」

伐は表情を変える事なく言い切り、利光は眉間にしわを寄せながら伐にやりすぎだと言う。

「やりすぎ？　あり得ないな。これは戦争なんだから。さつきも言ったが戦争なんだ。負けた奴は2度と逆らえないように徹底的に潰す。3カ月経った時に今度は戦う気すら起こさないように牙は折り尽くす。ルールのにも勝った方が仕掛けるんだ。問題ないだろ」

「……人道的に問題だらけよ」

伐はCクラスを2度と這いあがれないように叩き潰すと言うが優子は問題あるとため息を吐き、

「知らねえよ。本物の戦争なら、負けた奴らは犯されて売られたり、殺されたりするんだ。命があるだけマシだろ……それとも、お前が負けた責任を取るか？　状況判断も出来ずにクラスを敗戦に導いた代表様。まあ、お前の返答しだいでは考えてやっても良いけどな」

「……」

伐は優子の言葉を鼻で笑うと友香は自分が考える方法とは確実に違い、完全に人を人と思わないように動く伐に寒気を感じているようでどうしたら良いかわからないようでその目は酷く怯えており、

「どうする？」

「……黒須、やりすぎ。黒須の依頼主は私。依頼主の命令は絶対。違う？」

伐は友香を舐めまわす用に見た後、彼女の耳元でささやくと翔子は伐を止めに入る。

「……我が代表様のお言葉だ。素直に従ってやるか。まあ、次に

仕掛けてきたら、どうなるかは自分で考えろよ。考えたらずの代表様。別に俺は試召戦争じゃなくてもお前らみたいなバカを服従させる術を持ってるんだ。昨日、地面を這いつくばってた小者を踏みつぶすみたいにな」

「……わかったわ」

伐は翔子の言葉に気だるそうに返事をする。友香に次はないと言うと友香は昨日、表情を変える事なく、恭二を蹴りつづけていた伐の様子を思い出したようで顔を真っ青にして頷くと、

「……それじゃあ、話は決まったから、後はお願い。帰ろう」

「……ええ」

翔子は友香にクラス設備を下げる事を任せるとAクラスの生徒に教室に帰ろうと言うと友香は翔子の言葉に頷き、Aクラスの生徒は廊下に出て行き、

「……黒須くん、やりすぎよ」

「……うるせえな。結果的にCは2度と逆らって来ねえよ。これで仕掛けてきたら、余程のバカだ」

優子は廊下に出るなり、伐の首元をつかみかかり言うが伐は知らねえと言い、

「……次はBだな」

「Bクラス？ どう言う事？」

伐は次に起きる試召戦争をBクラス戦だと言うと愛子は首を傾げる。

「……黒須、Fクラスが攻めてくるんじゃないの？」

「くるな。その前にBクラスがAクラスに試召戦争を仕掛けるようにしてくる。試召戦争の準備をしてるとか言わせてな。Bと戦うよりはFの方が楽だろ？　って感じにするためにFがBに勝っても設備交換はない」

「でも、それなら、Fクラスに勝てば終わりじゃないのかい？」

翔子は伐の言葉に首を傾げるが、伐はFクラスの策略の1つだと言うと利光は伐の意見とは違ってFクラスと試召戦争を行えば良いと言うが、

「……戦争の基本は相手をこちらのペースにはめる事、楽な方へ行けば罠がある。Fと戦うのは必然だろうが相手の罠をつぶせば相手に新たな思考を考えさせる時間ができる。そうすれば絶対だと考えていた作戦が有ってもそれを新たに練ろうや他の作戦の方が良いんじゃないかと言う考えもよぎって来る……ここからは心理戦や駆け引きも関わってくるからな。自分の手の中で誰もが踊ってると思ってる奴が自分が踊らされていると気づいた時の顔は見ものだ」

「……今更だけど、黒須くん、性格が悪いよね」

「本当に今更ね」

伐はFクラス代表の『坂本雄二』の考えなどすでに見透かしているようで雄二を鼻で笑うと愛子は伐の様子に苦笑いを浮かべ、優子は

ため息を吐くと、

「俺はBクラス戦が始まったら回復試験を受けるからな。お前らは今日と同じように戦ってる。少し点数が高くなっただけだ。なるべく1対1になるように戦え。複数で仕掛けてきたら必ず同数で戦え、連携でもしてみろ」

「……Cクラス戦は練習だったって事かい？ 黒須くん、君はどこまで見えているんだい？」

「さあな。少なくともFクラスが無様に負けるところは見えてる」

伐はBクラス戦は今日と同じように戦えと言うと利光は伐の言葉に眉間にしわを寄せるが伐は興味無さそうに欠伸をする。

## 第14問

「……汚い絵面だな」

「……そうだね」

Fクラス対Bクラスの試召戦争も終わったようで伐の予想通り、Bクラス代表の『根本恭二』がなぜか女装でAクラスに試召戦争の準備をしていると言うが伐は眉間にしわを寄せて優子と恭二の対談を見て言い、優子は苦笑いを浮かべ、

「……木下さんの顔が引きつっているけど、黒須くん、行かなくても良いのかい？」

「……知らねえよ。あいつには試召戦争は直ぐにしてやると言えっ  
て言ってるんだ。長々と小者の口上に付き合えとは言ってるねえ」

利光は伐に試召戦争をまとめてこいと言いたげだが伐は気だるそうにため息を吐き、優子に任せておけと言うと、

「……わかったわ。明日の朝からで良いわね」

「ちょ、ちよつと待て！？ AクラスはCクラスと試召戦争を終えたばかりじゃないのか！？」

「何？ 準備をしてあるんでしょ。だいたい、Cクラスとの試召戦争であたし達Aクラスがたいした点数が減るわけがないでしょ。話はこれで終わりよ」

優子は伐の指示通り、Bクラスとの試召戦争をすつとすつと恭二は試召戦争は都合が悪いようて慌てるが優子は対談はこれで終わりと言ひ、恭二に帰るようて言つ。

「……工藤、あの汚物を見た記念にあの汚物の写真をウェブ上で発信しようと思つんだが、何時間で炎上するか賭けないか？」

「そうだね。賭けるものしだいかな」

伐は追ひ払われる恭二に聞こえるようて言つと愛子は伐の言葉に苦笑いを浮かべると、

「じゃあ良い。これで良いな」

「お、お前、何を！？ お、お前がどうしてAクラスなんかに！？」

伐は気だるそうに恭二の女装写真をインターネットでばら撒き、恭二は伐を止めようとするが伐の顔を見て、昨日の事が思い出されたようて顔を真っ青にするが、

「……悪いな。そんな汚い女装をする人間に知り合ひはいない」

「黒須くん、女装する人に知り合ひがあるような言い方ね」

伐は恭二など知らないと言つと伐の言葉に優子は眉間にしわを寄せ

「あ？ 知り合ひがいて悪いか？」

「……いるんだ」

伐は優子の言葉に不機嫌そうに言うと愛子は苦笑いを浮かべ、

「……帰るか」

「ちょっと、黒須くん、まだ、帰るには早いわよ」

「……汚いものを見て、具合が悪くなったんだ」

伐は恭二の女装の汚さが早退の理由だと言うと教室を出て行き、

（……一先ず、一服してから帰るか？）

懷の中にあるタバコの箱を確認すると屋上に向かって歩き出す。

（……さてと、明日はどれくらいやれるかね。まあ、数学と英語だけだからな

保険体育の腕輪は試せなかったからな。明日、様子を見て使うか……後は康太の腕輪の能力は『加速』か？ 単純だが単純だからこそ厄介だな）

伐は屋上に向かう途中でBクラスとFクラスの決着をつけたのがFクラスの『土屋康太』の腕輪の能力だと聞こえたようでタバコをくわえながら頭を搔くと、

「あ、あの……」

「……」

瑞希がラブレターを返して欲しいように伐に声をかけてくるが伐は



気だるそうに瑞希の制服のポケットを指差し、

「私のポケットがどうかしたんですか？」

「……目的のものなら、とつくに返している」

瑞希は伐が何を指差しているかわからないようで首をかしげ、伐は気だるそうにすでに返していつ事を告げる。

「……ほ、本当です！？ い、いつの間に」

「……お前が因縁つけてきた時にとつくに返してる。用がないなら消えろよ。お前の相手をしているほど暇じゃねえんだよ」

瑞希はポケットの中身を確認し、自分のラブレターを見つけ驚きの声を上げるが伐は興味無さそうに瑞希に消えろと言うと、

「あ、あの。ありがとうございます。これは凄く大切なものだったので取り返してくれてありがとうございます」

「……たかが紙切れだろ。そこには何も詰まってない」

瑞希は帰る気はないようで伐に頭を下げるが伐は興味無さそうに瑞希の想いがつまったラブレターを『たかが紙切れ』と言い放ち、

「そ、そんな事は」

「……うるせえな」

瑞希は伐の言葉を否定しようとするが、伐は興味無さそうに立ち上

がり、

「……」

「ど、どこに行くんですか？」

「……帰るんだよ。お前の相手なんかしてられるか」

瑞希は伐に声をかけるが伐は瑞希の相手をする必要はないと言い、屋上を後にしようとする。

「ま、待ってください!？」

「……お前は何がしたいんだ？」

瑞希はまだ伐に話す事があるようで慌てて伐を追いかけようとするとバランスを崩し前のめりに倒れそうになると伐は眉間にしわを寄せながら、瑞希の制服をつかみ、彼女の屋上の床へのダイブを止めると、

「あ、ありがとうございます。ラブレターの件ともども」

「……それで、何のようだ。聞いてやるからさっさとしろ」

瑞希は改めて助けて貰った事を伐に頭を下げ、伐は瑞希の話聞いた方が早く終わると判断したようで要件を言えと言い、

「あ、あの。お名前を教えていただきたいんですけど」

「聞いてどうするんだ？ お前には俺が何者だろうと関係ねえだろ。」

それとも、これを西村にでもチクリに行きたいのか？」

「そ、そうじゃないです」

瑞希は伐に名前を教えて欲しいと言うが伐は教えるつもりはなく、くわえているタバコを咎めにきたのかと言うと瑞希は大きく首を横に振り、

「これで用件は終わりだな」

「あ、あの」

「……動くな」

「は、はい!？」

伐は瑞希にそこから動くなと言うと瑞希は慌てて返事をする。

「……じゃあな。教室に戻って回復試験の準備でもしてろよ」

「は、はい」

伐は気だるそうに欠伸をすると屋上を後にする。

## 第15問

「……面倒だな。帰っても良いか？」

「……良いわけがないでしょ」

伐はAクラスとBクラスの試召戦争が始まり、Cクラスとの試召戦争で使用した数学と英語の回復試験を受けているとお目付け役の優子がため息を吐く。

「……木下<sup>ふじよし</sup>、ここにいないで戦ってこいよ。お前はCクラス戦で戦ってないんだからな。1番、慣れておかないと行けないんじゃないのか？」

「別に、あたしがいなくたって負けないでしょ。それにあたしは自分で言うのもなんだけど、熱くなっちゃうから、前に出たら戦線を乱しそうだし、みんなも黒須くんの監視はあたしの仕事だって言うのよ。適材適所らしいわよ」

伐は気だるそうに優子に試召戦争に参加して来いと言うと優子はクラスメート達から伐の監視を押し付けられたようで不機嫌そうに言う、

「別にお前が監視しようが、俺は俺で動くぞ。それとも、俺に首輪をつける自信でもあるのか？」

「お、おかしな事を言わないでよ!？」

伐は優子の監視などいつでも抜け出せると言うと言った伐の言葉に優子は

慌てる。

「何、慌ててるんだ。しかし、それなりに指示は守ってるみたいだな」

「まあ、一応、次はFクラスとの連戦みたいだね。必要ないとは思うけど、Fクラスには姫路さんもいるから、あたし達Aクラスだって補習室送りにはなりたく無いわよ」

「そうか？ 勉強ばかりをしてるお前らは別に西村に連れて行かれたってあまりやる事は変わらないだろ」

伐は試召戦争が始まると戦争を終えたクラスメート達が数人、回復試験を受けに戻ってくる様子を見て表情を変える事なく言う「優子は誰も『鉄人の鬼の補習』は受けたくないと言うが、伐はAクラスには特に苦痛じゃないだろと言うが、」

「そんなわけないでしょ。それに昨日、黒須くんが言った『負けたら、終わり』って言うのも関係あるんでしょ」

「……プライドが高いのは融通が利かなさそうだな」

優子はAクラスのプライドとして負けられないと言うと伐は気だるそうにため息を吐き、

「……人が本当に成長するのは負けた後の行動なんだけだな。それ知らないって事は本当に現実もしらないあまちゃんぞろいだな」

「黒須くん？」

伐にとつてはAクラスの生徒も獲物でしかないように悪意を込めた言葉をつぶやくと優子は伐の空気が変わった事を本能的に感じたように伐の名前を呼ぶ。

「……さてと、行くか」

「ちょ、ちよっと、回復試験はどうするのよ？」

「これ以上、やったって無駄だ。悩んだってわかんねえ問題はわかんねえんだ。解ける問題は解いた。数学は400を超えてれば良いんだ。英語もこの間よりは取れてる」

「ちょ、ちよっと、待ちなさいよ!？」

伐は優子の言葉を気にする事なく席を立つと気だるそうにあくびをしながら教室を出て行き、優子は慌てて伐の後を追いかけるが、

「……付いてくんないよ。タバコを吸いに行くだけだ。と言うか、邪魔だ」

「タバコを吸いに行くって言われて止めないわけがないでしょ!!」

「……なら、偵察だ。お前みたいに口うるさい奴が付いてくると直ぐにバレルだろ。後は俺はBクラス戦は出る気がねえからな。そっちで勝手に済ませろ」

伐は優子に付いてくるなと言うと廊下で繰り広げられているAクラスとBクラスの試召戦争など気にする事なく、屋上に向かって行き、

「あれ？ 優子、黒須くんはどこに行ったの？」

「……偵察らしいわよ」

愛子は伐が歩いて行く姿を見て優子に声をかけると優子是不機嫌そうに言う

「愛子、直ぐに終わらせるわよ。あたしは試召戦争が始めてだから、援護をお願い」

「うん。おっけーだよ」

優子は伐の背中を睨みつけながらも、自分だけ試召戦争を経験せずに後々で足を引っ張るわけにもいかないので、愛子に援護を頼んで試召戦争を開始する。

「雄二、どうするんだよ。BクラスとFクラスを天秤に掛けさせてウチに有利な条件でAクラスと試召戦争をするんじゃないの？」

「……うるさいぞ。明久」

（ん？ 観察処分者バカと坂本雄二きりしまたんな……康太きのしたに木下弟もつと、島田ぜつべきに姫路？  
……Fクラスの主力だな）

伐は屋上のドアを開けるとFクラスの主要メンバーが何か話し合いをしており、伐は気だるそうにため息を吐くと会話の聞こえるギリギリの距離に座ると懐からタバコを出してオイルライターで火を点け、

（……だりいな。サボるか？ ……いや、サボると木下ふじよしがあいつの挑発になるか）

優子が対応すると簡単な挑発で乗せられFクラス有利の試召戦争にさせられそうなため、タバコの煙を肺の中一杯に吸い込んだ後、大きく息を吐くと、

(……まあ、CもBも潰した後だからな。これ以上、試召戦争を続けると他のクラスも押し寄せてくるとか言って、クラス同士では勝ち目なんてありえないから、代表者同士の対決に持ち込む程度か？  
……坂本が冷静に自分達の今の戦力分析をできるかは……できねえだろうな。バカだからな。こちらの戦力分析もしてないようだしな。それなりに頭は周るとしても勝つ場合しか考えてない。敵の戦力を分析する事なく最悪の状況も考えられない策略家はつきりと言えは三下以下のザコだ。相手にもならねえし、それに気づかない周りはそれ以下だな。やりやす過ぎて欠伸しかでねえ)

微かに聞こえてくる会話に伐は雄二が自分の相手ではないと言うと雄二の考える事などお見通しなようで気だるそうに欠伸をすると立ち上がり、

(……そろそろ、決まったか？ 木下姉は頭に血が上った方が勢いがあるからな。工藤や佐藤、久保辺りがフォローしてれば終わりだな。処分はどうでも良いか？ 今回は俺は何もしてねえし……残り時間は時間まで寝るか)

タバコを携帯灰皿に押し付けると欠伸をしたまま、教室に戻って行く。



## 第15問（後書き）

どうも、作者と主人公です。

伐「……」

教室に戻る伐。伐の予想通りに決着はついているんでしょうか？

伐「さあな」

さてと久しぶりにここに来たわけですが、1つ質問？です。  
以前、書かせていただきましたが、ここでの伐のヒロインをどうしようか考えています。

現状でフラグが立ちかけているのは瑞希と優子。あとは感想板でG  
AUさんのところのクリス？（爆笑）

この作品はifですので本編とは違うヒロインを考えています。意見  
を聞かせていただきたいと思います。

1・姫路瑞希

2・木下優子

3・その他（名前）

これはあくまで意見を求めているだけです。投票制ではありません。  
こういう話が面白そうだから、瑞希or優子、もしくは別のキャラクター？  
と言う意見が欲しいです。

もちろん、ifなので小説家さんは自分の作品のオリキャラどう？  
とかでも良いです。面白そうなので。（爆笑）

伐「行き当たりばったりだな」

今更ですね。期限は特にないです。まず、この企画自体が怪しいですから。

## 第16問

(……予想通りでつまらないな)

AクラスとBクラスが試召戦争を行い決着がつくの見計らったかのようにFクラス代表の『坂本雄二』がFクラスの主力メンバーを引きつれてAクラスに宣戦布告をしに来ており優子が対応しているのだが内容は伐が予想したとおり代表同士の1対1と言う内容であり、CクラスとBクラスとの連戦もあったため、Aクラスの点数が削られていると言う事を前提とした話であり、伐はくだらないと言いたげに欠伸をすると、

「黒須くん、君はFクラスの宣戦布告をどう思っているんだい？」

「どうも思ってたねえよ。ただ、少しでも夢を見せてやった方が絶望の色つてのはより鮮やかになるらしいぞ」

「……何かまた考えているんですね」

利光が欠伸をしている伐にFクラスが試召戦争を仕掛けてきた理由を聞くが伐は気だるそうに言い、美穂は伐の様子に苦笑いを浮かべる。

「その提案受けるよ。その代わり、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね。お互い5人ずつ選んで、一騎打ち5回で3回勝った方が勝ち。って言うなら受けても良いよ」

「なんだ？ 俺以外が出る事はないから安心しろよ」

優子は伐からFクラスは代表同士の対戦を望んでくると言われていたようで伐に1度、視線を向けた後に伐と話をつけていたのか雄二の持ってきた代表同士の1対1の勝負にはのる事はできないと提案に条件をつけると、

「無理だよ。その言葉を鵜呑みにはできないよ。これは競争じゃないよ。戦争だからね。一騎打ちを提案してくるって事は何かあるんでしょ。それにあたし達は別にクラス間同士で全然かまわないしね。Fと勝負しても負ける気もしないし、DクラスとEクラスと連戦したってかまわないわ」

「……そうか。その条件を呑む代わりに、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハンデはあってもいいはずだ」

優子は笑顔だがこれ以上は引く気はないと言うと雄二はクラス同士での対戦は絶対に分が悪いと理解しているためかハンデをつけて欲しいと言い、

「黒須くん、どうするの？ ハンデはありで良いの？」

「まあ、構わないだろ。きりしまだんな坂本が考えているのは嫁の弱みを付いて1勝、後は姫路と康太の保険体育で3勝を狙っている」

「それなら、それを飲むと僕達は分が悪いんじゃないかい？」

愛子は雄二の提案に伐に意見を聞くと伐は雄二の提案にすでに雄二の考えなどお見通しなようで気だるそうに欠伸をすると利光はFクラスの提案に乗らない方が良いのではないかと言うが伐は自分のパソコンで何かを入力し印刷を始め、

「……その条件、飲んでも良い。木下、代われ」

「あ、あなたは！？ Aクラスだったんですか？」

「……………伐？」

優子が悩んでいると伐は優子の肩を叩き、交渉役から降りろと言うと優子は伐が出てきた事に意味がわからないと言う表情をし、Fクラスの瑞希と『土屋康太』は伐の姿を見て伐がAクラスにいる事に驚きの表情を隠せないようであり、明久と秀吉は表情を変える事なく明久を蹴り飛ばしていた伐の様子を思い出したようで顔を青くする。

「お前、何だ？」

「悪いな。元神童、お前の下等な策は木下のような単純には有効<sup>バカ</sup>かも知れないが俺には効かない」

「……………黒須くん、どう言うことかしら？」

雄二は突如、横から入ってきた伐を見て怪訝そうな表情をするが伐は興味なさそうに言い、優子は伐の言葉に眉間にしわを寄せるが、

「……………そうか。改めて、Fクラス代表の坂本雄二だ」

「……………黒須伐。別に覚えなくても良い」

伐と雄二は優子の事など気にする事なく、雄二は伐の力量を見極めようとしているのか目つきを鋭くして名乗り、伐はそんな雄二の視線など気にする事なく気だるそうに名乗ると、

「まずは木下が言った通り、お前じゃなくて、姫路が出てくる事が危惧されるため、1対1の勝負には乗れない。そのため、5対5の勝負で1、3、5戦目はFクラスが教科を決める。2、4戦目はAクラスに決めさせて貰う。後は工藤、俺のパソコンのプリンターで印刷したものを取ってくれ」

「これ？」

「ああ。大将戦が代表同士の1対1じゃない場合はFクラスを無条件で負けとすると言う事ともう1つ条件が書いてある。これに署名、捺印をして貰う」

Aクラスとして譲れない条件を話すと2枚の書類を取り出し雄二の前に置き、

「ああ。それくらいなら……坂本雄二、ハンコはないから拇印で良いか？」

「ああ」

雄二は2枚の書類に自分の名前を書き、伐はそれを受け取ると、

さかもとよめ  
「代表様」

「……呼んだ？」

「おい！？」

伐は書類の1枚をAクラス代表の翔子に渡し、雄二は意味がわから

ずに声をあげるが、

「坂本夫妻、婚約、おめでとう」

「……ありがとう。黒須は良い人」

「おい。それはなんだ？」

「ん？ ただの婚約届だ」

「……雄二、大切にする」

翔子は伐から渡された書類を大切そうに抱きしめる。

「どう言う事だ！？」

「あ？ サインした奴が文句言うんじゃないよ。そうだな。文句があるなら、1つ勝負をするか？ A対Fの試召戦争、負けた方が、1つ何でも言う事を聞く。お前らが勝ったら、これを取り戻せば良い」

「……その勝負、受けてやる」

伐は雄二は迂闊だと冷たい笑みを浮かべると雄二を挑発し、雄二は翔子の手のなかにある婚約届を取り上げたいよう伐を睨みつけると伐の挑発に乗り、

「……勝負はどうする？ 今から始めるか？ 明日にするか？」

「今からだ。明久、他の奴らを呼んでこい」

「う、うん」

伐は気だるそうにいつから試召戦争を始めるかと聞くと雄二は一刻も早く、翔子の手から婚約届を取り上げたいようで直ぐに試召戦争を始めると言い、クラスメートの『吉井明久』にFクラスの生徒を呼んでくるように言い、明久は直ぐにAクラスの教室を出て行き

「代表様、Aクラスの5人を決めるぞ」

「……わかった」

伐は翔子を呼びつけると雄二達Fクラスの生徒から放れて、試召戦争に望む5人を選ぶと言いクラスメートを集合させる。

「……黒須くん、いったい、どう言う事？ 黒須くんの言ってた通り、回復試験は終わらせてるし、あたし達はクラス同士でかまわないのよ」

「うるせえな。お前が危惧していた。姫路対坂本嫁の勝負は防げたんだ。問題ねえだろ。それにバカどもをしつけるのにはこっちの方が都合が良いんだよ」

優子は自分から交渉役を奪い取った伐に文句があるようで伐を睨みつけるが伐は何か考えているようで口元を緩ませながら問題ないと笑うと、

「状況を話すぞ。Fクラスは1戦目は木下秀吉、2戦目はたぶん、きのしたいもうと吉井明久3戦目に土屋康太の保険体育、4戦目で姫路瑞希、5戦目きりしまたんなに坂本雄二がでてくる。坂本がそれを崩して1戦目に姫路を持つて



くるなら多少評価を上げてやるがあのレベルじゃ、策を立てるとしては三下以下だ」

「黒須くん、何でわかるの？ それにFクラスがAクラスまで試召戦争を仕掛けるくらいまできたんだよ。三下以下って事はないんじゃないかな？」

「……バカか？ 上位クラスへの宣戦布告ってのはどこからでもできるだろ。策だ。なんだって言っても実がねえんだよ。本当に策士だと言うなら、最低でもどこかで設備を確保しておかねえといけねえんだよ。それがないと次がなくなる。それを理解できないのは三下だ。帰る場所のないって言うのはどれだけ、惨めかも理解してねえんだからな」

伐はFクラスの代表生徒の名前を出すと愛子は首を傾げるが伐は雄二の事を評価していないようで自分勝手な最低策士とだと斬り捨てるが、

「……雄二は最低じゃない」

「……2つ。1つは5対5を木下<sup>ふじよし</sup>が提案した時、坂本旦那は計算内<sup>きりしまだんな</sup>と言う表情をした。2つ目は、あいつは坂本は少なからず、俺達がFクラスを舐めていると思ってるのとD、Bクラスで自分の思い通りに策が進んだため、この学年には自分以上の策士はいないと勝手に思い込んでいる。自分の手を潰されているのにそれを認める事なく自分に都合の良いように事実を捻じ曲げているんだ。自分の考えに間違いはないってな。本来なら選択をできるところで勝てる可能性のある康太、姫路を持つてくるんだけどな。自分の手が間違っていないと思っているから、ここを変えてくる事はない。木下<sup>ふじよし</sup>はそれに気づいてなかったから、代わったんだ。元々、どんな手を使ったっ

て常識知らずのバカに負けるつもりはないがな。ノラ猫にケンカを売ったんだ。きちんとし知らせてやらないといけねえだろ」

翔子は雄二をバカにされた事に腹を立てているようで伐に向かい言う。伐は気だるそうにため息を吐いて油断と状況を分析し切れていないため、正当な評価だと言い、

「5戦目は坂本夫婦対決」

「……任せて」

「1戦目は木下姉妹対決。教科は相手が決めてくれるだろ。演劇バカの妹に負けるような事はねえよな？」

「……ええ」

「4戦目の姫路は俺が貰う」

「……黒須くん、悪いけど、君が姫路さんに勝てるとは思えないんだけど、単体教科は姫路さんに勝てる可能性はあるけど、数学の腕輪じゃ、相性は良くないんじゃないかい？」

伐は自分は瑞希と戦うと言うと利光は瑞希の相手では伐では役不足だと言うが、

「……言っただろ。絶望の色は夢を見せてやった方がより鮮やかになるんだよ」

伐はこれは戦争だと冷たい笑みを浮かべるとAクラスの生徒は伐の笑みに背中に冷たいものが伝ったようで声を失い、

「……それなら、黒須くんの予想が合ってるなら、ボクが3戦目に出るよ。噂のムツツリー二さんと戦ってみたいしね。保険体育はボクは得意だしね」

「……それなら、2戦目は僕が」

愛子が康太と戦ってみたいと3戦目に立候補すると利光も2戦目に出ると言っが、

「いや、お前じゃなく、佐藤、出る」

「私ですか？ 久保くんの方がよくないですか」

伐は迷うことなく、利光ではなく美穂に出るように言つと美穂は利光の方が成績は良いため首を傾げると、

「良いんだよ。久保は吉井相手だと手を抜きそうだからな。全力で潰せ」

「は、はい」

伐は気だるそうに美穂に任せると言い、美穂は伐の言葉に頷き、

「久保くん、問題ないかしら」

「……ああ。確かに黒須くんの言う事も否定できないしね」

「久保くん、優しいからね。手を抜いてスキをつかれる可能性もあるしね」

優子は利光に問題ないかと聞くと利光は伐が何を言っているか理解したようであり、愛子は利光を励ますように笑い、

「……それじゃあ、この5人での勝負」

「……ああ」

翔子は気合いを入れるように言うが伐は気だるそうに欠伸をする。

## 第16問（後書き）

どうも、作者と

伐「主人公だ」

始まったFクラス対Aクラス。本編とは違って伐対瑞希は4戦目。家庭科勝負はしないつもりです。（悪笑）

伐「めんどくさいから、あれで良いだろ」

いや、同じは面白くないですよ。それにノラ猫の流儀をFクラスにしっかりと教え込もうと思ってます。

ヒロインへのご意見。

前回も言いましたが、意見を求めているのであつて投票ではないです。意見を見て、どちらの方が面白いものが書けるかな？ って感じですよ。

伐「今はどうなってるんだ？」

一先ずは

瑞希3票、優子が5票、美穂（佐藤さん）は1票にまさかの深秋1票（爆笑）

伐「……バカの妹」

まあ、伐は苦手な人種だと思いますよ。ノラ猫対好奇心旺盛な子犬。

伐「……ないな」

特別問題では書いてみたいと以前から考えているんですがなかなか思いつきませんね。

## 第17問

「まずは1勝。よく殺った、木下、<sup>ふじよし</sup>これで返り血でも拭いてくれ」

「ありがとう。へえ、ハンカチ？ 借りるわ。意外と黒須くんって紳士ね」

「えーと、優子、黒須くん、優子の弟くんの生命活動がDEADになってるんだけど」

A対Fの5対5の試召戦争が始まり、1戦目は伐の予想通り木下姉弟対決になり、姉弟の間では周りが入り込めない何かがあったようで優子の勝利宣言がされるが、愛子は目の前に表示されている結果に顔を引きつらせるが伐と優子が気にする様子はない。

「2回戦を始めます。代表の方、お願いします」

「はい」

「……ここも黒須くんの予想通りね」

試召戦争を立会いをしているAクラス担任の高橋教諭から2回戦の呼び出しがかかり、美穂が前に出るとFクラスからは明久が美穂の前に現れ、優子は拳に着いた返り血を<sup>あせ</sup>伐のハンカチで拭きながら言

い、  
「これで2勝って事だね」

「それじゃあ、ぼくが決めて来ても良いって事だよね？」

「ああ。だけど、その前にやっておきたい事がある。ここで冷静になればバカじゃなかったって事だ」

「勝者、Aクラス代表、佐藤美穂」

利光は美穂の得意な物理が教科に選ばれた事に2勝目を確信すると愛子は自分で試召戦争に決着をつけてくると笑うが伐は何かやりたい事があるようで気だるそうに欠伸をした時、高橋教諭の声で美穂の勝利が宣言され、

「佐藤さん、おめでとう」

「ありがとうございます」

美穂は嬉しそうな表情でAクラス陣営に戻ってくる。

「3回戦を始めます。代表の方、お願いします」

「……悪い。ここでAクラスからFクラスに降伏勧告をする。ここで引けばAクラスに3カ月攻め込まないと言う条件でこのくだらない試召戦争を終結させてやる。康太の保険体育も姫路も無傷なんだ。BクラスはわからないがCクラスは倒せるだろ」

「ちょっと、黒須くん、何を言い出すの？」

高橋教諭は3回戦目を始めようと代表者を呼ぶが、伐が割って入りFクラスに降伏するように言つと突然の伐の言葉に優子が声を上げるが、



「何を言ってるんだ？ 俺達が勝つのに止めるわけがないだろ」

「そうか……残念だったな。代表がバカのせいで、お前らはこの後からちやぶ台以下だ。まあ、しょせん、バカの集まりのクラスの代表だからな。代表と言ってもバカには変わらない」

雄二は勝利を確信しているようで降伏はあり得ないと言つと伐は雄二の言葉を鼻で悪い、

「工藤、決めて来い」

「おっけー 勝負だよ。ムツツリーニくん」

愛子に決めて来いと言つと愛子は康太が出てくる事がわかっているため、康太に声をかける。

「……………伐、こいつが俺に勝てると思っているのか？」

「ああ。当然だろ。俺を誰だと思っている？ これは戦争なんだ。つまらない意地を張って戦況も読めない三下が指揮しているバカの集まりに負けるわけがないだろ」

康太はゆっくりと愛子の前に立つが、愛子は敵ではないと思っているようで伐に声をかけるが伐は気だるそうに欠伸をすると、

「土屋くん、教科の選択をお願いします」

「……………保険体育」

高橋教諭は康太に教科選択をお願いすると康太は伐の言つた通り、

保険体育を選択し、

「ムツツリーニくんはずいぶんと保険体育が得意みたいだね？ でも、ぼくだって、かなり得意なんだよ？ ……君と違って、実技でね」

「……………実技」

愛子は康太を挑発するように笑い、太ももが見える程度にスカートをあげると康太は鼻から大量の血液を噴き出し、愛子は康太だけでは飽き足らず、明久をからかい始めるなか、

「……………処女が何を偉そうに」

「黒須くん、おかしい事を言わないで」

伐は愛子の言葉にため息を吐くと優子は伐を睨みつける。

「……………そろそろ、召喚を開始してください」

「はい。<sup>サモン</sup>試獣召喚」

「……………<sup>サモン</sup>試獣召喚」

高橋教諭は愛子のお遊びに付き合っていられないと言いたげにため息を吐くと2人に試召戦争を始めるように言い、2人が召喚獣を呼び出すと床には機械的な魔法陣が浮かび上がり、愛子と康太の召喚獣が現れ、

「なッなんだ。あの巨大な斧は！？ 腕輪までしてるし」

明久は愛子の召喚獣に驚きの声を上げる。

「実戦派と理論派。どっちが強いか見せてあげるよ」

「処女が良く……」

「黒須くん!!」

愛子は康太に向かい言いつと伐は気だるそうに言い、優子が伐を怒鳴りつけた時、

「それじゃあ、バイバイ。ムツツリーニくん」

「ムツツリーニッ!？」

愛子の召喚獣は康太の召喚獣に襲い掛かかり、明久は康太の召喚獣が巨大な斧で一刀両断されると思い声を上げ、

「……一まず、1勝だな」

「……加そ」

雄二は明久の心配など気にすることなく康太の勝利を確信しているようで口元を緩ませ、康太が腕輪を使用しようとするが腕輪が光る事はなく、

「……知ってるか？ 戦力分析するのは自分達の弱点を見つめ直す事も言うんだ。都合の良い事を誇張することじゃない」

「きゃああああ！！！！？？？」

伐はタイミングを見計らったかのように言つとそばにいた優子と美穂のスカートをまくり、2人は声を上げて自分のスカートを押さえつけると、

「……康太。何色だった？」

「……………2人とも白」

「そうか……まあ、無難なところか」

康太は召喚獣をほったらかしにして優子と美穂のスカートの中を覗き込んでおり、伐は優子と美穂のスカートの中を覗き込んでいる康太に2人の下着の色を聞き、

「……えーと、こんな決着で良いのかな？」

「……戦争だから仕方ないんじゃないかな？ 弱点をつくのも戦争なんだろうし」

「勝者、Aクラス代表工藤愛子。3対0で勝者Aクラス。試召戦争を終結します」

召喚獣の捜査より、優子と美穂の下着を優先した康太の召喚獣は動きを止め、愛子の召喚獣の斧に一刀両断されてしまい、愛子は苦笑いを浮かべ利光は眉間にしわを寄せるなか、高橋教諭はAクラスの勝利を宣言し、

「……………ムツッリーニっ！！！！？？？」

「お、お前、何をしているんだ!？」

Fクラスの生徒は康太の行動に驚きの声を上げるが、

「引き時もわからない上に、負けを人のせいにするとは哀れだな」

伐はFクラスの生徒の声に気だるそうに言う。

## 第18問

「……なんだと？」

「ん？ 事実を突き付けられてその態度か？ よくそんな状況で向かってきたな。それだけ、ご自慢のクラスだったのか？ このバカしかない最低のクラスが？」

雄二は伐の言葉が気に入らないようで伐を睨みつけるが伐は雄二の浅い底に興味などないようで気だるそうに言うが、

「てめえ」

「何だ？ やるって言うのか？ 悪鬼羅刹様。俺はこっちでも何の問題もないぞ」

雄二は伐の胸倉をつかもうとするが伐はのりくらりと交わした後、雄二の耳元で彼を挑発するように言うと、

「……雄二、止めておけ。伐が相手では分が悪い」

「ムツツリーニ？」

康太が雄二の手をつかみ、雄二は康太が出てきた事の意味がわからないように首を傾げる。

「そいつの味方是可以るんだな」

「……………伐」

伐は康太の行動に冷たい笑みを浮かべると康太は表情をしかめるが、  
「さてと、勝負は決まったんだ。消えろよ。それとも、まだ恥をさらしたいのか？ …… そうか。簡単な算数もできないようなバカばかりだから3敗してもまだ勝てると思ってるんだな。良いか。2より3は1多いんだ。これくらいわかるよな？」

伐は康太の表情など気にすることなくFクラスをバカにすると、

「…………… 姫路瑞希です」

「ちよつと、姫路さん！？」

「瑞希、何をしてるのよ！？」

瑞希は伐の言葉がよほど頭にきているのかすつと前に歩きだす。

「おいおい。元Aクラス候補の才女様までこんな算数もできないのか？ バカは感染するんだな」

「…………… なんて、そんな事を言うんですか？ 黒須くんは私の大切なものを取り返してくれました。それなのに、こんな事をするなんて酷いです！！ 見損ないました！！」

伐は瑞希が出てきた事にため息を吐くが瑞希は口が悪くても自分のラブレターを取り戻してくれた伐の事を勝手に信じていたようで非難すると、

「勝手な勘違いをするんじゃないやねえよ。それに俺はバカにバカと言う

事実を言っているだけだろ。お前にとやかく言われる筋合いはねえよ。これだって、たまたま、野良猫<sup>おれ</sup>にケンカを売ってきたバカが持ってたから、拾ったまでだ」

「ど、どうして、それを!？」

伐は気だるそうに欠伸をして懷から瑞希のラブレターを取り出すと瑞希は驚きの声を上げるが、

「ん？ こんな面白いものをコピーも取らないで返すわけがないだろ。封筒はわざわざ同じものを用意してやったんだ。えーと『突然ですが、……くんにとどうしても伝えたい事があって、お手紙を書かせていただきました。驚かせてしまったらごめんなさい』」

伐は瑞希のラブレターのコピーを声を出して読み始める。

「お前、何をしてるんだよ!! 人の手紙を勝手に読むなんて最低だ!!」

「は？ 何を言ってるんだ？ これは俺の所有物だろ。本物は持ち主に返してやったんだからな」

明久は伐の行動を非難するように怒鳴りつけるが伐は明久の言葉を鼻で笑うと、

「ほら、これ以上、恥をさらしたくないなら帰りな。それとも、このコピーを想い人に渡してやろうか？」

「黒須くん、教科を選択してください」



「は？ 勝負は決まってるんだ。必要ないだろ。それでも勝負をしたいって言うなら、何か見合ったものを用意しろよ」

瑞希は伐を信じた事が悔しいようで目に涙を溜めながらも伐を睨みつけて伐に自分と試召戦争をするように言うが伐は気だるそうに欠伸をしながら、戦ってやるから見合った何かを用意しろと言う。

「……負けた方が勝った方の言う事を聞きます。私があなたを倒してみんなをバカにした事、私の大好きなクラスをバカにした事を謝って貰います」

「そんな事を簡単に言っただけなのか？ 世間知らずのお嬢ちゃんに負けてやるほど俺は優しかねえぞ」

瑞希はどうしても伐にFクラスをバカにした事を謝らせたいようで伐に条件を吐きつけると伐は口元を緩めると瑞希の前に歩きだし、

「高橋先生、続投みたいだ」

「しかし、結果は決まってるんですよ」

「良いんだよ。これがばあおの目指した教育の一環らしいからな。くだらなさ過ぎてへどが出るけどな」

「……わかりました。黒須くん、教科の選択をお願いします」

伐は高橋教諭に試召戦争を続投すると言うと高橋教諭は無意味だと言おうとするが伐は気だるそうに欠伸をすると高橋教諭は伐の言葉に何か思う事もあるようで伐に選択する教科を聞く。

「教科は日本史。問題あるか？」

「ありません」

「ちょ、ちよっと、黒須くん、何で日本史なの？ 腕輪がある教科にすれば」

伐は瑞希に日本史で良いかと言うと瑞希は頷き、伐が選んだ教科に愛子は驚きの声を上げるが、

「……必要ねえ」

伐は欠伸をすると、

「それでは召喚してください」

「「サモン試獣召喚」」

高橋教諭は伐と瑞希に試召戦争を始めるように言い、2人が召喚獣を呼び出すと機械的な魔法陣が床に浮かび上がり、2人の召喚獣が呼び出される。

「……流石はAクラスですね」

「別に、こんなもんは何の役にも立たねえから、興味はねえよ」

瑞希は自分よりは点数が劣るがそれでも350点を超えている伐を見て言うが伐は気だるそうに成績に興味はないと言うと、

「それより、さっさとこいよ」

「言われなくてもそうさせていただきます」

伐は瑞希に攻めて来いと言うと瑞希は召喚獣の持つ大剣で伐の召喚獣を薙ぎ払うが、

「それで、攻撃しているつもりか？」

「ど、どうしてですか!？」

伐の召喚獣は瑞希の召喚獣の大剣に当たる事なく伐は気だるそうに欠伸をしており、瑞希は点数が上回っている自分の攻撃をのらりくらりと伐の召喚獣は瑞希の攻撃を交わしており瑞希は驚きの声を上げる。

「……何で、あいつはあんなに器用に召喚獣を動かせるんだ？ 観察処分者でもないのに」

「……………伐、お前は何を考えている？」

雄二は始まった伐と瑞希の勝負に点数を見て瑞希の勝利を確信していたようだが、伐の召喚獣の操作の上手さに驚きの声を上げる隣りで康太は伐が何を考えているかわからないように眉間にしわを寄せると、

「武器の効果的な使い方も知らない。2戦もしているくせに召喚獣の扱い方も単純な操作しかできない。それで、よく俺に勝てる気になったな」

「ひ、姫路さん、逃げて!？」

伐は瑞希の考えも無しに動いた行動にため息を吐くと明久は伐の様子に何かを感じたようで瑞希に逃げるように言うが、

「ど、どうして!？」

「み、瑞希、何をしてるのよ!? 早く逃げなきゃ」

「しよ、召喚獣が動いてくれないんです!-!」

瑞希の召喚獣は何故か操作ができないようで驚きの声を上げる。

## 第19問

「やれやれ。本当に何も考えてねえのかよ。バカじゃねえの?」

「……黒須くん、あなた、姫路さんに何をしたの?」

伐は召喚獣が動かせずにとしたら良いかわからないようで慌てている瑞希の姿にため息を吐くとこの場にいる全員が瑞希の召喚獣に何があつたかわからないようで伐に聞くが、

「バカじゃねえの。手のうちをなんでぺらぺらと話さねえといけねえんだよ。少しは自分達で考えろよ。ここに付いているものは飾りじゃねえんだろ」

伐は気だるそうに自分の頭を指で突きながら、この場にいる全員に頭を使えと言うと、

「武器を振りまわすにしても次に相手がどこに動くかを考えて逃げ道を潰す事も考えない。ただ武器を振りまわすだけ、それで勝てると思えるなんてずいぶんとおめでたし頭だよな。それともなんだ? 正論を振りかざせば悪役は負けてくれると思っただか? それともFが何かを間違えてAに勝つて言うサクセスストーリーでも夢見たのか?」

「……黒須くん、悪役が似合うね」

「……と言つか堂に入りすぎよ」

伐は瑞希をあざ笑い、伐の様子に愛子は苦笑いを浮かべ、優子はた

め息を吐く。

「姫路さん、姫路さんの召喚獣の装備なら、あんな小さなナイフは弾き返せるよ！！　だから、早く、逃げて！！」

「……だから、武器の使い方を知らない奴の発想だな。そうだな。少し時間をやるよ。20数えるまでに動けるようになってみる。いち、にいー、さーん」

明久は伐の召喚獣の武器であるナイフでは瑞希の召喚獣に1発で仕留める事はできないと言うと伐は明久の言葉を鼻で笑うと瑞希に逃げる時間をやると言うのと、

「で、でも、召喚獣が動いてくれないんです」

「み、瑞希、落ち着いて慌てたら、あいつの思いつぽよ」

瑞希の召喚獣は動かせずに瑞希が慌てる様子に美波は瑞希に落ち着くように言い、

「<sup>ぜっぺき</sup>島田、口だけは正解だ。冷静にならないと状況は見えてこない」

「だ、誰が絶壁よ！？　あんだ、殺されたいの？」

「殺す？　口の聞き方には気をつけろよ。その言葉を口に出すって事は『自分も殺される覚悟』があつてだろうな」

「……な、何よ。こいつ」

伐は美波が瑞希に言ったアドバイスを正解だと言うがその言葉は美

波にケンカを売っており、美波は伐に向けて殺意の混じった視線を向けるが伐は美波の言葉を鼻で笑うと落ち着いた声で言うがその声質は酷く冷たく、美波は伐の言葉に気落とされたようで顔を真っ青にして後ずさりをする。

「……さてと、20数える以上の時間は経ったが、まだ、動けないのか？」

「……」

伐は瑞希に向かいタイムアウトと言うが瑞希は伐を睨みつけると、  
「ずいぶんと反抗的な目だ。まあ、別にそんなもんで怯むほど暇じゃないんだ。そうそう、あのバカはお前の召喚獣の武器や防具をずいぶんと評価しているみたいだからな」

「えっ!？」

「何だ？ これは考えていなかったのか？ 武器は小さいとは言え点数で攻撃力は決まってくるんだ。大剣と言っても横からの攻撃には弱かったみたいだな」

伐は明久が頼りにしていた瑞希の召喚獣の武器である大剣を折る。

「武器の特性、試召戦争のルール。その他モロモロと考える事はあるんじゃないのか？ それも理解できないで良くAクラスに挑めるのは自分の裁量だと言えるな。あ、言っておく。自分を過大評価する人間ほどレベルの低い人間はいねえよ。その時点でお前は周りを見下している。見下すほどの能力もないのにな。Aクラスの成績を考えればCやB程度の学力で勝てるわけがないだろ。点数を削られ

ば儲けもの？ Bクラスと戦うならFクラスをと選ばせる？ バカじゃねえの。自分の浅はかな作戦が崩れている事も気づかない。お前の浅はかな考えも見透かされているのにも気づかない。はっきりと言っておくぞ。この負けはお前のせいだよ。頭のできも悪い代表様」

「ぐっ」

Fクラスの戦力の象徴である瑞希の召喚獣の大剣を叩き折られ、Fクラスには絶望感が漂い出すなか、伐はさらに追い打ちをかけるように雄二をバカにし、雄二は苦虫を噛み潰したような表情をする。

「ん？ どうだ？ 頭で勝っても腕力がなければ何も守れないと思っただがどちらでも負けた気分は？」

伐は雄二の過去を覗いているかのように雄二の表情を見て言うと、

「……手を伸ばしてもそこに何もない。手に入れたいものがもつと先にある事にも気づけない。すでに手の中から零れ落ちている事にも気づけないのは哀れだな……」

言葉の途中で何かの言葉を飲み込んだのか少しだけ自嘲気味に笑い、

「終わりだ」

伐の召喚獣のナイフは瑞希の召喚獣の鎧の薄い部分である脇の下にナイフを滑り込ませその攻撃で瑞希の召喚獣は動きを止め、

「……勝者。 Aクラス代表、黒須伐」



「そ、そんな……」

無情にも高橋教諭は伐の勝利を宣言し、瑞希は膝を付き、

「さてと、何でも言う事を聞くんだよな？」

「ちょっと待て……！」

伐は口元を緩ませて瑞希との距離を縮めて行くと明久が伐の前に立ちふさがる。

「……」

「ぐふっ！？」

しかし、伐は明久をゴミを踏みつぶすように何の感情もない表情で蹴り飛ばし、

「プレゼントだ。せいぜい、楽しませて貰おうか？」

「……こ、これは？ 首輪？」

懷から首輪を取り出すと瑞希の首に付けて口元を緩ませると瑞希は自分が伐に何をされるか想像したようで顔を真っ青にするが、

「……来い」

伐は瑞希をAクラスの方に引っ張って行こうとする。

「ま、待て……！ 姫路さんをどうするつもりだ？」

「よ、吉井くん」

「……うるせえな。お前には関係ねえだろ。それともお姫さまを取り戻しにきた王子さま気取りか？」

明久は瑞希の手をつかみ、伐を睨みつけると瑞希は明久の行動に顔をほころばせるが伐は明久の行動はくだらないと言いたげにため息を吐くが、

「放せって言ってるだろ！！」

「……何度も言わせるな。このバカ女が仕掛けてきた事だろ。それを関係ねえ奴がしゃしゃり出てくるんじゃないやねえよ」

明久は伐の首をつかみ、伐は明久の行動が目障りだと言いたげに明久の手を払う。

## 第20問

「関係ないわけないだろ！！ 姫路さんは女の子なんだ！！ お前みたいな奴が！？」

「……言葉の使い方には気をつけろよ」

「よ、吉井くん！？」

明久は伐が瑞希にする事を勝手に決めつけており、伐を殴りつけようとするが、伐が明久の拳を喰らうわけがなく表情を変える事なく明久の腹にひざ蹴りを入れると瑞希は驚きの声を上げると、

「……えーと、黒須くん、高橋先生の前で不味くない？」

「知るかよ。先に仕掛けてきたのはこいつだしな。だいたい、生徒同士の小競り合いにばあは何もいわねえよ。遊んでないで行くぞ」

「よ、吉井くん！？ 放してください。どうして、こんなひどい事をするんですか？」

愛子は苦笑いを浮かべながら、教師の前での暴力は不味くないかと言うが伐は気にする事なく、瑞希を引っ張ると瑞希は伐を非難するように言うが、

「何で？ 普通に考える。仕掛けてきたのはあのクズだ。お前が俺に引きずられているの原因は誰が言い始めた結果だ？ 俺はあのクズに殴られる理由はねえんだよ。俺を非難する前に自分がやった行動を反省しろよ。お前にこれから起きる事は自業自得。それなのに

それを他人に押し付けるんじゃないよ」

「……」

伐は気にする事なく、悪いのは誰だと瑞希に言つと瑞希は伐の言葉に何も言えないように目で涙を浮かべながら何も言えずに黙ってしまふ。

「……そうなのかも知れないけど、やり過ぎじゃないの？」

「確かにそうですね」

優子は伐の態度にやりすぎだと言つと美穂は頷くが、

「バカをしつけるには必要だろ。口で言ってもわからないから、身体に直接刻みつける」

「……それは動物と変わらないんじゃないかい？」

「変ねえよ。と言うか、あのバカどもはそこら辺をうるついている畜生以下の頭しか持ってないんだからな」

伐は表情を変える事なく、口で言ってもわからないバカへのしつけだと言い切り、利光は眉間にしわを寄せて言つと伐はFクラスは人間としての知能は持ち合わせていないと言つと、

『……あいつを殺せ』

『いくらなんでも俺達をバカにしすぎだ!!』

Fクラスの生徒は伐に向けて殺意を込めた言葉を放ち始め、

「……黒須くん、あなた、何がしたいのよ？ こんな騒ぎまで起こして」

「さあな。ただ……野良猫<sup>おれ</sup>にケンカを売った奴の末路つてのは決まってるんだよ。それを骨の髄まで教え込んでやる。おい、バカクラス代表、最終戦を前に1つゲームをしてやろう」

優子は殺気立ち始めたFクラスの生徒を見てため息を吐きながら、伐にどうにかするように言つと伐は冷たい笑みを浮かべて雄二に向かい1つのゲームを提案すると言つ。

「……なんだ？」

「ん？ 最終戦前のお遊びの試召戦争つてところだ。教科は数学。俺対バカクラス。何人でもかまわない。バカじゃないと言つのならまとまれば俺1人くらいになら勝てるだろ。そうだな。賞品は姫路瑞希。俺を補習室送りにできた奴にくれてやるよ。好きにしろ。参加条件は負けた奴は俺に対しての絶対服従。1人相手にこの条件で負けたらさすがに自分達がバカだって気づくだろ」

雄二は眉間にしわを寄せながら伐の話を聞くと伐は瑞希を賞品にしたゲームをすると言ひ、Fクラスの生徒達は伐を倒して瑞希を好きにできると言ふ条件に次々と参加表明をし始め、

「……本当にバカばかりね」

「えーと、姫路さん、本当にあのクラスが好きなの？」

「……」

優子はFクラスの様子にため息を吐き、愛子は瑞希に向かい言っていると瑞希は自分が賞品にされた事により、男子生徒から向けられる視線に顔を引きつらせ始めるなか、

「……瑞希、安心してウチが絶対に助けるから」

「うん。あいつを倒して姫路さんを助けるんだ」

「うむ」

明久、秀吉、美波の3人はおかしな事を考えずに瑞希を助けるためにだけに伐との勝負を受けると言い、

「吉井くん、木下くん、美波ちゃん、ありがとうございます」

「……他人の事を助けようと自分を犠牲にするわけか？　くだらねえ」

瑞希は3人の様子に笑顔を見せるが伐は3人の行動はくだらないと鼻で笑うと、

「絶対に姫路さんを助ける。お前みたいな奴の好きにさせない！！」

明久は伐を指差して吠える。

「……暑苦しいバカが、で、バカクラスの代表様はどうするんだ？　お前以外は参加するみたいだぞ」

「……そこまで言われてやらねえわけにはいかねえだろ。いくら、数学に自信があるって言ったてこの人数差でかてるわけがないだろ」

伐は明久の言葉に気だるそうに言った後、雄二を挑発するように言う  
と雄二は伐に一矢報いないと腹の虫がおさまらないようで参加を  
表明すると、

「……完全に黒須くんのペースですね」

「ええ、それも黒須くんの数学の腕輪の能力ってあれよね？」

「……うん。姫路さん、最初に言っておくけど泣かないでね」

美穂は顔を引きつらせ、優子と愛子は伐の腕輪の能力を知っている  
ため、ため息を吐き、

「知ってるか？ 群れないと何もできないようなバカは蹴散らされ  
る運命なんだ。それと……『仲間のために誰かのために』なんて  
くだらねえ事を言ってるうちは俺には勝てねえよ。お前らよりはあ  
そこで本能に忠実に戦おうとしている奴らの方がまだチャンスがあ  
るかもな」

「誰かのために何かをしようって言うのが、そんなにおかしいか！  
」

伐は明久達、瑞希を助けるために伐に向かってきた人間を鼻で笑う  
と明久は伐を完全に敵とみなしているため、伐に敵意の視線を向け  
て叫ぶが、

「おかしいね。知ってるか？ 他人は他の人<sup>たにん</sup>と書くんだ。親、兄妹、

友人、どれだけキレイな言葉を並べたって他人は他人だ。しょせん人は自分の身が可愛いんだよ。そんな甘い事を言っていると簡単に心臓を刺されるぞ」

伐は明久の言葉は心底くだらないと言うと明久が反応する時間も与えずに明久の前まで移動すると明久の胸を指差し、

「正義の味方は悪い魔法使いに倒されました。正義はどこにあるんでしょうか？　そして、悪い魔法使いは絶望した正義の味方を見下して言いました。お前とお前の大切なものの命を助けてやる代わりに今まで自分を正義の味方と崇拜していた者達の命を奪えと正義の味方が本当に守りたいものは顔も知らない群衆か？　それとも自分の大切なものか？」

「何、わけのわからないことを言ってるのよ？」

「さあな。ただ、覚悟を決めるってのは何かを手に入れ何かを捨てる事だ。それもわからないあまちゃんか俺を倒せると思わない事だな」

伐は覚悟の仕方を間違えると言うが伐の言葉が理解できる人間は誰もいないようで美波は伐を睨みつけると伐は冷たい笑みを浮かべ、

「と言う事だ。高橋先生、承認、よろしく」

「……止めても無駄そうですね。承認します」

高橋教諭に召喚フィールドを張るように言うと高橋教諭はため息を吐きながら召喚許可を出す。



## 第21問

「……流石に1クラスがまとめて召喚すると圧巻だね」

「そうですね。流石にあんな風に囲まれたら、私だったら落ち着いていられないと思います」

伐の召喚獣の前にFクラスの召喚獣が並ぶ姿に利光が関心したように言々とFクラスの召喚獣に囲まれながらも気だるそうに欠伸をしている伐を見て苦笑いを浮かべ、

「あ、あの。黒須くんの腕輪の能力ってそんなに凄いんですか？」

「えーと、たぶん、威力的には姫路さんの腕輪の方が凄いと思うよ。けど……」

「黒須くんの腕輪は相手が複数の方が威力を発揮するわね」

瑞希は愛子と優子に伐の腕輪の能力を聞き、2人が苦笑いを浮かべた時、

「いくら、腕輪持ちだと言ってもこの人数差じゃ何もできないだろ」

「御託を並べてないできたら、どうだ？ まあ、この時点でお前らは負けてるんだけどな。言っただろ。戦力分析するのは相手の情報も確認しておかなければいけないんだ。少なくとも他のクラスで使われた腕輪の能力くらいは調べておけよ」

雄二は数の論理で伐を蹴散らそうとするが伐は気だるそうに欠伸を

すると、伐の召喚獣の腕輪が強烈な光を発する。

「な、何！？ 何が起きたの！？ き、木下、突然、何をするのよ！？」

「わ、わからぬのじゃ！？ しよ、召喚獣が勝手に動き出したのじゃ！？」

伐の召喚獣の腕輪が光ると同時にFクラスの召喚獣は同志討ちを始め出し、Fクラスは混乱し始め、

「お、お前、何をしたんだ？」

「……だから、言っただろ。覚悟はしろよってな。冷静にならないと答えなんて見えてこないし、自分達がすでに動けない罠の中まで誘い込まれているのにも気づかないんだ」

雄二は制御の利がなくなった召喚獣に伐を怒鳴りつけるが伐は気だるそうに言い、

「さてと、同志討ちを始めるなんて敵と味方の区別もできないなんてな。本当にバカばかりだな」

Fクラスの生徒をバカにするように笑った時、

『てめえ、いい加減にしやがれ！！』

Fクラスの生徒の1人が伐の挑発に限界が着たようで伐に向かい殴りかかるが、

「……やれやれ」

伐はその生徒の腕をつかんで床に転がすと、

「……ルール違反には退場して貰おうか？」

伐は転がした生徒の膝にかかとをのせ冷たい笑みを浮かべる。

『お、お前、何をする気だ！？』

「しゃべんじゃねえよ」

Fクラスの生徒は伐の次の行動に寒気を感じて声を上ずらせると伐は表情を変える事なく、かかとに体重をかけようとするが、

「黒須、やりすぎだ！！」

「へいへい」

補習者を引き取りにきた西村教諭が伐に向かい叫ぶと伐は気だるそうに返事をし、

「さてと、面倒になってきたから、終わらせるか？」

未だに伐の召喚獣の腕輪の能力から逃げきる事のできないFクラスの生徒達を見て冷たい笑みを浮かべた時、

「行け！！」

「ん？ 観察<sup>バカ</sup>処分者には効きが弱いかな？」

明久の召喚獣だけが伐の召喚獣に向かい攻撃を仕掛けだし、伐は少しだけ驚いたような表情をすると、

「まあ、良い。観察処分者にはフィードバックがあるからな。しっかりとかわいがってやる」

冷たい笑みを浮かべて明久をなぶり殺しにすると言う。

「やれるものなら、やってみろ。みんなが召喚獣をともに動かせないのがお前の腕輪の能力だって言うなら、400点以下にすれば効果は切れるだろ!!」

「そうだな。目の付けどころは悪くはないかも知れないが……お前みたいなバカができると思っているのか？ それにお前はそのため捨てる駒になるって言うのか？ 自己犠牲？ くだらない」

明久は同志討ちを始めているFクラスを助けるために伐の点数を削ると言う。伐は明久の言葉を鼻で笑った後、

「……フィードバックで死んだ場合はどうなるんだろうな？」

冷たい笑みを浮かべ、その笑みには明久達学生が普段体験する事のない凄味があり、明久は1歩下がるが、

「喰らえ!!」

「……観察<sup>バカ</sup>処分者でもその程度か？」

直ぐに自分を奮い立たせて伐の召喚獣に向かい自分の召喚獣を突撃

させるが伐は気だるそうに言うと、

「……知ってるか？ 攻撃の時って言うのは防御が疎かになるんだ」  
「いだ！？」

伐は寸分の狂いもなく明久の召喚獣が武器の木刀を握っている指を狙うと明久の召喚獣は自分の重みも掛かり、明久の召喚獣の指は切り落とされ、明久は床にのたうちまわる。

「どうする？ 貧相な武器も持てなくなったぞ。まだ、やるか？  
ここで土下座をするなら、補習室送りにしないでやるが」

「そんな事をするわけがないだろ！！ 僕は姫路さんを助けるんだ  
！！」

伐は明久を見下しながら言うが明久は負けを認めるような事はしないと叫ぶと、

「吉井くん……」

瑞希は心配そうに明久の名前を呼ぶが、

「そうか？ なら、絶望つてものを味あわせてやる」

「ぐわ！？」

伐は表情を変える事なく明久の召喚獣の腕を斬り落とし、明久は召喚獣から伝わる痛みに顔を歪めながらも、今回は床をのたうちまわる事なく伐を睨みつける。

「次は足だ……フィードバックがある観察<sup>バカ</sup>処分者を痛めつけるのは  
楽でいいな」

「ぐっ!？」

伐は明久の視線に何も感じる事はないようで無表情に立っている明  
久の召喚獣の足の甲にナイフを2本突き立てると、

「自分の無力さに打ちひしがれるんだな」

「ま、待て!! 僕はまだ戦える」

気だるそうに明久の隣を歩いて行き、明久はまだやれると言っが、

「だから、絶望を味あわせてやるって言ってるだろ」

「う、嘘!？ な、何でよ!？」

「ど、どう言う事だ!？」

伐は気だるそうに欠伸をすると未だに同志討ちをしていたFクラス  
の召喚獣が崩れ落ちて行き、雄二と美波は驚きの声を上げ、

「あれだけ大口を叩いたのに俺1人相手にFクラスは全滅か？」

「ぐっ、まだ、終わってない。僕が絶対に姫路さんを助けるんだ！  
」

伐は明久の肩を叩き言々と明久は伐の手を払い、

「あ、明久、お主、何をするつもりじゃ!？」

「ちょっと、アキ、大丈夫なの？」

明久の召喚獣は刺されていたはずの伐の召喚獣のナイフから無理やり足を動かし、明久の顔を痛みて歪んで行くが、

「……良い事を教えてやる。どれだけ願ったって奇跡なんてものは起きないんだ。神ってヤツは人が思っている以上に無情で残酷だからな」

伐は明久の行動を鼻で笑うと表情を変える事なく、明久の召喚獣の首を落とす。

## 第21問（後書き）

どうも、作者です。

感想の話です。今まで更新時に感想の返信をしていましたが、感想を読んだときに返信する形にしたいと思います。ご了承ください。



## 第22問

「さてと最初に言っただ通り、お前らは今日から俺の下僕だ」

『は？ こいつ、何を言ってるんだ？ 頭おかしいんじゃないか。あんなの本気にするわけ！？』

伐はFクラスの生徒を見下して言うが1人の生徒はあんなものは冗談でしかないと言おうとするが、

「……なら、お前は見せしめだ。自分の言葉に責任を持たなかった事を後悔しろよ」

伐は冷たい笑みを浮かべてその生徒の腹に拳をねじ込み、バックステップをして下がった頭のこめかみをきれいに右足で蹴り飛ばすと伐との約束を破った生徒は膝から崩れ落ち、

「ちょ、ちよつと、黒須くん、何してるのよ！？」

「何？ こいつは俺との契約を破った。それなりの報復は必要だろ？」

伐の行動に優子は驚きの声を上げるが伐は冷たい笑みを浮かべたま右手でその生徒の髪をつかむと頭を床に打ちつける。

「ちよつと、待て！？ お、お前、洒落にならないぞ？ いくらなんでもやりすぎだ！！」

「洒落？ 言っただけだろ。覚悟もできないような奴が軽口を叩く

んじゃねえよ。お前らは俺の出した条件に乗ってゲームに参加したはずだ。それなのにこのバカはその条件を破ろうとしたんだ。当然の報いだろ。それに言ったよな？ 畜生以下の頭しか持ってないバカどもをしつけるには身体に刻みつけるしかないってな」

雄二は躊躇する事なくFクラスの生徒を痛めつける伐を見て驚きの声を上げるが、伐は自分が言った事を聞いていなかったのかと言い、

「覚悟もなく上に挑む？ 上に挑むには代償がいるんだよ。今居た場所より、落ちてしまいかも知れないと言う覚悟。大切なものを失いかも知れないと言う覚悟がな。お前らは自分達の都合の悪い事は全部誰かのせいにして生きてるだけだろ。社会が悪い、学校が悪い、政治が悪い、自分以外の誰かが悪い？ ふざけるなよ。文月学園（こい）を選んだのは誰だ？ 文月学園（こい）は学力に応じて設備に差をつけると言うのは最初からわかっていたはずだ。自分達がサボり、親のすねをかじってだらけていたのを棚に上げて学費が一緒なんだと文句を言っただけだ。設備の向上を要求する？ 元をたどればお前らの身から出たサビだろ。自分達の都合が良いように話をすぐ変えるんじゃないやねえよ。今回もそうだよな？ 俺はそれを教えてやってただけだ。文句を言うなら、それに見合ったものを持ってこいよ。たかだか1人に束になっても1撃も喰らわせる事もできないバカどもが」

Fクラスの甘えた考え方に唾を吐き捨てるように言うFクラスの生徒達は伐の言葉と伐が持つ冷たい空気に息を飲むが、

「……そんなのわかってるよ。だけど、それなら、姫路さんはどうなるんだよ。僕らと違って努力だとしてたのに、ただ、その日、調子が悪かったから、Fクラスになるなんて、おかしいだろ！！」

「吉井くん」

明久だけは伐をにらみ返して、瑞希の事を心配して試召戦争を始めたと呼び、瑞希は自分の事を心配して試召戦争を始めてくれた明久の優しさに胸を押さえる。

「……言うだけ無駄みたいだな。なら、俺が主人だと言う事を身体に刻みこんでやる」

「……………止める。伐」

伐は明久にこれ以上、何かを言っても無駄だと判断して力づくで黙らせようとする。と康太が伐の手をつかみ、

「……………何をそんなにイラついている。明久が昔のお前と重なるからか？」

「……余計な事を言うんじゃないよ。康太、お前からやってやっても良いんだぞ」

「……………お前は意味もなくそんな事はしない」

「……ちっ」

康太は伐のイラつきの原因に心当たりがあるようで伐に向かい言う。と伐は眉間にしわを寄せて康太の手を振りほどき、

「……代表様、最終戦は任せるぞ。俺がいなくても後はどうにでもなるだろ。後は、終わったら、これを旦那の首に付けてやれ。旦那の命令権は代表様にくれてやる」

「……わかった。黒須は良い人。雄二、今からデートに行く」

「しょ、翔子、お前、ふざけるんじゃない？　なんで俺がそんな事をしないといけないんだ！！」

翔子に首輪を渡して歩き出すと翔子は雄二を追いかけはじめ、雄二は翔子から逃げるようにAクラスの教室を出て行き、

「……」

「黒須くん、これ、どうするの？」

「……知るかよ。もう決着はついてるんだ。別に最終戦をする必要はねえだろ……俺はふけるぞ。ここにいとむさい類人猿が戻ってくるからな」

翔子と雄二の様子に教室が微妙な空気になるが伐は気にする事なく教室を出て行こうとすると、

「……黒須、どこに行く気だ？」

「帰るんだよ。むさい顔見せんじゃねえよ」

教室を出た時点で西村教諭が待ち構えており伐に向かい手を伸ばすが伐は機嫌が悪いため、西村教諭の手を交わす。

「帰るな。あれの事で話がある」

「……知るかよ。野良猫にケンカを売ったんだ。おれ  
気絶だけで済んで良かったじゃねえかよ」

西村教諭は伐の帰り道を塞ぎ、Aクラスの教室で伸びている生徒を指差して言うが伐は手心を加えてやったんだからうるさく言われる事はないと言い切るが、

「そんなわけあるか!!」

「……うぜえ」

西村教諭の手が再度、伐に伸びるが伐は身体をひねり、それを交わして行き、

「……黒須くんって、鉄人と互角？」

「……敵うわけがないのじゃ」

「……あいつって何なのよ？」

人外の域に達している西村教諭と対等の攻防を繰り返している伐の姿に明久と秀吉は顔を引きつらせ、美波はため息を吐く。

「あ、あの。土屋くん、吉井くと昔の黒須くんが重なるって言うのはどう言う事ですか？」

「……俺は何も知らない」

瑞希は伐が教室を出て行くきっかけになった康太の言葉に何か引つかかったようで康太に声をかけるが康太は何も知らないと全力で首を振り、

「……余計な事に首を突っ込むな。西村、お前は補習組を連れてけよ。バカクラス全員なんだから、俺にかまけてるんじゃないやねえよ」

「補習は明日だ。優先すべきはお前の態度だ。黒須!!」

伐は瑞希と康太のやり取りが聞こえたようで余計な詮索をするなど言いながら西村教諭の攻撃を交わし続けて行く。

## 第23問

「…………ねむ」

「…………黒須くん、登校してきて直ぐに寝ないでくれるかしら」

「あー!? 黒須くん、おつとめごくろうさま」

結局、伐はFクラスとの試召戦争で行った暴力行為により3日間の停学処分を受け、停学が明けた朝、伐は登校してくるなり自分の席で眠りにつこうとした様子を見て優子はため息を吐き、愛子を見て楽しそうに笑うが数名のクラスメートは伐を警戒しているようで距離を取っている。

「…………うるせえな。明け方までこっちは働いてたんだよ。寝かせろ」

「明け方まで働いていたって、停学処分中なのにかい？」

「ばれたらまた停学になりませんか？」

伐は優子と愛子が声をかけてきた事に話しかけるなと言うが利光と美穂まで集まりだし、

「…………集まんじゃねえよ」

「…………黒須」

伐は五月蠅くて眠れないと言って気にため息を吐くが今度は翔子が伐の名前を呼ぶ。

「……代表様までなんのようだよ？」

「……雄二がデートに行ってくれない」

「……それを俺にどうすれと言っただ？」

伐は眉間にしわを寄せて翔子に聞くと雄二が伐の命令権も婚姻届も無効だと言い張っていると言い、伐はため息を吐くと、

「……雄二が素直になる方法を教えて欲しい」

「……非合法だけど自白剤なら準備できるが値段はそれなりに張るぞ」

翔子は雄二との関係を進展させるために伐に協力して欲しいと言いながら封筒を伐の前に出すと伐は中身を確認する事なく、懷に封筒をしまい込みながら翔子に言う。

「……お願い。強力なのを」

「交渉成……」

「そんなおかしな取引をするな。代表、常識で考えてください。そんな事をして良いと思ってるんですか？ だいたい、非合法って絶対に出ちゃいけない言葉が出てるんですよ！！」

翔子は伐の言葉に直ぐに頷き、伐は良い臨時収入に口元を緩ませた時、優子が伐の言葉を遮り、伐と翔子の契約に割って入るが、



「邪魔すんなよ」

「邪魔とか言う問題じゃないでしょー!!」

伐は気だるそうに優子に邪魔だと言い、優子がその言葉に声を上げた時、

「生徒の呼び出しです。2年Aクラス、黒須伐。至急、学園長室にくるように、繰り返します。2年……」

「黒須くん、学園長室に呼び出されるって停学中に何かしたの？今度は停学ですまない事？」

校内放送から学園長室に伐への呼び出しがかかり、愛子は伐の事が気に入っているようで心配そうな表情をすると、

「……そんなじゃねえよ。それにお前が心配するような事じゃねえ」

「そつなの？」

伐は気だるそうに立ち上がると愛子の頭を乱暴に撫でて教室を出て行こうとするが愛子は伐の制服をつかみ聞き返す。

「……ああ。俺の世話になってる人と学園長って名の妖怪が知り合いでな。たまに厄介な仕事を持ってく……なんだよ？」

「……教室で当たり前のようにタバコに火を点けないでよ」

伐は愛子の様子に気だるそうに何でもないと言うと懷からタバコの

箱を取り出し、口にくわえようとするが優子は眉間にしわを寄せて  
伐の手を止め伐は不機嫌そうな表情で優子に言つと、

「流石に停学明けは止めた方が良いと思うよ」

「そうですね」

利光と美穂は2人の様子に苦笑いを浮かべながら優子に同意し、

「……仕方ねえな。まあ、どうせ、妖怪室で吸えるんだ。それまで  
待つか」

「妖怪室って、それより学園長先生の前でタバコを吸っちゃまずい  
でしょ」

伐は仕方ないと言うとタバコを懐に戻し、学園長室に行くと言うが  
その発言は問題発言であり、愛子は苦笑いを浮かべるが、

「あ？ 世の中は give and take だろ。ばばあは俺の  
態度の悪さに目をつぶる代わりに俺はばあから厄介事を押し付け  
られる」

「……1生徒が学園長と学園関係でおかしなやり取りをしている方  
が問題あるわよ」

伐は学園長としている取引の1つだと言うと優子は顔を引きつらせ  
る。

「……うるせえな。お前に関係はねえだろ」

「黒須くん、学園長先生を待たせておいても良いんですか？」

伐は優子には関係ないと言つと美穂は学園長からの呼び出しに気にすることない伐に言つと、

「……ああ。面倒になってきたな。寝てるか」

「寝るな!!」

伐は学園長室に行くのが面倒になってきたようで欠伸をして席に戻ろうとするが優子は声を上げ、

「……仕方ねえ。ここに居ても寝れねえから、サボるか」

「ちょっと、サボるかじゃないわよ!? 学園長先生が呼んでるのよ!?!」

「まあ、優子も押さえて、黒須くんの知り合いと繋がってるんだし、行かないなんてことはないでしょ」

伐は欠伸をしながら教室を出て行き、優子は伐が学園長室に行く気があるように見えないようで慌てて追いかけようとするが優子は苦笑いを浮かべながら優子を止め、

「でも、愛子、黒須くんの悪評でAクラスに何かあったら、ただでさえ、この間のFクラスとの対決での事でクラス単位でおかしな噂も出てるのに」

「だけど、あの時の黒須くんって、言葉は悪かったけどおかしな事は言っていないと思うんだよね」

「それは確かに僕も思ったよ。黒須くんもだけどFクラスの行動は言い過ぎている気がするよ」

優子は伐と同類にされたくないと言うと愛子と利光は伐の言っていた事は間違いではないと言う。

「そうですね。Fクラスの生徒達の行動はちょっと怖いです。昨日は吉井くんをクラス全員で追いかけて回していましたし」

「……そうね。あの人達の行動に比べたら、黒須くんの方が可愛い気もするわ」

昨日、Fクラスはクラス全員でおかしな事をしていたようで美穂は苦笑いを浮かべると優子はFクラスの行動より、伐の方がまともだとため息を吐くと、

「まあ、あたし達が気にする事でもないのよね……関係ないって言えば良いわけだし」

「でも、そんな事を言っても、優子は黒須くんの事で西村先生に捕まる」

「愛子、不吉な事を言わないで」

優子は伐の行動を気にしないようにすると言うが愛子は楽しそうに優子をからかう。

## 第24問

「で、何のようだ？　ばばあ」

「……くそじやり、せめてノックくらいしてから入ってきな」

伐は乱暴に学園長室のドアを蹴り開けるとなかにいた文月学園の最高権力者である『藤堂カヲル』学園長は伐の行動にため息を吐くが、

「文句を言うなら呼び出すな。だいたい、用件があるなら自分で来い。俺は暇じゃないし、妖怪みたいに分裂も時間を止めるような事はできないからな。おれたち人間にとっては時間ってのは貴重なんだよ。妖怪にはわからないだろうけどな」

伐は気にする事無く来客用のソファーに勢いよく座ると懷からタバコの箱を取り出してタバコをくわえると、

「ばばあ、灰皿くらい、用意しておけよ」

「……当然のようにここでタバコを吸うんじゃないよ。まったく、ここには灰皿なんてないよ。あたしは吸わないしね。タバコを吸わない人間の前でタバコを吸うような人間はここには来ないしね」

灰皿がないと言い、カヲルはため息を吐く。

「……まったく、役に立たねえな」

「タバコを止める気はないんだね」

「当然だ。それより、さつさと用件を言え」

伐はタバコに火を点けるとカラルに向かい用件を話せと言うと、

「そうだね。あんたの態度の悪さは言うだけ無駄だしね……さてと本題だよ。わかっているとは思うけど仕事の依頼さね」

「……内容と報酬を話せ」

カラルは1度、ため息を吐いた後、真剣な表情になり伐への依頼だと言い、伐は内容と報酬しだいだと言い、

「そうさね……まずはこれを見て貰おうか？」

「……腕輪？」

カラルは伐の前に2つの腕輪を置く。

「これは『白金の腕輪』と言うんだけどね。清涼祭で行われる召喚大会の優勝者に渡すはずのものなんだけどね」

「……それを俺に見せるって事はバグが見つかったわけか？」

カラルは腕輪が清涼祭の召喚大会の賞品だと言うと伐はそんなものを自分に見せると言う事は腕輪に何かあったと推測したようで眉間にしわを寄せると、

「バクまでは行かないね。現在の状況だと平均点を取ったくらいで腕輪が爆発するだけだよ」

「……ばばあ、それは充分にバグだ」

カヲルはたいした問題ではないと言うが伐は眉間にしわを寄せたまま言い、

「それで、そんな危険物を俺にどうしろと言うんだ？ 俺はそれを起動させる気はないぞ」

「そんな事はあんたに頼まないね。清涼祭までの約3週間、これを直すのにデータを集めたいと思ってね。あんたに協力して貰おうと思ったわけさ」

「俺に爆発に巻き込まれると？ 何度も言わせるな……パスだ。リスクが高い。平均点で爆発するならエサをぶら下げてバカにさせれば良いだろ……そう言う事か」

カヲルは腕輪を直すためにデータを集めたいと言うと伐は自分には向く作業ではないと言うと話の途中で伐はカヲルが言いたい事がわかったようで口元を緩ませる。

「そう言う事さ。あんたはバカクラスを好きに扱えるって言うじゃないか？ なら、腕輪が爆発しないバカにやって貰うのが手っ取り早い。爆発したら腕輪の外装を直すのも面倒だしね」

「ん？ まあな。別にそれでデータを取っても良いが、点数が低すぎて役に立つかはわからんぞ」

「点数は別にかまわないさ。ただ、腕輪を使う事でどこにバグが出ているかを知りたいわけだしね」

カヲルは流石に学園長であり、伐がFクラスを下僕にした事を知っているようでニヤリと笑うと伐はバカに使わせてデータ収集になるのかと言うとカヲルはかまわないと言い、

「それくらいなら構わないが、貰うものは貰うぞ」

「ああ。あまり、ふざけたものじゃなければね」

伐は報酬はどうするのかと聞くとカヲルはある程度は融通を利かせると言うつと、

「……ばばあ、それなら、Fクラスの姫路に振り分け試験の再試験をさせる事は可能か？」

「再試験？ 姫路……確か、Fクラスの才女だね。あんたがそんな事を言うなんてどうしたんだい？ 惚れたのかい？」

「そんなわけがあるか。くだらねえ試召戦争に巻き込まれるのは面倒だからな。最強の矛を無理やり奪えば少しは大人しくするだろ。俺に逆らったバカには思い知らせてやらないといけないからな」

伐はデータ収集の報酬は瑞希への振り分け試験の再試験だと言い、カヲルは伐をからかうように言うが伐は表情を変える事無く、Fクラスを無力する気のようにカヲルの言葉を鼻で笑う。

「そうさね。その程度なら問題ないさね。実際、その生徒の件は教師陣でも問題になっていてね。体調をよく崩す生徒みたいだし、Fの設備に居て死なれても困るしね。それなら、あたしの懐も痛まないから、それで良いさね」



「交渉成立だな……ばばあ、これは預かっておくぞ。腕輪の能力はメールで出しておけ」

「ああ。頼むよ。データを取る上でサンプルは多い方が良くからね。あたしのために馬車馬のように働くんだよ。くそじゃり」

カヲルは伐から提示された報酬に少し考えて頷くと伐は目の前にある腕輪を手にとると立ち上がり、言いたい事を言つと学園長室を出て行くとする。カヲルは伐にキチンと仕事をするように言い、

「ああ。仕事は受けてやるよ。それが野良猫<sup>おれ</sup>の流儀だからな。ばばあ、その代わり、情報に嘘が混じっていたら、誰だろうがその首を掻つ切つてやるからな。覚えておけ。余計な隠し事<sup>お</sup>をするな。野良猫<sup>れ</sup>はうるちよろとしているネズミに負ける気はねえよ」

伐は振り返る事無く言つと学園長室を出て行き、

「……まったく、素直じゃないくそじゃりだ。まあ、仕方ないね」

カヲルは伐の背中を少しだけ優しい笑みを浮かべて見送ると伐の言った通りにメールを伐のアドレスに送信し、

「……さてと、どのバカでデータを取るかだな。まあ、腕輪<sup>ふじよし</sup>の能力を見てからで良いか？ 仕方ねえな。教室に戻るか？ 木下<sup>ふじよし</sup>がまたうるせえんだろうな」

伐は気だるそうに欠伸をした後、頭を掻きながらAクラスの教室に向かい歩き出す。

## 第25問

（……フィールドの展開と多重召喚か？ 使いこなせれば役に立ちそうな能力ではあるな。フィールドを展開させて多重召喚でデータを取れば良いか？ まあ、フィールド展開の方はデータを取るためにも点数消費は一時的にも外させないといけないな）

伐はカヲルから送られてきた白金の腕輪の能力を確認していると午前中の授業が終わりを告げる鐘が鳴り、伐はデータ収集に必要なものを排除しろとカヲルに返信すると、

「黒須くん、珍しく起きてるけど何をしているんだい？」

「……別にお前には関係ねえよ。お前らの言っていた試召戦争の件は落ち着いたんだ。俺に関わるんじゃないよ」

利光が伐に声をかけるが伐は利光の相手をする気はないと言い立ち上がり、教室を出て行こうとした時、

「あ、あの。黒須くんは」

「あれ？ 姫路さんだ。黒須くん、姫路さんが呼んでるよ……って、ばくの話聞いてよ！？」

何かあるのか瑞希が伐を訪ねて来て、愛子は伐を呼びとめるが伐は瑞希が立っているドアとは違うドアから教室を出て行き、

「く、黒須くん、待ってください！？」

「……うるせえな。付いてくるんじゃないよ」

瑞希は慌てて伐の後を追いかけるが伐は気だるそうに言うと一人で屋上に向かい歩き出し、瑞希は伐の後を付いて行く。

「姫路さん、黒須くんになんのようなかしら？ 近づくと危ないわよね？」

「……黒須は口は悪いけど、本当に人の心が傷つくような事はしない」

優子は伐の後に付いて行く瑞希の事を心配するように言うと翔子は優子の心配を杞憂だと言い、

「うん。ぼくも代表の意見に賛成かな。それにここで話しても仕方ないし、それより、お昼食べちゃおうよ」

「それもそうね。あたし達が心配するようなことじゃないわね」

愛子は翔子の意見に同意するとお弁当をカバンから取り出すと優子も頷く。

「く、黒須くん、待ってください」

「……息を切らすなんて、どんだけ体力がないんだ？」

瑞希は息を切らしながら伐を追いかけて、伐は後ろから自分の名前を呼びながら息絶え絶えになっている瑞希の様子にため息を吐くと立ち止まり、

「……あ、あの。く、黒須くん」

「何だ？ 命令権ならばあくは使うつつもりもないから安心してろよ。こう言つのは使い時つてものがあるんだよ」

瑞希は伐が持っている自分への命令権は今使うつつもりはないと言うつと、

「……それとも食われないなら別だけどな」

「ち、違います。そ、それにそう言つのはす、好きになった人じゃないと」

瑞希の耳元で艶のある声でささやくと瑞希は伐の声に慌てて違つと答える。

「好きになった人とね……ずいぶん甘い事を考えているな。これで用はないな」

「ちょ、ちよつと待ってください。まだ、用があつて」

「……悪いな。見世物になる気はねえんだよ」

伐は瑞希の言葉を鼻で笑うと話が終わりだと言い、屋上に向かい歩き出すと瑞希は伐を呼び止めるが伐は先ほどからこちらの事を見ている生徒が多くなっているため、鬱陶しいと感じているため歩きだし、

「はわっ！？ ま、待ってください。私も行きます」

「……だりい」

瑞希も伐の言葉で自分と伐に向けられる視線に気づき、慌てて伐の後を追いかけると伐は一言だけ面倒くさそうに呟くと少しだけ瑞希の歩幅に合わせ、歩く速さを緩め2人で屋上に向かうと、

「……雄二、姫路さんは大丈夫かな？ 黒須くんに襲われたりしないかな？」

「大丈夫だ。いくらあいつでも油断くらいはする。絶対に姫路の弁当を食わせて仕返しをするんだ。あいつを始末しないと俺の人生は終わりだ。翔子に要らん事を吹き込む前にどっちが上か思い知らせてやる」

伐と瑞希の様子を少し距離を取ったところから明久と雄二が覗いており、

「しかし、黒須の事じゃ、油断などしないのではないかのう。それに」

「そうよ。瑞希が危険な目にあったらどうするつもりよ。瑞希みたいな娘に手作りお弁当を貰って、黒須が本気とかになったら、瑞希がかわいそうよ」

明久と雄二の行動に秀吉と美波はため息を吐くが、

「……大丈夫だ。姫路の弁当を食った時点で黒須は終わりだ」

「……うん」

「……そうじゃな」

明久、雄二、秀吉は美波が瑞希の手料理の恐ろしさを知らないため、美波から視線を逸らして瑞希の身の安全は保障する。

「ちよつと、その反応は何よ？ 瑞希のお弁当に何かあるの？ ウチにも教えなさいよ」

「雄二、どうしよう？ 美波に教えておいた良いのかな？」

「……そうだな。島田も自分の身を守る権利はあるはずだ。良いか。よく聞け……姫路の手料理は食いものじゃない」

美波は3人の反応に自分が仲間はずれにされていると感じたようで頬を膨らませて言う。明久は困ったように笑い、雄二は少し考えた後、美波に瑞希の料理は不味いと言うが、

「あんた達、何を言ってるの？ そんなわけないでしょ。瑞希くらいなら、料理なんてお手の物でしょ。あんた達だってこの間、ウチに食べさせないでがつついたでしょ」

「……島田、違うのじゃ。本当に姫路の料理は危険なのじゃ。だから、ワシらは島田の口に入らぬようにしたのじゃ」

美波は瑞希が料理をできないなどあり得ないと言うと秀吉は首を振り、

「……木下が言うなんて、本当なの？」

「……地獄を見たぞ。戻って来れないかと思った」

「……うん」

美波は秀吉の様子に顔を引きつらせると明久と雄二は頷き、

「い、意外ね……そ、それなら、お弁当攻撃ならウチの方に分があるって事よね？」

「み、美波？ ど、どうかしたの？」

美波は苦笑いを浮かべた後、料理なら瑞希に勝ち目があると思ったように明久を1度、見てからぶつぶつとつぶやき、明久は美波の様子に何か身の危険を感じたように顔を引きつらせながら美波に声をかける。

「な、何でもないわよ！？」

「そ、そう？ それなら、良いんだけど」

美波は明久の言葉に慌てて何もないと言うと明久はそれ以上は何も言わない方が良くと判断したようであり、

「……そろそろ行くぞ」

「うん。黒須くん、僕達を怒らせた事を後悔して貰うよ」

「当然だ」

雄二は伐と瑞希を追いかけると言うとも明久は伐が瑞希の料理で沈む姿を思い浮かべて口元を緩めせると雄二も明久と同じ考えのようで

ニヤリと笑つ。



## 第26問

「……で、尾行もまともにできないバカどもはなんのようだ？」

伐は屋上に着いて懷からタバコを取り出して口にくわえてオイルライターで火を点けてお粗末な尾行をしていた明久、雄二、秀吉、美波に気づいており、気だるそうに言うと、

「な、なぜ、黒須は気づいておるのじゃ？」

「尾行は完璧だったはずだよね？」

「バカ久、お前が考えも無しに動くからだろ」

「それは雄二だろ……！」

明久、雄二、秀吉は自分達の尾行は完璧だったと思っていたようで驚きの声をあげた後、明久と雄二にいたって睨みあい始め、

「……それだけ、騒げば普通は気づくわよ」

「そ、そうですね」

美波は3人と一緒にいたためか、気付かない方がおかしいとため息を吐くと瑞希は苦笑いを浮かべる。

「……」

「黒須くん？」

伐は明久と雄二の様子に気だるそうにため息を吐くとタバコに火を点けたオイルライターは熱されているため、2人に近づくと、

「あ、あつ！！！？？」

ちゅうちよする事無く熱くなったオイルライターの外装を明久の額に押し当てると明久は驚きの声を上げて額を押さえながら屋上の床を転がり、

「……次はこれを目にだな」

「お前は何をするつもりだ！？」

くわえていたタバコを手につくと雄二の目に押し当てようとし、雄二は驚きの声を上げて伐から距離をとるが、

「……決まってるだろ。目潰しだ」

「ぐおっ！？ め、目が！？」

伐は気だるそうに雄二との距離を縮めると指で雄二に目潰しを喰らわせ、雄二も明久と同様に屋上の床を転がる。

「で、木下弟いもうとと島田ぜっぺきは何をしていたか、素直に話す気はあるのか？  
最初に言っておくぞ。俺は女が相手だからと言ってちゅうちよも手加減もしない」

「ワ、ワシは男じゃ！？」

「だ、誰が絶壁よ!!」

伐は気だるそうに秀吉と美波に自分を尾行していた理由を話せと言  
うが秀吉と美波は伐の自分達の呼び方に腹を立てているようで声を  
あげるが、

「誰がそんな事を答えると言った？」

「……」

そんな2人の反応に伐は目つきを鋭くすると伐の様子が今までとは  
変わった事に秀吉と美波は気づき、威圧されて1歩後ろに下がって  
しまい、

「別に肢体カラダに直接聞いても俺は構わないぞ。後は坂本だんなを痛めつける  
のは代表様の仕事だから、吉井バカの指を1本ずつ折って行くとかな」

伐は感情もないような冷たい笑みを浮かべて明久の指を折って行く  
と言う。

「く、黒須くん!? や、止めてください!」

「そ、そうじゃ。それはやりすぎなのじゃ!」

瑞希と秀吉は伐の様子に顔を真っ青にして止めようとするが、

「やりすぎ? 知らんな。この旦那以外は俺の所有物だろ。どう壊  
そうが俺の勝手だ」

「う、嘘でしょ!? は、話します。話しますんで許してください

！？」

伐は2人の言葉を聞く気はなく明久との距離を縮めて行くと明久は自分の目に映る伐の様子に身の危険を感じて土下座をすると、

「別にどうでも良い。だいたい、こいつの毒料理を食わせて仕返しする程度の事を考えていたんだろ」

「なぜ、それを！？ ひ、姫路さん？」

伐は瑞希が小さな小包を持っていたため、中身を予想していたように明久達の浅はかな考えを言い当てると明久は口を滑らせて瑞希の料理を『毒』だと肯定すると瑞希の顔は悲しそうに変わって行く。

「ちょ、ちよつと、黒須、アキ、何を言ってるのよ！？」

「……なんだ？ 事実だろ。それを知ってるのに事実を教えないのは優しさでもねえよ」

美波は瑞希の表情の変化に伐や明久に瑞希を励ませと言おうとするが、伐は事実を教えないのは優しさでも何でもないと言つと、

「黒須、何でお前がそれを？」

「……前に言っただろ。戦力を分析するのに使えるものはすべて使う。戦争つてのは戦場以外でほとんどが決まるんだ。それもわからないから、1人相手にクラスで戦って負けるんだよ」

雄二は伐が瑞希の料理の酷さに気づいている事に驚きの声をあげるのが伐は気だるそうに言い、

「それに事実を教えた俺より、人として間違ってるのはそれを兵器扱いしたお前らじゃないのか？」

「そ、それは」

伐は非難される筋合いはないと言い、明久、雄二、秀吉は瑞希の様子に流石に気まずいように目を伏せる。

「……………つたく、めんどくせえ」

「あんたが言う事？」

伐は瑞希を励ますなり、謝るなり、次の行動に移る事もしない男3人の様子に気だるそうにため息を吐くと美波は伐を睨みつけるが、

「……………泣いてるヒマがあるなら、次にそう言われないうちにしろよ。泣いてたつて誰も助けてくれねえよ。弱みを見せれば食いものにされるだけだ。今回みたいに良いように使われるだけだ。それとも可哀想なかわいい女を演じたいのか？」

「……………そ、そんな事はないです。悔しいんです」

伐はポケットからきれいにたたんだハンカチを取り出して瑞希の涙を拭くと周りに弱みを見せるなど言うと瑞希は伐の行動の意味がわからないように目で涙をうつすらと浮かべたまま、伐の『可哀想なかわいい女を演じたいのか？』の言葉に悔しいと言つと、

「なら、自分でどうにかしろよ。そつから先は俺には関係ねえしな……………後、康太。空気を読んだらどうだ？」

「……………人違い」

伐は瑞希の言葉に周りに見えないくらいに小さく口元を緩ませると瑞希が涙目になっていいる姿に需要があると判断したようどこからともなく現れてシャッターが擦り切れる勢いで瑞希の写真を撮っている。

「つ、土屋くん!？」

「ムツツリーニ、お前、どこから出てきたんだ？」

「……………俺の嗅覚を舐めるな」

瑞希と雄二は康太の登場に驚きの声をあげると康太は目つきを鋭くして言う、

「まあ、需用はあるだろうな」

「そつ言う問題なの？」

伐は康太の嗅覚は間違っていないと言うが美波は眉間にしわを寄せ、

「知るかよ。俺は康太から写真を買わねえといけねえほど飢えても困ってもねえしな。やるだけの女なら直ぐに捕まる」

「…………それを口に出すのはどうかと思うのじゃ」

伐は自分には関係ないと言い、秀吉はため息を吐く。

## 第27問

「知るか。それで俺はいつまでこんなくだらない事に付き合わされないといけねえんだ？ 策も何もなくまた仕掛けてきて今度はどうなりたいんだ？」

「……………」

伐は瑞希の泣き顔に気まずいために何も言えない明久と雄二に向かい何の用だと聞くが2人は伐に瑞希の手料理を食べさせて仕返する事しか本当に考えていなかったようので次に続く言葉はなく、

「……………想像以上のバカだな」

伐はあまりに考えが足らずの2人の反応に眉間にしわを寄せると、

「まあ良い。せっかくだ。バカだはいひょうだんな吉井と坂本以外のバカ、ちよつと手伝え」

「な、何のようじゃ？」

伐はカヲルから依頼されている『白金の腕輪』のデータ収集を手伝わせようとするが秀吉は伐がどんな無茶な事をするか不安なように声を震わせながら聞き返す。

「こいつのデータ収集を手伝って貰うだけだ。別に取って食うような事はしねえよ……………食われたいなら別だけどな」

「な、何を言っておるのじゃ！？ ワシは男なのじゃ！？」

伐は気だるそうにポケットから腕輪を取り出すと簡単にデータ収集に協力して貰うと秀吉の耳元で望みならそっちの相手もしてやるうかと言うと秀吉は顔を真っ赤にして伐から距離を取ると、

「そう言うなら、顔を赤くして逃げんじゃねえよ」

「う、うむ。それで協力しろとはいったいどう言う事なのじゃ？」

「勘違いするな。協力じゃねえ、これは命令だ。坂本の命令権は俺じゃねえしな。それに姫路には命令権は1度だからな。今、使つのはもったいないし、俺や姫路の成績じゃ都合が悪い事もあってな。だから、お前らにやらせようと思ってな」

伐は秀吉の反応にため息を吐くと秀吉は少しだけ気まずそうに伐に向かい言うが伐は協力要請ではなく命令だと言い切り、

「ちょっと待ちなさいよ。あんた、本当にそんなものが……」

「……島田、この間も言ったがこれはお前らが考えたらずで動いた結果だ。それに俺は女を殴る事にも躊躇なんてしない。逆らうなら力づくで聞かせるまでだ。まあ、言い聞かせる方法は色々あるからな」

「わ、わかってるわよ。だ、だからと言って女の子相手にそんな事を言わなくなつて良いでしょ？」

美波は納得がいかないと言おうとするが美波の話の途中で伐は冷たい笑みを浮かべて逆らうなら制裁を加えると言うと美波は伐の様子に慌てて明久の背中に隠れながら、伐を非難する。



「……知らねえよ。男女平等って世界で言ってるんだろ。それなら、女だから殴られねえって考えは改めな。それに性別を武器にするならもつと使い方があるだろ？」

「……あんだ、今、ウチをバカにしたわね？」

伐は美波に向かい性別を盾にするなら使い方を考えると言うと美波は伐が自分に胸がない事をバカにされていると思ったようで背後には黒い何かが溢れ出し、

「……雄二、美波の攻撃力なら黒須くん相手でもどうにかなるかも」

「いや、黒須のさっきの言葉は嘘じゃないと思うんだ。あいつは島田相手でも躊躇なく、顔とかを殴るぞ」

明久は美波なら伐を倒せるんじゃないかとかすかな希望を見出すが雄二は伐相手じゃ無駄だろと言うと、

「……お前が何を勘違いしてるかわからんが、貧乳は武器<sup>それ</sup>だろ。平均以下ってのは数が少ないんだ。人の好みってのはそれぞれだしな。需用は確実にある。それにサイズが気になるなら育てるのに協力してやろうか？ だいたい、持っている人間がくだらねえ文句を言うんじゃないよ」

「な、何を言ってるのよ!？」

伐は美波の黒く溢れているものなど気にする事無く、美波のすぐ横まで移動すると彼女耳元で胸を揉んでやろうかと言うと美波は自分の胸を手で隠しながら伐から距離を取り、

「黒須、それでこの腕輪って何なんだ？ データ収集って言うんだけど俺達に何をさせるつもりだ？」

「あ？ 坂本<sup>だんな</sup>、お前には関係ねえよ。それより、ちゃんと代表様の命令に従えよ。従わねえなら、俺が無理やり従わせてやつても良いぞ。指の2、3本折れば素直に従うか？ それとも肋骨で入院、下の世話を嫁にさせるようにしてやるうか？」

「……」

雄二は伐の出した腕輪に興味があるようで伐に聞くが伐は雄二を追い払うように手を振り、雄二は伐なら本気でやりかねないと顔を引きつらせる。

「あ、あの。これって何なんですか？」

「腕輪って事は召喚システムに関係あるの？」

伐と雄二のやり取りを気にする事無く、瑞希と明久は伐に腕輪の事を聞くと、

「あ？ 文月学園に住まう妖怪ばあからの依頼でな。この腕輪のデータ収集に協力しろと言われてな。俺の点数じゃ、暴走するんだ。まあ、ぶっちゃけるとバカにしか使えない。俺が自分でデータ収集しないのはそのためだ」

「妖怪ばあ？ それはいつたい誰なのじゃ？」

「ん。学園長だ。言われなくても気づけ、他にいないだろ」

伐は腕輪の説明を簡単にすると秀吉は『妖怪ばあ』が誰かわからないように首を傾げると伐は懐からタバコの箱を取り出し、2本目に火を点けながら学園長であるカヲルからの依頼だと言うが、

「ちょっと、なんで、あんた見たいな奴が学園長先生からこんなものを渡されてるのよ!？」

「……別にお前に関係ねえだろ。だいたい、それを聞いてなんになる? 今必要なのはお前らが素直に俺の命令に従う事だ」

美波は伐とカヲルの繋がりの意味がわからないと声を上げ、伐は美波には関係ない事だと言うと気だるそうに従えと言う。

「……………伐、今回の報酬はなんだ? 俺達に話を持ってくると言う事は俺達に利がある事なんだろうな?」

「……康太は話が速くて助かるな。利があるかは知らねえよ。使える人間がバカだから、バカに仕事を持ってきただけだ。それ以上もそれ以下もねえよ」

康太は伐が持ってきた取引を受けると言う報酬の話に移ろうとするが、

「報酬?」

「ちょっと、土屋に黒須、何を言っているのよ?」

「そうじゃ、ムツツリー二、黒須、詳しく説明するのじゃ」

伐と康太の会話の意味がわからないように明久、秀吉、美波が首を

傾げて説明を求めると、

「……『詐欺師』？ 本当にいたのかよ」

「坂本くん、詐欺師ってなんですか？」

雄二だけは伐と康太の様子に何か感じたようにで苦虫を噛み潰したような表情をするが瑞希は聞きなれない言葉に首を傾げる。

## 第28問

「……文月学園で厄介事があつた時、そいつに依頼すればそれをまとめるのに的確な能力を持った人間を紹介、斡旋してくれる。それ以上に厄介なのはそいつ自身が文月学園の情報全てを知り、時には自分の都合の良いようにその情報を操っているって噂があつてな」

「そ、そんな人がいたの？　そ、それが黒須くん！？」

雄二は噂程度であつたため、本当にそんな人間がいて思つていなかったように苦虫を噛み潰したような表情をしたまま、自分が知れる『詐欺師』の話をする<sup>と</sup>明久は驚きの声をあげるが、

「……どうでも良いだろ。だいたい、坂本<sup>だんな</sup>、何度も言わせるな。お前に用はない。お前に用があるのは代表<sup>よめ</sup>だ」

「その言い方をするんじゃない！　俺は翔子と結婚も入籍もしてねえ――！」

伐は自分が何と呼ばれていようがどうでも良いように雄二を追い払うように言つと雄二は声を荒げるが伐は雄二の事など興味がないため、うるさいと言いたげに右耳の穴を指で押さえると、

「あ、あの。それで、この腕輪のデータ収集<sup>と</sup>て言っていましたけど」

「あ？　お前には関係ねえって言ってるだろ。俺が話を持ちかけてるのはバカどもだ」

「す、すいません!？」

瑞希は腕輪のデータ収集に興味があるのか伐に向かい聞くが伐は話を聞いていない人間が多い事に眉間にしわを寄せると瑞希は慌てて伐に謝り、

「それで、話に戻るぞ」

「う、受けないってのは無理なんだよね？」

伐は話に戻ると言うと言ふ明久は伐の話が危険かも知れないと思っっているため苦笑いを浮かべながら言う。

「……腕輪の能力は召喚獣の2体召喚、召喚フィールドの展開の2種類。成功報酬は姫路の振り分け試験再試験」

「……姫路を取り上げて、Fクラスの戦力を削る気か？」

伐は明久の言葉など気にする事無く気だるそうなため息を吐きながら、2つの白金の腕輪の能力と報酬の話をする報酬の話に明久、秀吉、瑞希、美波は驚きの表情を隠せないが雄二だけは伐が考えている事を理解出来たように表情は苦虫を噛み潰したような表情をしたままであるが、

「そ、それってどう言う事、僕達が黒須くんの依頼を受ければ姫路さんがAクラスに入れるって事？」

「……勘違いするな。振り分け試験の再試験を受けられるだけだ。まあ、バカに毒されてこれを棒に振るような事をしなければAクラスに入れるだろ」

明久は伐から提示された報酬に食いつくように聞き返すと伐は瑞希におかしな事は考えるなと言い、

「……」

瑞希は伐の視線と言葉に自分がFクラスに明久のそばにいたいと思っ  
ている事を見透かされていると感じているため、伐から視線を逸  
らす。

「受けるよ。黒須くん、それで姫路さんがAクラスに入れるなら」

「ま、待て。明久！！それだと、試召戦争が」

明久は伐の依頼を受けると言うが雄二は瑞希がいなくなるとFクラスがAクラスに勝てる算段が付かないためか明久を説得しようとするが、

「何だ？世の中、学力だけじゃないって言うのを見せつけるんじゃないのか？そのわりには姫路の成績頼みか？」

「ぐっ！？」

伐は雄二が試召戦争を最初に始める上で宣言した事を知っているように雄二の言葉の穴を突くと雄二は伐の言葉に痛いところを突かれたために怯んでしまうと、

「お前らの選択肢は2つ。素直に俺の依頼を受けるか。力づくで依頼を受けさせられるかだ」

「……お主は何をするつもりじゃ？」

伐は明久達の選択肢は2つだと言い、秀吉は伐の『力づく』と言う言葉に眉間にしわを寄せて聞き返す。

「あ？ 決ってるだろ。それなりに容姿の良い女が2人もいるんだ。楽しませて貰うだけだ。お前らは自分が傷つくより、他人が傷つく方が耐えられない偽善的な人間だからな。その方が素直に従うだろ」

「ちょ、ちょっと近付かないでよ！？」

伐は口元を緩ませながら美波との距離を縮めると美波は伐から距離を取ろうとするが、

「で、どうするんだ？ 一先ずは俺が冗談を言っているかどうか知るために島田<sup>ぜっぺき</sup>を引んむいてみるか？」

「や、止めてください！？」

伐から逃げきれるわけはなく伐は簡単に美波の腕をつかむと瑞希は声を上げた時、

「ん？」

「……オネエサマニテヲダスブタヤロウ、ミハルノテデヤツザキニシテクレル」

伐は何かの気配を感じて屋上のドアに視線を向けると背中に真っ黒な殺意をまとった少女が伐に向けてナイフを構えている。



「し、清水さん!？」

「み、美春!？」

明久と美波は伐へ殺意を向けた少女に明久と美波は心あたりがある  
ようで『清水美春』と言う名前を呼ぶと、

「……清水美春？ ああ、Dクラスの百合娘か？」

「オネエサマヲハナセ。ブタヤロウ」

伐は自分に向けられている殺意などどうでも良さそうに言うが美春  
から向けられる殺意はより深みを増して行き、

「く、黒須くん、逃げないとこの状況の清水さんは危険だよ」

「そ、そうよ」

「あ？　なんで、俺が逃げねえといけねえんだよ」

明久と美波は美春の様子に顔を引きつらせるが伐は気だるそうにた  
め息を吐き、

「それで、受けるのか？　犯されたいのか？」

「オネエサマ、ミハルガイマタスケマス。ソシテ、フタリノアイノ  
スヘイキマシヨウ」

「そ、そんな事を言ってる場合じゃないでしょ!？　こ、こっちに  
来ないで!？」

伐は明久達に白金の腕輪のデータ収集に協力するか確認するが美春の目的は伐を八つ裂きにしてから美波を押し倒す事に変わっており、美波は伐以上に美春に身の危険を感じているようで声をあげる。

「……黒須くん、凄いな」

「……うむ。鉄人の攻撃も交わしておったしのう」

伐は美春からの攻撃をのりくらりと交わしており、明久と秀吉は顔を引きつらせていると、

「……こんな殺意が駄々漏れの攻撃なんて当たるかよ」

「う、嘘！？あの状況の美春を捕まえる事が出来るの？」

「黒須くん、凄いです」

伐は気だるそうに美春の背後に回り、美春の腕をつかむと伐の行動に美波と瑞希は信じられないようで顔を引きつらせるが、

「……康太」

「………任せろ」

伐は気にする事無く康太の名前を呼ぶと康太は忙しそうにカメラの準備を始め、

「……おい。ムツッリーニ、黒須、お前らは何をする気だ？」

雄二は伐と康太の様子にため息を吐く。

## 第29問

「一先ずは指を入れる」

「この男、変態ですわ!？」

伐は表情を変える事なく、美春の大切な部分に指を入れると言うとその言葉は衝撃的だったようで美春は正気に戻り、声をあげるが、

「殺すと殺意を向けてきたんだ。殺されないだけマシだろ」

「ひい!？」

伐は美春の耳元で冷たく淡々とした口調で言うと、美春は伐の言葉に今まで感じた事のない寒気を感じ、小さな悲鳴を口から漏らした時、

「バカな事を言うんじゃないの!！」

「……なんだ？　島田<sup>ぜっぺき</sup>、お前が助けに入ると清水<sup>ゆりむすめ</sup>は頭に乗るぞ」

美波は伐を止めるために声を上げ、伐は美波の行動に無表情でその行動は美春の行動を上長させるだけだと言うと、

「……まあ、今はそんな事してるヒマはないからな」

「ひゃう!？」

伐は美春のお尻を触ると彼女から手を放し、美春は驚きの声をあげ

る。

「「……」」

「……………残念」

伐の行動に明久と雄二はこれから起きる事を期待していたようだが、つくりと膝を落とし、康太は想像だけで屋上の床を血に染めながら言う、

「清水<sup>ゆいむすめ</sup>、人に殺すと言うなら、自分も同じように殺される覚悟はしておけよ。お前以上にこの腐った世界には壊れている人間が溢れる」

「……」

伐は表情を変える事なく、美春に向かい言う、伐の声からは彼女さ先ほど感じた寒気を超えた寒気を感じて腰が抜けたようで床に座り込み、涙目で頷き、

「それで、受けるのか？」

「……………あんだ、何をしたのよ？」

伐は美春の様子など興味がないようで気だるそうに改めて明久達に白金の腕輪のデータ蒐集どうするかと聞くが美波は美春に何があったかわからないようで伐に向かい聞く。

「……………どうでも良いだろ。それでどうするんだ？  
吉井<sup>バカだいひょう</sup>は受けると言ったが後1人はどうする？」

「黒須、俺が受ける」

伐は美波の質問に答える気はないと言い、明久は瑞希の振り分け試験再試験の条件で頷いたため、もう1人は誰かいなかと聞くと雄二が声を前に出て自分がデータ収集に協力すると言うが、

「……依頼の報酬は変える気はない。まあ、腕輪の能力を知っておくのは後の事を考えれば有益な情報だから、使いたいのもわかるがな」

「わかってるなら言うな。それに、テストの結果がどうなるかわんてわかんねえしな」

伐は雄二の考えを見透かしているようであり、雄二は瑞希が振り分け試験の再試験で伐の思いどおりには動かないかも知れないと伐を挑発するように言うと、

「別にその時はその時にこっちは他のカードを切らせて貰うだけだ。お前と違って1つの作戦しか考え付かないような単純な頭じゃないんからな。知ってるか？ 謀略、策略はもう始まってんだ。自分が先に仕掛けていると思うっているうちは三流だ」

伐がそんな安い挑発に乗るわけもなく、

「まあ、成績で言えば坂本<sup>だんな</sup>が1番適任者だからな」

「そうなんですか？」

伐は雄二が適任だと言うと瑞希は首を傾げる。

「ああ、2体召喚は吉井にバカだいひょうフィールド展開は坂本にこれは簡単な説明書だが……バカには必要ないな。どうせ、読まないし」

「待つて！？ 確かにそんなに難しい言葉で書かれたものは読まないかも知れないけど、決めつけて破らないで！？」

伐は白金の腕輪を明久と雄二に渡すとカラルから送られてきた白金の腕輪の説明書を印刷したものを渡そうとするが無意味だと判断して破り捨てると明久は声をあげると、

「……まず、読む事を考えなさいよ」

「そ、そうですね」

明久の言葉に美波はため息を吐き、瑞希は苦笑いを浮かべるが、

「吉井の起動ワードは『多重召喚』。召喚獣が2体に別れるその際に点数は半分になる。坂本の起動ワードは『起動』。教科ランダムアウェイクンの召喚フィールドを張る事ができる。その代わり、使用者が召喚する事はできない」

伐は気にする事なくバカでも理解できるように2人に白金の腕輪を渡して説明をする。

「……明久が2体召喚か？ まあ、その方がデータを取りやすいか」「そうなんですか？」

雄二は伐の説明に少し考えると納得したように頷くと瑞希は伐の言

葉に雄二が納得している意味がわからないようで首を傾げると、

「明久はバカだからだ」

「何だと、バカ雄二!!」

「あ? やるのかバカ久!!」

雄二は明久がバカだからだと言うと明久は声を上げ、2人はにらみ合いを始めだし、

「……黒須、すまぬが説明を頼めるかのう」

「……吉井は（バカだいひょう）は觀察処分者だから、召喚獣の扱いになれているから、2体を同時に扱う事に最初は抵抗があってもなれるのはお前らより早いだろ」

秀吉は伐に説明を求め、伐は気だるそうに言い、

「なるほどね。データを取るなら、適任だって事ね」

「あ、あの。今更ですが。お姉さま達は何をしているのですか?」

美波は伐の説明に納得したようで頷くと美春はようやく抜けた腰が元に戻ったようで美波の背中に隠れながら話の状況について行けないため、恐る恐る聞く。

「……お前には関係ねえよ。余計な事に首を突っ込むな」

「は、はい!?!」



伐は美春には関係ないと言うと美春は声を裏返して返事をし、

「く、黒須、あんたは美春に何をしたのよ？」

「あ？ 別にたいした事はしてねえよ。清水<sup>しみずめ</sup>が俺に向けた殺意とは違う殺意を返してやったただだ」

美波は美春が伐におびえる様子に何があつたのかと聞くと伐は気だるそうに美春とは違う殺意を返したただだと言うと、

「周囲に駄々漏れの殺意に恐怖なんて感じるか。本当の殺意ってのはな……こう言う風に出すんだよ」

「……」

伐の声は冷たく淡々としたものに変わり、その先にいる明久と雄二は伐から向けられる殺意に身体が強張り、

「本当の殺意っての冷たく鋭いものだ。ただ周りにまき散らしてるものじゃねえんだよ。より鋭くする事で殺意の純度は増すんだよ……良いか」

「はい！？ や、やってみます」

伐は気だるそうに言うのと美春に何か耳打ちをし、彼女は声を裏返して返事をした後、

「……アノブタヤロウ、コロシマス。コロシマス」

「ちょ、ちょっと、黒須くん！？ 清水さんに何を言ったの！？」

「……変わらないか。殺意の量だけだとそれなりに有能なんだけどな」

美春は伐に言われた言葉で改めて殺意を溢れ出し明久を狙い始め、伐は小さく口元を緩ませると、

「じゃあな。俺は戻るぞ」

屋上で起きている惨事など気にする事なく屋上を後にする。

## 第29問（後書き）

どうも、作者と

伐「……」

主人公です。

美春、まさかの伐に服従。

伐「人間より、動物に近いからな」

強いものに本能的に従うと言った感じです。

一先ず、白金の腕輪を明久と雄二に預け、伐は何をするんでしょうか？

### 第30問

(……これで一先ずは良いとして、後はばあが俺にデータ収集をさせてまで腕輪の修理をしようとする理由ね)

伐は廊下を歩きながらカラルがなぜ、自分に白金の腕輪のデータ収集をさせている理由にまだ裏がある気がしているようで頭をかくと、

「黒須くん、いつまで遊んでるつもり？」

「……また、お前かよ」

優子がまた伐を探しにきたようで伐を見つけて額に青筋を浮かべながら廊下に仁王立ちしており、伐は気だるそうにため息を吐き、

「何よ？」

「……別に、それで、何のようだ？ 俺はお前にかまってるヒマはねえんだよ」

優子は伐の態度が頭にきているようで伐を睨みつけるが伐は気にする事なく、優子が自分を探している理由を聞く。

「……今日は午後から清涼祭の出し物を決めるって言ってたでしょ！！ また、話を聞いてなかったの？」

「当たり前だ。だいたい、俺がそんなものに参加すると思っているのか？」

優子は眉間にしわを寄せて伐に朝のHRで高橋教諭が話していた清涼祭のクラスの出し物の話し合いをしようと言ったが伐は参加する気はないと言い優子を交わして歩き出そうとすると、

「逃げるな!!」

「……しつこい。さっきも言ったが俺は参加しないんだ。お前らが好きな事をすれば良いだろ」

「あたしだって、そうしたいわよ。だけど、代表があんたを連れてこいって言うのよ」

優子は伐の腕をつかみが伐は自分は外して出し物を決めると言い優子を引きずったまま歩きだしが優子は翔子が伐を連れてくるように言ったと言う。

「……代表様が？」

「……何で、代表の名前が出ると止まるのよ？」

伐は翔子が自分を連れて来いと言った事に何かを感じたのか歩みを止めると優子は不満そうな表情をするが、

「……決まってるだろ。代表様は上客だからな」

伐は翔子からは依頼もあるため、翔子の指示に従うと言ったと優子を引かずったまま歩きだし、

「ちょ、ちよっと、待ちなさい!?! 止まりなさいよ!?!」

「……うるさいぞ。木下姉、文句を言うなら、手を放せよ」

「その呼び方を止めなさい！！」

「……事実だろ」

優子は伐に引きずられたままのため、伐に泊まれと言うが伐は手を放せば済む事だと言うと優子は『腐女子』と呼ばれる事が気に入らないため声をあげるが伐は表情を変える事なく本当の事を言って何が悪いと言つと、

「相変わらず、仲良いね」

「愛子、何を言ってるのよ！？」

伐と優子はAクラスの教室の前まで来ていたようでドアから顔を出した愛子が2人をからかうように言い、優子は伐と仲が良いと言われるのは心外だと言いたげに声をあげる。

「……だりい」

「……これでクラス全員がそろった。優子、始めて」

伐は愛子にからかわれて声を上げている優子の様子に構う事なく、自分の席に座ると翔子は優子に清涼祭の出し物を決める話し合いを始めるように言い、

「……わかりました。それでは」

優子は気持ちを落ち着かせるために大きく深呼吸をするとHRを始

めだし、

(……一先ずは侵入できるところから怪しいところを探すか?)

伐は清涼祭には興味がないため、パソコンを立ち上げるとカヲルが隠している事を調べ始める。

### 第31問

(……怪しいところで言えば、教頭の経費の使い込みか？……と言うか、簡単に探せるなんてどんなバカだよ。それに腕輪の不具合か？ まあ、上手く使えばいくらでも使いようはあるな。まあ、使う人間の程度の低さで対処法もどうにでもなるが……何か、ばばあの手のなかで踊らされている気もするな)

伐は侵入した文月学園のシステムからいくつか気になるものを見つけたように舌打ちをした時、

「それではあたし達Aクラスの清涼祭の出し物はメイド喫茶に決定しました。みなさん、準備期間もありありませんが協力して思い出に残る清涼祭にしましょう」

(……決まったのか？ メイド喫茶『ご主人様とお呼び』？……ダメだ。こいつらの考える事は俺には理解できない)

優子の声で清涼祭の出し物が決まったと聞こえ、伐は教室の前方に視線を逸らすと黒板代わりに使われているディスプレイには大きくメイド喫茶『ご主人様とお呼び』と表示されており、伐は眉間にしわを寄せると、

「あれ？ 黒須くんはメイド服じゃ不満？」

「……別に着てる物の違いで欲情するわけじゃねえよ。脱がせば全部一緒だ」

「ちょっと、どこに行くの？」



愛子は伐をからかうように笑うが伐は衣装になど興味がないと言うと席を立ち、教室を出て行こうとするのを見て愛子が伐に聞く。

「帰んだよ。別にこれ以上はいる必要がないだろ」

「帰るな!! 何で、出し物が決まった先からあんたは帰ろうとするのよ!! この後はシフトや各係と決めないといけない事があるのよ!!」

「……何度も言わせんな。俺は不参加だ」

伐は調べ物もここで調べられる事は片付いたため、帰ると言うとき優子は伐を怒鳴りつけるが伐はうるさいと言いたげに左手の指を左耳に運びながら改めて自分は清涼祭には参加しないと言い、

「だいたい、木下姉、お前は俺に腐女子と呼ぶなと言ったわりにはお前の欲望駄々漏れじゃねえか」

「ちが!? 違うわよ!? こ、これはあたしの意見じゃなくて、クラスの総意でしょ!!」

伐は呆れたような視線を優子に送り、ずいぶんと好きにやったなと言いつつ優子は慌てて自分だけの意見ではないと言いが、

「……メイド喫茶を候補に出したのは優子」

「見る。駄々漏れだろ」

「そ、そうかも」

翔子は優子が提案した事だと言い、伐は気だるそうにため息を吐くと愛子は苦笑いを浮かべる。

「ちが！？ 違っわよ！？ あたしは本当は『執事喫茶』がしたかったんだから、だけど、流石にそれはやり過ぎじゃない。だから、まだ、世間的に認知度のあるメイド喫茶にしたのよ。本当なら性格は何があるけど、黒須くんとか久保くんとかの絡みが！？」

「……木下さん、少しは発言を考えてくれないかな」

「……よく良いのがれをする気になったな」

優子は全力で自分の意見を押し付けたわけではないと言おうとするが本音が漏れてしまい利光はどう反応して良いのかわからないように眉間にしわを寄せながらメガネをクイツと指で上げて言い、伐は呆れたような視線を優子に送ると、

「ち、ちが！？」

「優子も諦めなよ」

優子は未だにまだ自分が腐女子だと隠し切れていると思っていたいように顔を青くしながらも否定しようとするが愛子は苦笑いを浮かべて優子に声をかけ、

「ち、違っのよ！？ こ、これじゃあ、あたしが変態みたいじゃない！！」

「まあ、性癖ってのは人それぞれだからな。気にする事でもないだ

る」

「あ、あの。何か、黒須くんが言うのと少し違った意味に聞こえますね」

優子は今まで積み重ねてきた努力を破壊されたくないようで声を張り上げて否定するが伐は冷静な声で言い切り、美穂は伐の言葉に少し顔を赤らめ、

「事実だろ。代表様、俺はとばかりを受ける前に退散するからな。お前らも木下姉ふじよしの八つ当たりに会う前に解散しろ」

「……わかった。今日はこれで解散、各自、メニューや衣装のデザイン、何でも良いから考えてきて」

伐は優子が爆発する前に帰ると言い、教室を出て行くと翔子はこの場を締めてAクラスは解散するが、

「く、黒須伐！！ 待ちなさい！！ あんたのせいよ！！」

優子は怒りで我を忘れて伐の名前を叫んで廊下に出るがすでに伐の姿は廊下にはなく、優子は伐がまた屋上にタバコを吸いに行っていると考えたようでもの凄い勢いで屋上を目指して行き、

「あちゃあ、黒須くん、逃げ切れるかな？」

「……黒須なら問題ない」

愛子は優子の様子に苦笑いを浮かべて伐を心配するが翔子は愛子の心配は杞憂だと答える。

### 第32問

(ん?)

伐は優子が予想していたのとは違い、本当に家に帰るようで欠伸をしながら校門を出ると瑞希が何か考え事をしているのか伐を追い抜いて行き、そのまま横断歩道を渡ろうとするが信号は赤であり、

「……おい。自殺なら、他人に迷惑がかからないところでやれ」

「えっ!?! は、はい。す、すいませんでした!?! 考え事をしていたもので……黒須くん?」

「何だ?」

伐は瑞希の首根っこをつかんで彼女を引き寄せると瑞希はそこで信号が赤だと初めて気づいたようで慌てて伐に何度も頭を下げるが途中で伐が相手だと気づくと首をかしげ、伐は不機嫌そうな表情で聞き返す。

「い、いえ、黒須くんだと、気づいても助けられないんじゃないかな? って」

「……」

「す、すいません!?! そ、そんなつもりじゃ!?!」

瑞希は伐が自分を助けてくれた事が意外だと言うと伐の不機嫌そうな表情を見て慌てて頭を下げるが、

「……何度も言わせんな。こんなところで死なれると迷惑なんだよ。死ぬなら、他にしろ」

「し、死にませんよ。あ、あの。黒須くん、少し、お話が！？　つて、待ってくださいよ！？」

瑞希は伐にどうしても聞きたい事があるようで伐に話があると言うが伐はすでに先に進んでおり、瑞希は慌てて伐の背中を慌てて追いかけて行く。

「あ、あの。お話、聞いて下さっ！？」

「……おい。お前は何がしたいんだ？」

「すみません」

瑞希は伐が歩く速さに小走りではないと追いつけないため、急ぐが途中で足がもつれてしまいアスファルトにダイブしそうになるが伐は眉間にしわを寄せて彼女を支えると何かいろいろと諦めたようのため息を吐くと瑞希は申し訳なさそうに伐に謝った後、

「あ、あの。再試験の事に付いてお聞きしたいんですが？」

「……わざとFクラスに残った時におかしな事をされないかを確認にきたの間違いだろ」

「……」

瑞希は伐に再試験の事を聞きたいと言うが伐は瑞希が本当に聞きた

い事を見透かしており、瑞希は伐から視線を逸らすと、

「……別に自分の生き方を決めるのは自分にしかできないんだ。俺は特に何も言う気はないし、そんな事で取って食ったりはしねえよ。カードには使い時つてのがあるんだよ。お前を押さえておけばそれなりに有効にコマが使えるからな」

「そ、それじゃあ」

伐は瑞希が再試験でどんな成績を取ろうが興味はないと言うと瑞希は安心したのか表情を輝かせるが、

「……だけどな。それが正しい道かは自分で責任を取れ。今だけを見て感情で動くのはただのバカだ」

「どう言う事ですか？」

伐は瑞希に向かい一時の感情で動くなと言うと瑞希は伐の言いたい事がわからないように首を傾げる。

「……安易な考えでFを選んだ時にお前の両親<sup>おや</sup>はなんて言うだろうな？」

「お父さんとお母さん？」

「……振り分け試験で体調を崩すような娘が最悪の環境にいる。普通に考えればお前の両親<sup>おや</sup>が考える次の行動はなんだ？」

伐は瑞希の察しの悪さに嫌気がさしながらも瑞希がFクラスに残る場合に考えられる状況を考えるように言うと、

「て、転校とかって事ですか？」

「……さあな。そんなもんは俺の知った事じゃねえよ。少なくともお前は『両親おやに愛されてる』んだろ。それなら、充分に考えられる事だ。感情で動いてバカの前から消える事になっても俺は知らねえしな」

瑞希は両親の事を考えて1つの答えが導きだされたようで表情を暗くすると伐は興味無さそうに言い、歩きだそうとするが、

「ど、どうしたら良いんでしょうか？ わ、私、転校したくないです。吉井くんや美波ちゃん、お友達とみんなと一緒にいたいです」

「……ちっ」

瑞希は伐の制服をつかみ転校したくないと涙目で言うとな伐は舌打ちをする。

「……少なくとも転校よりはクラスが違う方がマシだろ。それにお前が言う友達は『クラスや学校』が違うだけで縁が切れるなら、それまでなんだろ」

「……」

瑞希に言うとな彼女は伐の言い分に納得はできるが不安な事もあるように表情を暗くしており、

「……ったく、めんどくせえな。良いか。状況を推測する事で1番重要なのは最悪を予想する事、それと自分に都合の良い事は斬り捨

てる事だ。自分の都合の良い事を考え始めたら考える事から逃げる結果になる。最悪を見据える事はそれを回避する道を模索する事に繋がり、他に自分のすべきものが見えてくる」

「今の私にとって最悪は転校ですよね？」

「お前がそう思うならそうなんだろ。そこをお前が決めないなら、俺はこれ以上何もいう気はねえよ……」

伐は瑞希顔を上げて覚悟を決めるように言い瑞希は伐に自分にとっての最悪は転校だと確認するが伐は瑞希にもう1度、状況をしっかりと確認するように言い、

「転校はしたくないです」

「……それなら、お前が転校を防ぐためにもっとも簡単な解決方法は？」

「……再試験でお父さんとお母さんが納得する点数を取る事です」  
瑞希は転校しないための振り分け試験の重要さを理解したようだがFクラスから離れる事からは目を逸らすと、

「……それにな。お前をAクラスの設備にしたいと言った奴がいるんだろ。それを組んでやらずに棒にふられたら、そいつらは何を思うんだらうな」

「……吉井くん達の気持ちを踏みにじる事にもなります」

「……結局はクラスが変わろうとお前しだいなんだよ。Aクラスに



なったらお前はFクラスを見下すように変わるのか？」

「そんな事、ありません！！」

伐は自分が普段言う事のない言葉に自分らしくないと思っているため眉間にしわを寄せながら瑞希に向かいAクラスになると傲慢になるのかと聞き、瑞希は伐の言葉を直ぐに否定し、

「そう言うなら、それを見せてみるよ。それを見て気が向いたら、何か手伝ってやる」

「は、はい。黒須くん、今日はありがとうございました」

伐はこれ以上、瑞希の相手をする気はないように歩き出すと瑞希は伐の背中に向かい深々と頭を下げるが伐が振り返る事はない。

### 第33問

「黒須くん、おはようございます」

「……ああ」

伐は欠伸をしながらAクラスの教室のドアを開けると瑞希は振り分け試験の再試験を無事に終えたようで伐の姿を見て駆け寄ってきて挨拶をするが伐は眠いようで一言だけ返すと自分の席に歩いて行くとするが、

「何々？ 黒須くん、優子が居ながらも姫路さんともラブイベント展開中？」

「……愛子、ふざけた事を言わないで、何で黒須くんなんかと」

伐の前には愛子が立ちふさがり、伐をからかうように笑うと引き合いにされた優子是不機嫌そうに伐と恋愛関係になる事などあり得ないと言い、

「こんな事を言ってるけど、黒須くんはどうなの？」

「……面倒な事をする気はねえよ。やりたいただけなら簡単に捕まるしな」

愛子は伐にも聞くが伐は恋愛を『面倒』だと斬り捨てる。

「あはは。黒須くんらしいと言っか」

「……あなたつてつくづく最低ね」

伐の言葉に愛子は苦笑いを浮かべるが優子は嫌悪感しかないようで伐を軽蔑するような視線を送るが、

「……」

「あ、あの。黒須くん？」

「……うるせえな。寝かせろ」

伐は愛子の隣をすり抜けると自分の席に座って目を閉じると直ぐに小さな寝息をたてはじめ、

「また、遅くまでバイトしてたのかな？」

「……そのバイトもいかがわしそうだけどね」

愛子は伐の様子にバイトをしていたのかと言うと優子は伐のバイトはおかしいものだと思っているようで眉間にしわを寄せる。

「まあ、黒須くんはほっておいて、姫路さん」

「は、はい!？」

優子は伐は無視すると決めると今日からAクラスになる瑞希を見て声をかけると瑞希は慌てて返事をし、

「別に緊張しないで良いわ。えーと、改めて名乗る必要もないとは思っただけど、木下優子よ」

「ぼくは工藤愛子。これから、よろしくね」

「は、はい。よろしくお願いします」

優子は瑞希の様子に苦笑いを浮かべると改めて自己紹介をし、愛子も優子に続くと言希は2人に向かい深々と頭を下げ、

「一先ずは設備の説明をしてあげるわ。これからよろしくね」

「は、はい」

優子は瑞希に与えられた設備の説明を言い、瑞希を彼女の席に連れて行くと、

「黒須くん、何かないの？ タヌキ寝入りなんかしてないでさ」

「……うるせえな。寝かせろって言ってるだろ」

愛子は伐が寝てるふりをしてしていると気づいていたようで伐を頬を指でつつきながら言うが伐は不機嫌そうに言い、

「でも、姫路さん、よくAクラスに来る気になったね。姫路さんが振り分け試験の再試験を受けさせて貰えるって噂になった時、吉井くんの事もあるし、絶対にFクラスに残ると思ったんだけど……本当に手籠めにしたの？」

「……してねえよ」

愛子は瑞希がAクラスに振り分けられた事に違和感があるようで伐

にその原因があると思っっているのか伐に瑞希を食べちゃったかを確認するが伐は眉間にしわを寄せる。

「なら、何で？」

「いろいろ、あんだろ。そんなものを俺が知るわけないだろ。それに普通に考えれば当然の結果だろ」

「そうなんだけど、Fクラスとの試召戦争の時の姫路さんの吉井くんを見る目を考えると絶対におかしいんだよね。学園側が姫路さんへの処置はあんまりだからって振り分け試験の再試験をさせてくれたとは言え、姫路さんってどこか、頑固そうでしょ。1度、決めたら動かない気がするんだよ」

愛子は瑞希がAクラスにきた事に納得ができない部分があると言い、

「黒須くん、ありがとうございました。再試験を無駄にしていたら本当に転校させられるところでした」

「……」

瑞希は伐にお礼が言いたかったようで優子からの説明が終わると伐が起きているのに気づき、駆け寄ってきて頭を下げると伐は眉間にしわを寄せたまま頷き、

「やっぱり、黒須くんが1枚噛んでるんじゃない」

「……俺は別に何もしてない」

「照れない。照れない」

愛子は伐が照れていると思ったようにクスクスと笑いながら伐に照れるなと言つと伐の眉間のしわはさらに深くなつて行く。

### 第34問

「で、ばばあ。バカ達が集めたデータは役に立ちそうか？」

「……くそじゃり、タバコの事はもう諦めたけどね。せめて、ノックをしてから入ってこれないのかい？ 来客や西村先生がいたらどうするつもりだい？」

伐は学園長室に入ると来客用のソファーに腰掛けてタバコに火を点けると学園長室の主であるカヲルは疲れたようなため息を吐くが、

「知るか。だいたい、西村だって俺のタバコは諦めてるだろ。それで、どうなんだ？ 秘密裏に修正を終わらせて、文月学園<sup>うち</sup>の評判を下げようとする私立<sup>はかども</sup>の鼻は明かせそうか？」

「……このくそじゃりは、イヤになるね」

伐はカヲルの様子など気にする事なく、カヲルに向かい文月学園の評判を落とすために動いている私立校の事を調べ上げており、カヲルは伐の情報収集力に頭を押さえる。

「そうさね。一応は修理は終わりそうだよ。だけど……」

「……裏切り者をあぶり出すために欠陥があるらしいと偽情報を流す」

「ああ。くそじゃり、頼めるかい？」

カヲルは何か考えがあるようで口元を緩ませ、伐はカヲルの考えて

いる事をすで見透かしており気だるそうに裏切り者をあぶり出すために偽情報を流す事を告げるとカヲルは口元を緩ませたまま、伐に方法は任せると言うつと、

「情報は適当に流して置いてやる。小者の竹原に聞こえるようにな。後は召喚大会に1枚カードを切らせて貰う。そうすれば小者は勝手に自滅する」

「やれやれ。すでにうちの裏切り者にも目星が付いてるわけかい。イヤになるね」

伐は教頭である『竹原教諭』が裏切り者だと言うつとすでに伐の頭の中には竹原教諭の破滅への道が組み上がっており、タバコの煙をぶかぶかと浮かべて言い、カヲルは口ではいやになると言いながらも伐の事を信頼しているのかすでに伐に全てを任せる気であり、

「……如月グループから清涼祭のイベント用に使えと言われている『プレオープンチケット』を召喚大会優勝と準優勝の副賞に入れておけ。そうすればバカが勝手に動いてくれる」

「プレオープンのチケット？ ……あれかい？ 使った人間を無理やり、結婚させるつもりとも聞いているしね。あんまり、使いたくはないんだけどね」

伐は言いたい事は言ったよう立ち上がりながら、1つ条件を出すとカヲルはプレオープンのチケットにはあまり良くない噂もあるようで使いたくないと言うが、

「スポンサー様のお願いは聞いてあげないといけないだろ？」



「……そうさね。わかったよ。まあ、あんたの事だ、チケットが使われても問題がないようにするだろうしね」

伐は文月学園がスポンサー収入により成り立っている部分もあるため、スポンサーの意見には逆らえない事がある事も知っているため、小さく口元を緩ませて言うとかヲルは伐にはまだ考えがあると気づいているようでした。息を吐き、伐の条件を飲むと頷き、

「……報酬はまあ、依頼が依頼だからな。少し考えさせて貰うぜ」

「ああ。わかったよ。まあ、少しはお手柔らかに頼むよ」

「……気が向いたらな」

伐はカヲルが頷くのを見て学園長室を出て行く。

### 第35問

(……あいつらはバカか?)

伐は学園長室から教室に戻る途中でグラウンドで野球をしているFクラスを見て眉間にしわを寄せながら教室に戻ると、

「あつ!? 黒須くんが帰ってきた」

「お帰りなさい。黒須くん」

「……今度はどこでサボってたのよ。当日、来る気がないなら、試食して意見を言うくらいしなさいよ」

瑞希、優子、愛子は衣装合わせをしていたようでメイド服を着ながら伐に三者三様の言葉を向けるが、

「……」

「あ、あの。黒須くん、どうかしたんですか?」

伐は3人の姿を目を細めてみた後、瑞希の腰に手をまわし瑞希を引き寄せ瑞希は伐の行動の意味がわからないように首を傾げる。

「……ん? 試食に協力してやろうと思ってな」

「試食ですか?」

伐は『試食』と言うと瑞希は伐が何を食べようとしているか理解で

きていないようで首をひねっていると、

「まあ、『試食品』は気にするな」

「あんたは何をする気よ!？」

伐は瑞希のメイド服に右手を滑り込ませようとした時、優子が伐の右手を押さえつけて伐を怒鳴りつけ、

「はいはい。姫路さん、黒須くんから放れようね。妊娠しちゃうから」

「妊娠ですか? ……!？ な、何をする気だったんですか!？」

そ、そう言うのは本当に好きになった人じゃないとダメなんです!?!」

愛子は苦笑いを浮かべながら瑞希を伐から引き離すと瑞希は愛子の言葉で自分が危ない状況だった事を理解したようで顔を真っ赤に染めて伐に言うが、

「バカか? ガキができるようなへまをするわけねえだろ。だいたい、試食しろって言ったのはお前らだろ」

「学校の文化祭でそんな食事が出るわけがないでしょ!?!」

伐は表情を変える事なく妊娠なんてさせるかと言うと優子は伐を怒鳴りつける。

「……うるせえな。売れば直ぐに客が付くぞ。少なくともお前ら3人は上の上だ」

「あつ、誉めてくれるんだ。ありがとね。黒須くん」

伐は優子にうるさいと言いたげに右耳を指でふさぎながら言つと愛子は伐なりに誉めてくれていると思つたよつで笑顔を見せると、

「……それなら、素直に言えないの？」

「ありがとございます」

優子是不機嫌そうな表情で伐に言い、瑞希は少しだけ照れくさいのか苦笑いを浮かべながら頷くが、

「……」

「照れた？ 照れた？」

伐は不機嫌そうな表情で席に戻ろつとすると愛子は伐を逃がす気はないよつで伐の右手に抱きついて伐の顔を覗き込む。

「……勝手に言つてろ」

「あー、黒須くんが拗ねた」

伐は愛子の顔を引き離しながら言つと愛子は伐はからかわれて拗ねたと言つと、

「愛子も遊ばない。それで、黒須くん、試食を頼める？」

「……最初に聞いておくが姫路が作つたものはあるか？」

「姫路さんが作った料理？ あれ？ 黒須くんってそう言う事、最初に姫路さんの腰に手を回してたし」

優子は少しは伐がからかわれているのに気が晴れたようで伐に改めて試食をするように言い、伐は少し考えた後、瑞希が作った料理はあるかと確認し、愛子はニヤニヤと笑いながら伐に瑞希が好きなのかと言いたげに言うが、

「どれだ？」

「えーと、これとこれです」

「そうか……」

「ちょ、ちょっと、黒須くん、何をするのよ!？」

伐は気にする事なく瑞希に料理を作ったかと確認すると瑞希は遠慮がちに作った料理を指差すと伐は表情を変える事なく瑞希の料理をゴミ箱に捨て伐の突然の行動に優子は驚きの声をあげる。

### 第36問

「……ゴミはゴミ箱って言葉は誰でも知ってるだろ」

「ゴミって、何を言ってるの？ せつかく、姫路さんがFクラスの友達に食べて貰うんだって頑張ってたのに」

伐は瑞希の料理を「ゴミ」と言い切ると愛子は伐を非難するように言う  
と、

「……工藤、姫路にレシピを聞いてから俺の判断が間違ってる  
考えろ」

「何を言ってるのよ！！　こんなにおいしそ……何？　久保くん」

伐は自分は何一つおかしい事は言っていないと言うと優子は伐を怒  
鳴りつけようとするが利光が優子の言葉を遮り、

「……姫路さん、君は厨房に入らないでくれるかい」

「お願いします」

利光は眉間にしわを寄せながら瑞希に言う  
と美穂は申し訳なさそうに瑞希に頭を下げる。

「ど、どう言う事？」

「……姫路、今回は何を入れた？」

「あ、あの……」

優子は利光と美穂の反応に何が起きたかわからないようで2人に聞き返すと伐は瑞希に料理におかしな物を入れてないかと聞くと瑞希の口からは多くの危険な薬品があげられ、

「……姫路さんが厨房に入らない方が良いと思う人、挙手」

「……満場一致で瑞希はホール」

優子は瑞希をホールのみの仕事にしようと決を採ると瑞希以外全員が手をあげてクラス代表の翔子は瑞希に仕事を言いつけるが、

「ど、どうしてですか!？」

「……普通に考える。死人を出す気か」

瑞希は驚きの声をあげると伐は眉間にしわを寄せて言つと、

「それじゃあ、黒須くん、試食お願いできる?」

「……パスだ」

愛子は伐と瑞希の様子に苦笑いを浮かべた後、改めて、伐に試食をするように言うが伐は試食をする気はないと言う。

「どうして? 女の子の手作り料理だよ」

「……うるせえな」

愛子は伐の反応の意味がわからないようで首を傾げると伐は眉間にしわを寄せたままと言つと、

「あれ？ 照れてるの？」

「……黒須の弱点発見？」

愛子は伐をからかうように笑い、翔子は首を傾げ、

「それじゃあ、黒須くん、あーん」

「……止める」

愛子は伐の口元に運ぼうとするが伐は拒否をし、

「……なんだ？」

「いや、何となく、こう言うノリじゃないかなと思うんだよ」

「そうです」

伐の腕を瑞希と利光がつかむ。

「それじゃあ、行ってみようか」

「……止める。吐くぞ」

「何を言ってるのよ？ そこまで……おかしなものは作ってないわよ」



愛子は伐が嫌がるのが楽しいようで笑いながら伐に口を開けると言う  
と伐は眉間にしわを寄せたまま食えると吐くと言い、優子は瑞希  
の料理を捨てたゴミ箱を見た後、おかしい物は作っていないと言っ  
が、

「……悪いな。これは俺の問題だ」

「……黒須の問題？　そう言えば、黒須がまともなご飯を食べてる  
のを見た事がない」

伐は瑞希と利光を振りほどくとわけも話さずに逃げる事は無理と判  
断したようで『自分の問題』と言うと翔子は同じクラスになってか  
ら、伐がまともな食事をしているのを見た事がないと言うと、

「そう言えば、いつも携帯固形食よね？」

「……悪いか」

優子は伐の食事を見て言い、伐は眉間にしわを寄せて言う。

「そ、それって、どう言う事ですか？」

「……お前に関係はねえだろ」

「それじゃあ、黒須くんには当日、接客して貰う？　黒須くん、器  
用そうだから、料理班で考えてただけだ」

瑞希は伐に理由を聞くと伐は首を突っ込むと言い、愛子は伐の清  
涼祭当日の仕事をどうするか首を傾げると、

「……愛子、黒須くんは当日、来ないわよ。ずっと、言ってるでしょ」

「そんな事ないよね？ 何なら、着てみる？」

優子は伐は清涼祭に来ないと言うが愛子は伐が清涼祭をサボると言っているのはツンデレの１部分だと思っているため、伐をからかうように予備のメイド服を持ち出し、

「……黒須は似合いそう……細い」

「そ、そんな！？ く、黒須くん、どう言う事ですか！？ どうして、男の子なのにこんなに細いんですか！！ ずるいです！！」

「う、これは……」

「……お前らは何がしたいんだ？」

翔子は伐の顔をまじまじと見た後、伐の腰に手を回してつぶやくと瑞希は翔子の言葉を確認するように伐の腰に手をまわすと伐を非難するように叫び、優子や多くの女子生徒が瑞希の行動に続き伐は眉間にしわを寄せたまま言う。

### 第37問

「黒須くん、着てみようか？ 黒須くんなら似合うよ」

「……工藤さん、いくらなんでもそれはないよ」

伐が女子生徒達に囲まれている様子に愛子は改めて伐にメイド服を着るように言々と利光は眉間にしわを寄せながら伐に失礼だと言うが、

「……お前らのプライドを叩き潰して良いなら着ても良いぞ」

伐は表情を変える事なく言い切り、女子生徒達は伐に負けそうな気もしたのか教室は静まり返る。

「あれ？ 黒須くんって女装に抵抗ないの？」

「あ？ 別に死ぬわけじゃないだろ」

愛子は伐が拒絶すると思っていたようで首を傾げると伐はどうでも良さそうに言い、

「それでどうする？」

「……少し見てみたい」

伐は気だるそうに言々と翔子は伐の女装に興味をひかれているようでみたいと言々と女子生徒だけではなく男子生徒からも翔子の言葉に同意する声が聞こえ、

「それじゃあ、黒須くんの考えが変わる前に行ってみようか？」

「……騒ぐな。別に逃げやしねえよ」

愛子は伐の手を引いて更衣室代わりの一画に伐を連れて行くところだが伐は愛子の手を払うと一人で歩いて行き、

「……どうしよう。少しだけ後悔している自分がいるわ」

「……はい。何か、黒須くんの言った通り、女の子としての自信を打ち碎かれそうな気がします」

瑞希と優子は伐の背中を見て後悔し始めたようで顔を引きつらせる。

「……なんだ？」

「……負けた」

「ちょ、ちよつと似合い過ぎかも」

伐は着替え終えて戻ってくると女子生徒達は翔子と愛子を抜かして膝を付き、愛子は苦笑いを浮かべ、

「……黒須、化粧もしてる？」

「ああ。やるからにはやる」

「って、何で、化粧道具を持つてるのよ！？　と言うか、何でそんなに上手いのよ！？」

翔子は伐の顔を覗き込んで伐が化粧をしていると言うと表情を変える事なく言い切り、優子は伐が化粧道具や化粧の仕方を知っている事に声をあげると、

「黒須くんって本職の人なんですか!？」

「本職の基準がわかんねえがバイトで着る事はある。そこで覚えた」  
瑞希は伐の女装姿に膝にきているようだが何とか立ち上がり、伐に聞くと伐はくだらない事を言うなと言うがクラスメート達は伐のバイト内容が気になるようで顔を引きつらせるが、

「……決まり、黒須もホール」

「だ、だよね」

翔子は気にする事なく伐にホール班になるように言い、愛子は苦笑いを浮かべて頷く。

「ダ、ダメよ!？　こんなのが出てきてお客さんにバレたら問題が」

「学祭だし、ノリで行けるんじゃないかな？　何なら、他の男子も着てみる？」

優子は伐の女装姿に女子としてのプライドを完全に引き裂かれているようで全力で反対しようとするが愛子は面白そうだから伐以外の男子生徒も着てみると言い始め、

「……いや、流石に無茶だろ」

「……遠慮させて貰うよ」

伐は気だるそうにおかしな事を言うなと言い、利光を中心とした男子生徒の多くは首を振るが数名の男子生徒はノリでやってみると言いだし、

「……黒須、可愛くしてあげて」

「……何で、俺がそんな事をしないとイケねえんだ？」

翔子は男子生徒数名の着替えを手伝うように指示を出すと伐は面倒だと断ろうとするが、

「……清涼祭の喫茶店の売り上げの15%は依頼料」

「……20」

「……18%」

「……仕方ねえな。木下、<sup>ふじよし</sup>久保。材料を買う業者やメニュー内容、データを出しておけ。チェックしてやる」

翔子は伐に清涼祭に参加させるために依頼料を決めると伐の態度は変化する。

### 第38問

「……」

「……なんだ？」

伐がノリでメイド服を着ると言った男子生徒の着替えを手伝い終えるとまたも女子生徒達は膝を付いており、

「あ、あんたは何なのよ!!」

「……お前らがやれと言っただろ」

優子は完全に女の子のプライドを打ち砕かれたため、伐に喰ってかかるが伐は優子を軽く交わすと、

「あ、あの。黒須くん、そのお化粧って私にもやって貰えませんか？」

「あ。姫路さん、抜け駆けはズルいです」

瑞希は遠慮がちに伐に自分にも化粧をして欲しいと言つと美穂も続き、女子生徒達は騒ぎ始め、

「……黒須くん、この騒ぎはどうするんだい？」

「知るか。一先ずはさっき言っておいたものは準備できてるか？」

利光は女子生徒の様子に眉間にしわを寄せながら、この騒ぎを収集

してくれと言うが伐は気にする事なく利光にデータを見せると言う。

「まあ、全てではないけど、今のところまとまっている情報だよ」

「……仕入れ値が高い。この業者は食品偽装している。ここも止めた方が良さな。ここを使うなら、この業者を使って」

伐は利光からデータを受け取ると彼の持っている特殊な情報網を使って業者の選別及び値切りできるのであるうギリギリの値段を記入して行き、

「……黒須くん、あなた、何をしてる人なの？」

「うるせえな。別にどうでも良いだろ」

優子は今まで時間をかけてきた事を全てひっくり返して行く伐の様子に顔を引きつらせるが伐は気にする事なく、

「後はメニューの確認か？……誰だ？こんな原価率が高い上に面倒なものを作るって言いだしたバカは？削除だ。それなら、これを入れて、他に売りになるものは……代表様、Aクラスの設備で考えるとこれってどうにかならないよな？」

「……こんなものを？誰が使うの？」

「誰も出来ねえなら、俺がやる」

伐はメニューの調整も始め出すと客寄せが足りないと思ったように翔子を呼んで何かを提案するが翔子は伐の考えが理解できないように首を傾げるが伐は気にする事なく、必要なデータを入力し、



「流石に他に使いようがないから、買うのは無理か。まあ、こんなものを買っても後で使えねえしな。まあ、ばばあに許可をもらって移動するか。報酬の前渡しとでも言えばどうにかなるしな」

「……学園長先生を何に使う気よ？」

伐は清涼祭での偽装情報を流す代わりにカヲルに何か頼むと言うと優子は伐を睨みつける。

「お前には関係ねえよ……なんだ？」

「黒須くん、お願いします。最初は私からです」

「はい。できれば黒須くんの技術も教えてください」

伐は優子には関係ないと言った時、瑞希と美穂を先頭にした女子生徒達が伐を囲んでおり、化粧の仕方を教えて欲しいと言い、

「……パス。面倒だ」

「黒須くん、よろしくお願いします」

「……」

伐は面倒だからイヤだと言うが女子生徒達は伐との距離を縮めて行き、伐は眉間にしわを寄せていると、

「黒須くん、諦めたら、それに教えてみて上手い人に本番に手伝って貰えば良いんだから」

「確かにそうだね」

愛子は苦笑いを浮かべながら伐に化粧の仕方を教えるように言い、利光も愛子の意見に賛同し、

「……つたく、面倒だな。良いか。簡単に教えると言っても肌の状態とかでも変わってくるんだ。化粧品にも相性もあるしな。代表様、これは経費で落ちるのか？」

「……黒須の申請の仕方次第」

伐は愛子の言いたい事も理解出来るようで乱暴に頭をかくと翔子に化粧品の仕入れもしないといけなくなると言うが翔子は伐任せであり、

「……黒須くん、頑張つてね」

「やれば良いんだろ。やってやるよ。とりあえず、今、持つてる奴だと……」

「ど、どうしたんですか？」

愛子は苦笑いを浮かべながら伐に向けて無責任な応援をすると伐は半ばやけくそになっているのか舌打ちをすると瑞希の顔をのぞき込み、瑞希は伐の行動の意味がわからないように首を傾げる。

「……姫路と佐藤、木下は手持ちじゃ、合わないな。後は工藤、霧島……それと」

「ボクも？」

「一先ずはタイプの違いでも変わってくるだろ。ったく、めんどくせえ、めんどくせえ」

伐は首を傾げている瑞希の様子を気にする事なく、他の女子生徒の顔を覗き肌の状態などを確認した後、文句を言いながらもパソコンで何かを入力して行き、

「……黒須くんって有能ね」

「……今回の事を見て、改めてそう思うよ」

優子と利光は伐のパソコンを覗き込むとパソコンには女子生徒1人1人の肌に合いそうな化粧品や似合うであろう化粧方法などが書き込まれており、2人は顔を引きつらせながら言う。

### 第39問

「…………どうだ？」

「…………上出来」

「あ、あの。どうして、土屋くんが？」

伐が手持ちの化粧品でどうにかなりそうだと言っていた数名の女子生徒のメイクを終わらせるところからともなく康太が現れてシャッターが擦り切れる勢いで写真を撮っており、そんな康太の姿に瑞希は苦笑いを浮かべると、

「…………俺の嗅覚を舐めるな」

「嗅覚って…………」

康太は目つきを鋭くして言い、優子は康太の様子に頭が痛いのか頭を押さえるが、

「康太、ここをこうして、こうすると売上の何割を貰える？」

「…………このレベルだところなるから、モデル料としてはこうだな」

「…………そうか。それなら、タイプ別で売り出して別バージョンも撮って」

「…………確かにそれは良い手かも知れない」

伐と康太は次の打ち合わせに入っており、

「……黒須くん、土屋くん、君達は何をしてるんだい？」

「あ？ 別にどうでも良いだろ」

「………何もしていない」

利光は2人の様子に眉間にしわを寄せて聞くと2人は答える義務はないと言いたげに首を振る。

「あ、あの。土屋くん、吉……Fクラスのみなさんは元気ですか？  
それにFクラスは清涼祭で何をするつもりなんですか？」

「………何も決まっていない」

「さつきも野球をやっていたしな」

「や、野球って、何してるのよ？」

瑞希は康太に明久の事を聞きたいのだがFクラスと言い直すと康太はFクラスは何も決まっていないと答え、伐は廊下からグラウンドを見た時にFクラスが野球をしていた事を思い出すと優子はFクラスの行動に眉間にしわを寄せると、

「まあ、そろそろ、西村に怒鳴られて教室に連れ帰られるところだろ。康太、そろそろ、帰った方が良くないじゃないか？」

「………そうだな。この話はまた後にしよう」

伐は時計で時間を確認して康太に教室に帰るように言うと康太は頷き、

「あ、あの。土屋くん、清涼祭ではFクラスに遊びに行きたいんですけど」

「……………わかった。俺達もAクラスに負けない展示物を作ろう」

「はい」

瑞希は1人でFクラスには行きづらい事もあるようで清涼祭なら気兼ねすることなくFクラスに行けるため、康太に声をかけると康太も瑞希の言いたい事がわかったようで頷くと瑞希は笑顔を見せ、

「……………別に行きたいなら行ってきたら良いだろ。ああ、そうだ。康太、バカどもに言っておけ、売上げの半分は徴収するから真面目にやれとな」

「……………徴収ってやり過ぎじゃないかな？」

伐は伐なりの激励なのか気たるそうにFクラスへの伝言を康太に頼むと愛子は苦笑いを浮かべるが、

「良いんだよ。それくらいは言わねえとバカは動かねえからな」

「……………何か企んでる目だ」

「……………わかった。伐が何を考えているかはわからないが雄二に伝えておこう」

伐の様子に愛子は苦笑いを浮かべながら言つと康太は伐の伝言を雄二に伝えると言つと、

「……そして、雄二は勝手にどつぼにはまる」

「まあ、そう言つ事だ」

翔子は伐の言葉で雄二が勝手に挑発される事が目に見えたようではつりとつぶやくと伐は気だるそうに言つ。

「……それじゃあ、俺は戻るぞ」

「ああ」

「つ、土屋くん、あの」

康太は話は終わったと判断して教室に戻ろうとすると瑞希は康太を引き止め、

「……明久達にも姫路が清涼祭で遊びにきたいと言つていた事は言つておく。その代わりに清涼祭の時に何か奢つて欲しい」

「は、はい。みんなできてください。私、頑張りますから」

「……ホールをな。厨房には入るなよ。死人が出るから」

康太は小さく瑞希の言いたい事を察して頷くと瑞希は気合いを入れるように小さく拳を握りしめるが伐は気だるそうに言つと、

「そうね」

「うん。姫路さんはホールで、頑張ってるね。厨房には入らないようにね」

優子と愛子は先ほどの瑞希の料理のレシピを聞いているせいか瑞希を絶対に厨房に入れるつもりはなく、

「どうしてですか！？ わ、私、頑張りますから、私にもお料理させてください。みなさんが美味しさのあまりに言葉も出なくなる料理を作りますから」

「……息の根を止めるつもりか？」

「……瑞希、諦めて」

「……伐が教えれば問題ないんじゃないか？」

瑞希は清涼祭までに調理班でも行けるように努力すると言いたですがクラスメートは誰も首を縦に振る事はないが康太は伐に瑞希に料理を教えるように言う。

「……イヤだね。これ以上、無駄な仕事を誰がするか。ただでさえ、面倒な仕事が増えてるんだ」

「ねえ。ムツツリー二くん、黒須くんって料理上手なの？」

「……………絶品」

伐は瑞希に料理を教えるなど無駄でしかないと言うと愛子は康太の



言葉に食いついて伐の料理の腕を確認すると康太は一言だけ言って教室を出て行き、

「く、黒須くん、私に料理を教えてください！！」

「……ひつつくな。だいたい、これ以上、俺の仕事を増やすな」

「で、ですけど、みんなが吉井くんがくるんです。お願いします。私にお料理を教えてください」

瑞希は康太の言葉で伐に泣きつきはじめ、伐は眉間にしわを寄せるが瑞希は諦める事はなく、

「……泣き落し<sup>て</sup>って、実は黒須くん<sup>に</sup>有効な手段よね」

「うん。だって、ツンデレにゃんこだし」

伐と瑞希の様子に優子はしばらくした後<sup>に</sup>伐が泣き落しに負ける姿が目<sup>に</sup>浮かんだよう<sup>で</sup>眉間にしわを寄せながら言<sup>つ</sup>と愛子は苦笑い<sup>を</sup>浮かべ、

「断る」

「お願いします。頑張りますから」

伐は教室にいと厄介な仕事が増えそう<sup>な</sup>ため、教室を出て行こうとする<sup>が</sup>瑞希が伐の腕をつかみだし、

「……無駄な事をさせるな」

「無駄にしませんから、お願いします」

伐は瑞希を引きずったまま教室を出て行き、

「……どれだけ持つと思う？」

「—まずは教室に戻ってきた時は姫路さんに料理を教える事になっていると思います」

翔子は伐がいつ泣き落しに落ちるかと言つと美穂は直ぐに落ちると苦笑いを浮かべる。

## 第40問

「……お前は何なんだ？」

「どうかしましたか？」

「……姫路さん、どうして薬品を入れようとするんだい？」

結局、伐は瑞希の泣き落しに負けてタバコを吸い終えた後、瑞希の料理を見ているが瑞希は薬品を取り出して料理に入れようとし伐は瑞希の腕をつかみ、利光は眉間にしわを寄せる。

「……何度も言わせるな。料理に薬品は使わない。料理ができない事を誤魔化すために指揮を執って厨房（こしやう）に来ないようにしている木下（ふじよし）とは違うんだ。それさえ、止めれば食えるものは作れるだろ」

「黒須くん、おかしい事を言わないでくれるかしら？」

伐は瑞希の手際は悪くないと思ったようで味付けだけを見直せと言うが伐の言葉には悪意が混じっており、引き合いに出された優子はこめかみに青筋を浮かべながら伐に言い返すが、

「おかしい事と言うならやってみろ。恥をさらすのがわかっているから、プライドの高いお前にはできないだろうがな」

「……」

伐は違うと言うならやって見せると言うつと優子の動きは止まり、その様子から優子が料理をできない事は教室全体が納得し、

「ち、違っわ！？ 私は」

「慌てて弁明する姿が滑稽だな……おい。言ってるそばから薬品を持ち出すな」

優子は慌てて否定しようとするがすでに遅いため、伐は優子のように表情を変える事無く言っている隣で瑞希は伐に捕まれている手とは逆の手を新たに薬品に手を伸ばそうとする。

「えーと、えへ？」

「……えへじゃねえよ」

瑞希は笑って誤魔化そうとするが伐はため息を吐き、

「良いか。次に薬品に手を伸ばしたら2度と俺に逆らえない肢体カラダにしてやる」

「そっちで言う事を聞かせるんだ」

「当たり前で、こいつに料理を教えるにしても俺に旨味なんて1つもないんだ。それに他人に物を教えるって言ってるわりに自分の好き勝手やってるんだ。失礼にもほどがあるだろ」

「た、確かにそうですね」

伐は瑞希を脅し、愛子は伐の言葉に苦笑いを浮かべるが伐は瑞希の態度に頭にきているようであり、美穂は苦笑いを浮かべると、

「……でも、教えてる人に問題があるから、姫路さんも真剣に聞けないんじゃないかしら？」

「あ？　どう言う意味だ？」

優子は伐にバカにされているためか伐に原因があるせいで瑞希が言う事を聞かないと言う。

「そうでしょ。実際、料理をして見せるわけでもない。黒須くんの料理は美味いと言ったのは土屋くんだけでしょ。信じるだけの証拠もないわけでしょ」

「バカにされた仕返しをしたいわけか？　くだらねえな」

優子は伐を睨みつけて伐の料理の腕を信用していないと言うが伐は優子の挑発に乗る事はなく、

「……優子、熱くなるのも良いけど、今日の黒須くんを見てたらわかるだろうけど、絶対にプライドを引き裂かれるよ」

「……2度と立ち直れないくらいに叩き潰される」

愛子と翔子は優子のプライドなど伐は気にする事無く叩き潰すと言うとクラスメート達も同じ意見のようで大きく頷き、

「……」

「そうだな。そこまで言うなら特別に何か作ってやろう。姫路、どけ。薬品なんて必要ないと言う事を今からやって見せてやる」

「は、はい」

優子は2人の言葉に少しだけ冷静になったように納得がいかなさそうな表情をするが伐は優子の表情を見て小さく口元を緩ませると瑞希に調理場からどけるように言っていると料理を始め出し、

「……今更だけど、黒須くん、性格、悪いよね？」

「タイミングを狙ってただろうしね」

「はい。完全に木下さんのプライドを叩き潰そうとしてます」

伐の手際の良さに周りの生徒達は息を飲み、出来あがった料理は優子のプライドを粉々に打ち砕いた事は言うまでもない。

## 第41問

「……少しは真面目にできねえのか？」

「く、黒須！？ な、何のようなのじゃ？」

伐はFクラスの教室を覗くと清涼祭の準備をする事無く、遊びまわっている生徒達を見て眉間にしわを寄せると秀吉は伐の顔を見て驚きの声をあげ、

「木下、いもうと吉井と坂本はどこに行った？」

「ワシはお！？」

「……あ？ 誰がお前の話を聞いてるんだ？ ばかだいひょうだんな吉井と坂本はどこに行ったと聞いてるんだ？」

伐は秀吉の事など気にする事なく、明久と雄二の居場所を聞くと秀吉は伐の自分の呼び方が気に入らないようで声をあげるが伐は秀吉の言い分など聞く気などなく、秀吉に2人の居場所を改めて聞くと、

「わ、わからぬのじゃ！？」

「……ちつ、役に立たねえな」

秀吉は慌てて首を振り、伐は舌打ちをした後、教室を出て行く。

（……あのバカ2人はどこに行ったんだ？ 別に明日でも良いか？）

伐は廊下に出ると気だるそうに頭をかいた後、家に帰ろうとするが、

「吉井と坂本だと!? また、あいつらか!？」

(……いたよ)

外から西村教諭の叫び声が聞こえ伐は眉間にしわを寄せた時、

「あらよつと……く、黒須くん!? ちょ、ちよつと何をする気!？」

「あ? 決ってるだろ」

空いていた窓に明久の手がかかるが伐は明久の手を払い、明久は窓の外に落ちて行き、

「て、てめえ!? バカ久、何をしてんだよ!？」

「し、仕方ないだろ。バカ雄二!! 上に黒須くんがいたんだよ!！」

明久は雄二の上に落ちたようで2人で言い合いを始め出す。

「吉井、坂本、よく戻ってきたな」

へ「げっ!? 鉄人!？」

言い合いを始めた2人に西村教諭が追いつき、2人の首根っこをつかもつとするが、



「西村、そのバカ2人には俺が用がある。引き渡せ」

「ぐほっ!?!」

「……黒須、先生と呼べ」

伐は窓から平然と飛び降りると明久と雄二を蹴り飛ばし言うところ西村教諭は眉間にしわを寄せる。

「おい。寝てんじゃねえよ・最下層のクズが俺の貴重な時間を無駄にするんじゃない」

「ちょ、ちよつと、黒須くん!? そ、そう言うなら、あ、足!? 足を避けて!?!」

しかし、伐は気にする事なく、伐に蹴り飛ばされて地べたを這いつくばっている2人の腹を踏みつけながら明久に声をかけると明久は伐に足を避けて欲しいと言うが、

「避けて? 避けてくださいだろ?」

「ちょ、ちよつと待て!?! 黒須!?! そこじゃねえだろ!?!」

伐は不愉快だと言いたげに明久と雄二を踏みつけている足に力を込めると雄二は声をあげ、

「……黒須、教育指導は任せるがほどほどにしておけよ」

「待て!?! それはおかしいだろ!?!」

西村教諭は明久と雄二へのお仕置きを伐に任せたようであめ息を吐いた後、生活指導室に戻ろうとすると2人は西村教諭の行動はおかしいと言い、

「騒いでんじゃねえよ。俺の貴重な時間を無駄にするなって言ってるんだろ？」

「「や、止める！？ は、はみ出る！！」」

「止める。じゃねえって言ってるだろ？」

伐はバカ2人の相手をしないといけない事に嫌気がさしてきたようであるが踏みつける足の力は緩む事はなく2人の体力ゲージは削られて行く。

## 第42問

「……黒須、お主は何をしたのじゃ？」

「うるせえな。ったく、気を失いやがってめんどくせえな。おい。  
いもつと木下弟、ぜったへき島田、避ける」

「ちょ、ちよつと、この状況で何をするつもりよ！？　ちよつと、待ちなさい！？」

伐の様子に秀吉と美波は明久と雄二の事が心配になったようで3人を探していたようで中庭で3人を見つけたのだが、明久と雄二は地面に伏せて動く様子もなく、秀吉は伐に何をしたかと聞くが伐は興味もなさそうに近くにあった水道にホースを取りつけると4人に向かい水を勢いよくかけ美波は驚きの声をあげる。

「……ぜいへき島田、サイズを間違えると形が崩れるぞ」

「死ね！！」

伐は水がかかった美波の様子を見て、下着のサイズが合っていないと言つと美波の背後からは殺意の炎が燃え上がり、伐に渾身の右ストリートが放たれるが伐はその攻撃を表情を変える事なく交わし、

「……ったく、ふじよし木下姉もあれだが、サイズの問題じゃねえだろ」

「ちょ、ちよつと！？　あ、あんた、何をしたのよ！？」

「あ？　これくらいは誰だってできるだろ？」

「……できるわけがないであろう」

伐は美波の下着を抜き取っており、美波は伐の手の中にある下着を見て慌てて自分の胸を隠しながら言うが伐は興味無さそうに誰にでもできると言うと言秀吉は顔を引きつらせるが、

「伐くん、その神々しく光るお姉さまのブラを美春に美春に」

「あ？　こんなものが欲しいのか？　ただの布だろ。重要なのは中身だろ」

「確かに中身も大切ですわ！！　ですけど、ですけど、美春にとってはそれはとても大切な宝物なんですわ！！　宝物なんですわ！！　重要なところなので2回言わせていただきましたわ！！」

「そうか？　やっても良いがただとは行かないな」

「み、美春！？　な、何で、あんたがいるのよ！？　黒須も返しなさい！！」

美春は本能で今の状況を嗅ぎつけたようで伐に美波の下着をくれと飛び付くが伐は美春の手を交わしており、美波は顔を真っ赤にして伐に下着を返すように言う。

「あ？　俺に殺意を向けたんだ。この程度で済んで良かっただろ」

「ちょ、ちょっと、ば、伐くん、何をするつもりですか？　だ、ダメです。美春の始めてはお姉さまに奉げると」

「あ、あんた、こんなところで何をするつもりよ!？」

伐は美波の言葉を鼻で笑うと美春の背後に回り込み、彼女を押さえつける。彼女の胸に手を伸ばして揉み始め、美春は抵抗を試みるが彼女の口から洩れる吐息は艶のある声に変わり始め、美波は伐の行動に驚きの声を上げた時、

「……………」

「ようやく、お目覚めか？」

明久と雄二は美春の艶のある声に反応したようでまじまじと美春を視姦しており、伐は

2人の様子にため息を吐くと、

「……………殺しますわ。豚野郎ども、オネエサマダケデハナクジョセイ  
トミレバミサカイナクナルブタヤロウ」

「し、清水さん　ちょ、ちょっと待って!？　今、攻撃されるのは  
僕と雄二じゃないよ!？」

「そ、そうだ!!　俺達は目を覚ましたらこんな状況だっただけで  
!？」

「……………雄二、浮気は絶対に許さない」

美春の殺意は一気に膨れ上がり、明久と雄二は慌てて自分達のせいではないと言いが雄二の後ろには黒い殺意をまとった翔子が立っており、

「待て！？ 翔子！？ お、俺は悪くない！？」

「……雄二、これだけじゃない。さっき、女子更衣室を吉井と一緒に覗いていたと聞いた。夫のしつけをするのは妻の役目」

「……アキ、覗きつてどう言う事かしら？」

「美波！？ ちょ、ちょっと待ってよ。僕は雄二を探しに行ったただけで覗きたいと思った事は」

「毎日思ってる？」

「当然だよ！！ ……あれ？」

「アキ、覚悟は良いわね？」

美春と翔子の殺意にあてられた美波からも殺意の炎が上がり、明久はこのままでは殺されると判断したようであき美波に土下座をして謝るが、伐の誘導に乗り自滅して美波に関節技を喰らい始め、

「……つたく、話も聞けねえのかよ」

「……お主が言つて良い言葉ではないのじゃ」

「まあ、良い。俺もバイトもあるからこれ以上は付き合つてられないしな。明日にするか……木下弟、いるか？」

「いらぬのじゃ」

「そうか……なら、返しておくか」

伐は時間的に帰らないといけない時間になったようで頭をかきながら帰ると言々と美波の下着を元にあった場所に戻すと欠伸をしながら混沌とした今の状況など気にする事なく歩いて行き、

「……………黒須はなんのようじゃったのかのう?」

秀吉は伐の背中を顔を引きつらせて見送る。

### 第43問

「お父さん、遅いですね」

「仕方ないわよ。お仕事なんだから」

瑞希は両親がAクラスになったお祝いだと言って家族で夕飯を食べに街に出てきたのだが父親の仕事が遅れているようで母親である『姫路瑞穂』と父親を待っているのだが瑞穂は見た目が幼く、通り過ぎる人達は仲の良い姉妹が人を待っているように見え、

『……おい。あの2人はどうだ?』

『ああ。最近は警戒も強くなってるからな。あの2人をさらった後、次の場所でも探そうぜ』

『そうだな。大部、稼がせても貰ったしな。しばらくは遊んで暮らせるだろ』

そんな中、瑞希と瑞穂の様子を下種な笑みを浮かべて品定めしているような男達の声が聞こえるが2人の耳にはそんな声は届いておらず、

「瑞穂、瑞希、すまない。遅れた」

「お父さん、遅いですよ。それじゃあ、瑞希ちゃんも行きましょうか?」

「はい。お父さん、今日はなんて言うお店なんですか?」



「いや、会社の若い子達におススメのお店を聞いたんだ。料理も凄く美味しくてたまにサービスで店員の男の子がピアノを弾いてくれるらしいんだけど、今日がその日らしくて」

瑞希の父親が急いできたようで少し気くずれた男性が2人に声をかけ、3人で夕飯に行こうとするが、

『おっさん、若い娘を2人も連れて援交かよ?』

『おいおい。こんなおっさんの相手じゃなくて、俺達の相手をしてくれよ』

先ほどの男達が3人を囲んでいる。

「何を言っているんだ? この2人は私の妻と娘!？」

『そう言えば、信じると思ってるのかよ。見苦しいぜ。ロリコン趣味のおっさん』

「お父さん!？」

父親は男達に絡まれる理由はないと言いたげに瑞希と瑞穂を連れて行こうとするが男の1人は父親の腹を殴りつけると瑞希の腕をつかみ、瑞希は驚きの声をあげると、

『変態のおっさんの相手じゃなく、俺達の相手をしてくれよ』

「放してください!! お父さん!？」

『おいおい。もうそんな変態プレイに付き合わなくて良いんだ』

男達は父親を傷めつけながら瑞希と瑞穂をさらって行こうとした時、

「……だりい」

面倒な所に遭遇したと言いたげに眉間にしわを寄せ、口にタバコを銜えた伐が通りかかり気だるそうにため息を吐く。

「く、黒須くん？」

「……姫路、そう言うプレイか？」

「ち、違います！？ た、助けてください。このままじゃ、お父さんが」

瑞希は伐に気づき、目に涙を浮かべて助けを求めるが伐は笑えない冗談を言うが瑞希はそれどころではなく、

「……つたく、めんどくせえな」

『おい。お前、何だよ。関係ねえ奴は消えろよ！？』

伐は面倒な事に巻き込まれているため、舌打ちをすると男の1人が伐を威嚇しようとするが、

「……話しかけんな。息がくせえ」

伐は躊躇する事なく銜えていたタバコを男の額に押し当てると男達は伐の行動に一瞬、何があったかわからないような表情をする。

「……ケンカ売る相手くらい選べよ」

伐は表情を変える事なくすぐそばにいた男達のこめかみを蹴り飛ばし、男達は意識を刈り取られたようで両膝を付いた後に前のめりに倒れ込んで行き、

「おい。姫路、俺は行くぞ……なんだよ？」

「く、黒須くん、お父さんが、お父さんがケガをしてるんです」

「……医者にも勝手に行けよ。俺は忙しいんだ」

伐は瑞希の父親を痛めつけている男達を蹴散らした後、歩きだそうとするが瑞希はケガをしている父親を助けて欲しいと言い、

「で、ですけど」

「……めんどくせえな。おっさん、立てるか？俺はバイトで忙しいんだ」

「す、すまないね」

瑞希は今にも泣き出しそうな目で伐を見るため、伐は乱暴に頭をかくと父親の腕を引っ張り立ちあがらせ、父親は伐に頭を下げるが伐は返事をする事なく父親を引っ張って行き、

「……さっさと歩け。人が集まってくるぞ」

「は、はい。お母さん」

「はい」

伐は瑞希と瑞穂にも早くしろと言つと2人は慌てて伐と父親の後を追いかけて行く。

## 第44問

『伐、遅い……何があつたんですか？』

「バカにからまれたんだよ。店長、救急箱くらいあるよな？」

『ああ。今、持ってくるから待ってる。後、立って待たせるわけにもいかないから座って貰ってる』

「だそうだ。さっさと座れ」

伐は瑞希の父親を引つ張ったまま、バイト先の深夜営業のレストランのドアを開けると瑞希の父親の様子を見た店長は驚きの表情をするが伐は不機嫌そうな表情で言う「店長は伐の態度になれているように嫌な顔をする事なく店の奥に入って行き、

「あ、あの。黒須くん、ここは？」

「バイト先だ。見ればわかるだろ……ったく、めんどくせえな。何で、俺がこんな事をしてやらねえといけねえんだよ……折れてはなさそうだな」

瑞希は店内を見回して伐にこの場所の事を聞くと伐は面倒だと言いつつも瑞希の父親のケガの様子を見ており、

「このお店は」

「お父さん、知っているんですか？」

「ああ。今日、来るはずのお店だったんだが」

瑞希の父親と瑞穂は店の中を見回して夕飯を食べる予定の店だと言  
うが、

「しかし、流石にこの格好じゃ食事とは行かないか」

「そうですね」

瑞希の父親はボロボロになった自分の格好に残念そうにため息を吐  
くと瑞穂は父親の意見に全面的に賛成のようで頷く。

『ご予約の姫路様でしたか？ そんな事は気にしないでください。  
ウチの店はそんなものを気にするほどマナーにはうるさくありませ  
ん。何せ、こんなガラの悪いのが店員をしているんですから』

「……悪かったな。だいたい、レストランって感じかよ。客も経営  
者もなんてマナーなんて知らねえような雑な奴らばかりだろ」

『違う』

店長は救急箱を持ってくると2人の心配など気にする必要はないと  
笑うと伐は眉間にしわを寄せながら救急箱を受け取り、瑞希の父親  
の治療を始めて行き店長は伐の言葉に苦笑いを浮かべると、

『しかし、敗れた服ではここで食事ですが帰りづらいとも思いま  
すからね。替えを用意しましょう』

「『迷惑ではありませんか？』」

『汚い話ですが、リピーターになっていただければ儲けものですから』

店長はくすりと笑うと瑞希の父親の着替えを持ってくると笑うと再び、店の奥に入って行き、

「……これで良いな。一応は見た感じだと頭にダメージはなさそうだけどな。素人の所見だ。きちんと調べて貰え」

「あ、ありがとうございます。黒須くん」

「……礼なんかいるか。口先だけの礼より、何かよこせ。何で、タダ働きをしねえといけねえんだよ」

伐は瑞希の父親の治療を終えたようであち上がり、懐からタバコを取り出して口にくわえて火をつけると瑞希は伐に頭を下げるが伐は礼などいらないと言い、店の奥に入って行こうとする。

「どこに行くんですか？」

「……聞いてなかったのか？　ここは俺のバイト先だ。仕事に決まってるだろ。親のスネをかじってる奴らと違って働かねえとこの腐りきった世界も生きていけねえんだよ」

「そ、そうですね」

瑞希は伐にどこに行くのかと聞くと伐は眉間にしわを寄せながら仕事だと言つと瑞希はその通りだと思ったようであざ笑いを浮かべると、

『伐、遊んでないで働け。時間だ』

「へいへい」

店員から伐を呼ぶ声が聞こえ、伐は気だるそうに返事をする。店の隅に置いてあるピアノの前に移動して行き、

「瑞希ちゃん、彼がピアノを弾ける男の子みたいね」

「そうみたいです」

伐は面倒くさそうに頭をかいた後、ピアノの前に座ると鍵盤の上に指を滑らして行き、店内には伐の演奏が響く。



## 第45問

「黒須くん、おはようございます。昨日はありがとうございました」

「……ああ」

伐が登校してきたのを見て、瑞希は駆け寄り昨日の御礼を言うが伐は眠たいようで大きな欠伸をするとどうでも良さそうに自分の席に座り、

「あ、あの。黒須くん、これ、お父さんが昨日、店長さんに借りた服なんですけどお洗濯をしたんで」

「……ああ。置いておけよ」

瑞希は父親が店長から借りた服を伐に返して欲しいと言うが伐の反応は薄く、

「ねえねえ。姫路さん、黒須くんと何かあったの？ 男ものの服を返してるなんて、ぼく、おかしい想像しちゃうよ」

「……愛子、姫路さんをからかわないの」

瑞希は伐の様子に苦笑いを浮かべていると2人の様子を見かけた愛子が瑞希をからかうように笑い、優子は愛子をいさめるようにため息を吐くと、

「それで姫路さん、昨日は黒須くんと何かあったの？」

「はい。昨日なんですけど」

優子は瑞希に伐と何かあったのかと聞き、瑞希は苦笑いを浮かべながら昨日、両親と一緒にガラの悪い人達にからまれた事とその時に伐が助けてくれた話を話す。

「へえ、意外ね。黒須くんなら関係ないと言って見捨ててると思ったわ」

「それは確かにありそうんだけど……ねえ、姫路さん、その時の黒須くんってどうだった？ カッコよかった？」

「そ、それは確かにカッコは良かったんだとは思いますが、あの一瞬の事で良くわからない間に終わってしまってます」

優子は瑞希の話に伐が人助けをする事など信じられないようで疑いの視線を向けながら伐を見るが優子は瑞希を助けたヒーローとしての伐はどうだったかと聞くと瑞希は苦笑いを浮かべたまま良くわからなかったと答えると、

「あ、助けてくれた時よりはお店でピアノを弾いていた黒須くんの方がカッコよかったと思います」

「ピ、ピアノ？」

「黒須くんが？」

瑞希は昨日、伐がピアノを弾いている姿を思い出したようでその時の姿はカッコよく見えたというと優子と優子は意外すぎる伐の行動に驚きの声を上げ、

「ちょ、ちよつと、黒須くん、何でピアノなんて弾けるの？」

「……うるせえな。別にどうでも良いだろ。騒ぐな。俺は眠いんだ」

愛子は真相を伐に聞こうと伐の身体を揺すると伐は不機嫌そうに答えた時、

「黒須、ちよつとこい」

「西村先生？」

Aクラスの教室のドアを西村教諭が開けて伐を呼ぶが、

「……断る」

「お前に客だ。と言うか、今度は何をしたんだ？ ケンカは控えろと言ったはずだ。あまり、騒ぎがでかくなると停学くらいでは済まされんぞ」

伐は欠伸をしながら目をつぶると西村教諭は伐の胸倉をつかむ。

「に、西村先生、何があつたんですか？」

「黒須に客がきているんだ」

「どうせ、無能な権力の犬だろ。昨日の件なら店で全部説明したんだ。何度も何度も付き合つてなれるか。だいたい、強姦魔ども犯罪者を潰してなんで文句を言われねえといけねえんだよ。今まで捕まえる事が出来なかった犯罪者が捕まったんだ。別にそれで良いだろ」

瑞希は西村教諭の言葉に昨日、自分達がからまれた件だと思ったように詳しい話を聞かせて欲しいと言うが西村教諭は言葉を濁そうとするが伐は気にする事なく事実のみを見ろと言うと、

「く、黒須、言葉を選ばんか！！」

「知るかよ。だいたい、汚いものにふたをしてるから世の中が腐ってるんだろ。見ないふりをすればそれがどんなに汚くて腐ったものでも見えなくなる。自分達に都合が悪いものを無視していた結果だ。その尻拭いに何で俺が動かねえといけなんだよ。この話は終わりだ。だいたい、仲間の数が足りねえって言うなら、そこからは自分達で調べるよ。報奨金だつてたいしたでねえのに昨日のケン力を見逃してやる代わりに協力しろ？ 自分達の無能を棚に上げておいて調子良すぎだろ」

「そこまで言われるといつそ清々しいね」

伐の言葉に西村教諭は場所を考えろと言うが伐は気にする事なく話を続けていると苦笑いを浮かべながら1人の男性が教室に入ってくる。

## 第46問（前書き）

オリキャラデータを追加します。

## 第46問

「近江、場所を考へろ。簡単に入ってくるな」

「西村先生、見逃してください。こつちも仕事なもので、それに捜査協力をして貰わないといけないのはノラ猫くんだけではありませんせんしね」

「……やっぱり、あんたかよ」

「おはよう。ノラ猫くん、夜行性の猫くんは朝はずいぶんと機嫌が悪そうだね」

西村教諭は男性の行動に肩を落とすが男性はくすりと笑い、伐は教室に入ってきた男性を見て舌打ちをすると男性は柔和な笑みを浮かべて伐に挨拶をし、

「ノラ猫くん、私も忙しいんです。どうやら、残りの人間はこの街から逃げ出す算段を立てているようなので早く、捕まえて豚箱の中に突っ込んで反省させないといけませんからね」

伐に協力して欲しいと頭を下げるがその様子には何か圧力があり、伐と西村教諭以外の教室にいる生徒達は息を飲むが、

「気にするなよ。犯罪者が死のうが俺には関係ねえしな」

「死ぬ？」

「当たり前だろ。ずいぶんと場を荒らされて躍起になつてゐる奴らも

いるんだ。それがわかってるから、昨日を最後にしようとしてたんだろ。もしくは予想外の上玉を見つけたから欲を出したか」

「……確かにね。ずいぶんとかわいいお嬢さんだ。ノラ猫くんが欲情するのもわかる気がするよ」

「な、何かありましたか？」

伐は本当に興味がないように気だるそうに言っていると男性は瑞希の顔を覗きこんで笑みを浮かべると、

「は？ くだらねえ事を言ってるんじゃないよ。ロリコン刑事」

「ロリコンですか！？」

伐は男性の性癖を暴露しながらくだらない事を言つたと言い、瑞希は伐の言葉に慌てて男性から距離をとり、伐の後ろに隠れる。

「やれやれ。そう言う嘘を流さないでくれるかい？ 私はかわいい子なら、女の子でも男の子でもかまわないんだけど、おかしい事を言つと名誉棄損や公務執行妨害で引つ張るよ。それにノラ猫くんにはそれぐらいしても問題なさそうだしね」

「……近江、お前はこんなところで何を言っている？」

「はいはい。冗談ですよ。西村先生」

男性は瑞希の行動にくすくすと笑いながら言つと西村教諭は眉間にしわを寄せると男性は笑顔で冗談だと言い切り、

「はじめまして、姫路瑞希さんですね。私は『近江真』と言って、  
ての通り刑事をさせていただいてます。昨日、あなたの家族にちよ  
つかいをかけてきた男達の事で聞きたい事があるんですが」

「は、はい」

瑞希に『近江真』と自分の名前と警察だと言う事を告げると捜査協  
力を願い出て瑞希は状況について行けないように慌てて返事をする  
と、

「黒須くん、あの人、本当に警察の人なのかい？」

「ああ、残念ながら。あんなのがのさばってるんだ。世の中、腐  
ってる」

「ノラ猫くん、君やあいつみたいな人間にだけは言われたくない言  
葉だよ」

利光が伐の身体を突いて真が刑事かと確認すると伐は面倒そうに答  
えるが真はその話をしっかりと聞いているように伐に向かい言い、

「うん。昨日、現場を見ていた人達からと同じような状況だね。あ  
りがとう。助かったよ」

「は、はい。あの、それで黒須くんは私達を助けてくれたんです。  
ですから」

「心配しなくても良いよ。あれは私とノラ猫くんの間の挨拶のよう  
なものだから」



真は瑞希から昨日の状況を確認すると瑞希は伐は悪くないと言い、真は瑞希の反応に伐に視線を向けながらくすくすと笑う。

「西村先生にみなさん朝からお騒がせしてすみませんでした」

真は1度、教室の生徒全員に頭を下げると、

「……伐、清涼祭は注意しろ。あいつがこの街に帰ってきたという噂が上がり始めている」

「……言われなくても知ってる」

「……おかしい事はするなよ。流石に人殺しは庇い切れないからな」

伐とすれ違う時に伐の耳元で情報提供のお礼なのか伐に何かを知らせると伐は眉間にしわを寄せたまま頷き、真はその言葉に反応する事なく教室を出て行く。

## 第47問

「あ、あの、黒須くん、今、刑事さんの言った事って」

「……お前には関係ない。余計な事に首を突っ込むな」

瑞希は伐と真の会話が聞こえたようで顔を青くしながら声を震わせて聞くが伐は瑞希には関係ないと斬り捨てると不機嫌そうに席に座りなおして寝ようとするが、

「黒須、俺の話は終わってないぞ。昨日の件を詳しく聞かせて貰おうか？」

「……知るかよ。何度も同じ事を言わせんじゃねえよ。俺は結果的に街のゴミクズを処理しただけだ。文句を言われる筋合いはねえよ」

「待たんか!!」

西村教諭は伐に真が来た件を詳しく教えろと言い、伐は面倒だと言うと西村教諭の相手などしてられないと思ったようで教室を出て行き、西村教諭は伐を追いかけて教室を出て行くと、

「え、えーと、この微妙な空気はどうしたら良いのかな？ クロスくんは出て行っちゃたし」

「……知らないわよ。どうして、黒須くんみたいな人がAクラスにいるのよ」

愛子は伐と西村教諭の様子に苦笑いを浮かべると優子は眉間にしわ

を寄せながら言う。

「……瑞希、どうかした？」

「い、いえ、今、黒須くんが西村先生に追いかけてるのって私のせいなんですよ。私が昨日、巻き込まれてしまって、お父さんが暴力を振るわれて怖くなってしまっただうして良いかわからなくて、たまたま、通りかかった黒須くんに助けを求めたから」

翔子は瑞希の表情が曇っている事に気づき、瑞希に声をかけると瑞希はうつむいてしまうと、

「……瑞希、黒須が瑞希を責めてないんだから、そんな顔をしたらダメ」

「そうだよ。それにさっきの黒須くんと刑事さん話を聞いていたら黒須くんが助けに入らなければ大変な事になっていたんだよ。だから、自分を責めちゃダメだよ」

「で、ですけど……」

翔子は優しい笑みを浮かべて瑞希に笑うように言い、愛子は翔子の言葉に頷いて瑞希は悪くないと言うが瑞希は自分のせいだと言う考えで固まってしまっているようで、

「わ、私、黒須くんに謝ってきます。それと西村先生にも昨日の詳しい話をします。そうすれば黒須くんは処罰を受けないはずですよ」

「ちょ、ちょっと、姫路さん、どこに行く気!？」

真剣な表情をすると伐に謝ってくると言って教室を出て行き優子は驚きの声をあげるが、

「優子、姫路さんも頑固なところがあるから、無理に止めても無駄じゃないかな」

「そうだね。負けが決まっても黒須くんに謝らせるように向かって行く人だし」

優子と利光は瑞希の性格がわかってきたようで苦笑いを浮かべる。

「そうかも知れないけど、さすがに黒須くんは」

「……優子、黒須は優しい」

優子は周りの反応に納得はするが相手に問題があると言いたげにため息を吐くと翔子は伐の味方をしようとし、

「うん。ぼくも代表の言う通りだと思っよ」

「……かなりきついけどね。間違った事は言っていない事が多いね」

優子と利光は翔子の言葉に頷くが流石に今回の騒ぎでは伐をどうして良いかわからないようで教室の空気は重苦しくなってしまうが、

「それじゃあ、清涼祭の準備をしましょうか。ここで何もしないでいるわけにはいかないからね」

優子は伐の行動には納得はいかないようだがこの空気をどうにかし

ないといけないと思ったように清涼祭の準備を始めようと言い、クラスメート達も何かしないと落ち着かないのか優子の言葉に頷く。

## 第48問

「い、いました」

瑞希は屋上のドアを開けると伐は屋上で横になっており、

「み、見つけました」

「……」

瑞希は伐を探して学園内を走り回ったようで息を切らしながら言うが伐は目を開ける事はなく、

「あ、あの、黒須くん、昨日は本当にすいませんでした。さっき、西村先生にも黒須くんは悪い事はしていないって事を話してきました。それで、西村先生からこの件で黒須くんへの処罰はないって約束して貰いましたから安心してください……黒須くん、寝てるんですか？」

瑞希は西村教諭に昨日の事を説明してきたと言うが伐の反応がないため、瑞希は伐の顔を覗き込むと伐は小さな寝息を立てており、

「……眠いつて言っていましたね」

瑞希はいつもは悪態しか吐いていない伐の寝顔を見て優しげな笑みを浮かべた時、

「く、黒須くん、お前、姫路さんに何をした!!!!!!!!!!」

「よ、吉井くん？」

なぜか怒りで顔を真っ赤に染めた明久が勢いよく屋上のドアを開けて伐に向かっ駆け寄ってきて、瑞希は明久の様子に首を傾げると、

「……うるせえな。何の用だよ？」

伐は欠伸をして立ち上がると1人で熱くなっている明久の突撃を交わすと明久の腕を取り、彼の顔面をフェンスに押し当て、

「ちょ、ちよつと、黒須くん！？ こ、これは洒落にならないよ！  
？ 待って、僕が悪かった！！ まず、話し合おう。暴力だけじゃ、何も解決しないよ！！」

「……知るか。人がせつかくいい気分で寝てたのに邪魔しやがって、  
だいたい。どんなにきれいな事を言ったって最終的には暴力ちからでしか物事は解決しないんだ。まだ、理解してねえのかよ」

「く、黒須くん、ダメです！？ 危ないです！？」

明久は自分の身の危険に慌てて命乞いを始め出すが伐は眠っているのを邪魔されたのがかなり頭にきているようでさらに力を込めて行くとフェンスが軋む音が鳴りだし、瑞希は伐に落ち着いて欲しいと声をあげる。

「お、やってるな。黒須、面白そうだから、もっと力を込めろ」

「雄二、何を言っておるのじゃ！？」

「そ、そうだ。バカ雄二！！ ここは僕を助けるところだろ！！」

「何を言ってるんだ。明久、俺はお前が苦しむ姿を見るのが心底好きなんだ!!」

「黒須くん、放して、僕はあの人間の屑を地獄に叩き落とさないといけないんだ!!」

明久に遅れてFクラスのメンバーが屋上に上がってくると明久と雄二は口論を始め出し、

「……バカらしい。おい、島田と木下弟、このバカは何で俺に向かってきたんだ？ 簡潔に説明しろ」

「それがあんたが瑞希を助けたって噂を聞いて、その話がFクラスでも話題になったんだけど」

「……ああ。話の途中で俺が襲った事になったわけだな。バカの考える事は理解できない」

「流石に今回はワシも何も言えんのじゃ」

「えーと、吉井くん」

伐は明久と雄二の相手をするのがバカらしいようで明久を雄二に向かって解放すると秀吉と美波に明久の行動の意味を聞き、美波の言葉に明久の脳みその構造が理解できないと言いたげにため息を吐くと流石に秀吉も呆れているようで肩を落とし、瑞希は明久の行動に苦笑いを浮かべる。



## 第49問

「まあ、ついでだしな。昨日の件もあるし」

「あ、あの。黒須くん？」

伐は気だるそうに言い合いをしている明久と雄二に視線を向けると瑞希は伐の様子に何かを感じたようで伐の名前を呼ぶが、

「いだ！？ な、何？ いきなり何をするの！？」

「……とりあえず、2本で良いか？」

伐は瑞希の声に止まる事なく明久の足を払って転ばせると明久は伐の突然の行動に驚きの声をあげて伐を見上げるが伐は表情を変える事なく言うと、

「何！？ 何をする気？ ダ、ダメだよ！？ 手も足も2本を折れたら終わりだよ！？」

「……安心しろ。肋骨だ」

「なるほど、それなら生活に影響もないな」

「そんなわけあるか！？ バカ雄二！？」

明久は伐の言葉に背中に冷たい物が伝ったようで声を上げると伐は腕も足も折らないと言い、雄二はそれなら安心だと頷くがそんな訳はなく明久は声を雄二を怒鳴りつける。

「……安心しろ。坂本も同じ本数折ってやる」  
だんな

「つて、おい!？」

「く、黒須くん、ダメです!？ 暴力はダメです!？ 西村先生に見つかったら、停学になってしまいます」

伐は明久と同じように雄二の肋骨も折ると言うと言つと雄二は驚きの声を上げると瑞希は昨日の件もあるため、伐に抱きついて伐に暴力を止めるように言つと、

「……仕方ねえな。ほかだいひょうだんな吉井と坂本が俺の言う事を聞くなら指をすり潰すだけで勘弁してやる」

「おい!？ 明らかに許したレベルじゃないだろ!？」

「決まってるだろ。昨日、お前達バカ2人のせいで無駄に使った時間の清算だ」

伐はため息を吐きながら、肋骨は折らないでやると言うが代替案もおかしく雄二は声を上げるが伐は雄二の胸倉をつかんで屋上に転がすと昨日、無駄にした時間の分だと言い、

「それは昨日でおわったのではないのか!？」

「あ？ あれは何となくだ。バカ2人の行動が目障りだったからな」

秀吉は昨日の伐の行動に声を上げるが伐は昨日の明久と雄二への制裁は何となくだと言いい切り、

「そ、そんな理由で!？」

「く、黒須、てめえ、ふざけてるのか!!」

「あ？ 俺の下僕をどうしようと俺の勝手……代表様に謝らないといけねえな。めんどくせえ」

明久と雄二は伐の昨日の攻撃に声を上げるが伐は2人に文句を言われる筋合いはないと言いかけるが雄二の顔を見た後、頭をかきながら雄二を痛めつける権利はなかったと言う。

「黒須、てめえ、どう言う意味だ!!」

「そのままだ」

雄二は伐の言葉に雄二を見上げて伐を怒鳴りつけると伐は表情を変え、事なく言い切り、

「せっかく、バカ2人がそろったしな。ちょうど良いか」

「ちょうど良い？ って、今度は僕達に何をさせるつもり!？」

「ほう。バカにしては察しが良いじゃねえか」

伐は明久と雄二を見て昨日の用件を話そうとすると明久は嫌な予感がするようで顔を引きつらせるが伐は気にする事はなく、

「ばかだいひょうだんな吉井と坂本、お前らは召喚大会に出場しろ」

「この状況で『はい。そうですか』と参加すると思ってるのか!!」

明久と雄二に召喚大会に出場しろと言うが雄二は伐に向かい誰が言う事を聞くかと言いたげに声を張り上げる。

## 第50問

「そうか。それなら、俺は『如月グランドパークのプレオープン  
プレミアムチケット』で1つ面白い情報をつかんでいるんだが、ウ  
チの代表様の持つて行くか」

「おい。それはどう言う意味だ？」

「雄二、何を慌ててるの？」

伐は口元の緩ませてカラルにねじ込ませた如月グループからの召喚  
大会の賞品でもあるプレミアムチケットの話をすると雄二の顔から  
血の気が引いて行き、雄二の様子に明久は首を傾げるが、

「あ？ お前は俺の提案を蹴った。もう関係ねえだろ。大変だな。  
あのチケットにはいろいろな思惑があるらしいのに何も知らずにチ  
ケットがあれば代表様と一緒に行くんだよな？」

「ちよつと待て！？ 思惑ってのはな！？」

「死ね！！」

「て、てめえ、明久！？ いきなり、何をしゃがる！？」

伐は雄二と翔子の間にかあつたであろう会話もすでにつかんでい  
るようで口元を緩めると雄二は伐の言葉に何かを感じて聞き返し  
た時、明久からの嫉妬のこもった1撃が雄二に飛び、雄二は明久を  
怒鳴りつけると、

「決まってるだろ。どうして、霧島さんみたいな綺麗な人が雄二みたいなゴリラを！！　今、僕は嫉妬で人を殺せる！！」

「バカだいひょう吉井、それは人間じゃないゴリラだから犯罪にならないし、好きにしる」

「そうだったね。雄二はゴリラだから、殺しても犯罪に！？」

明久は雄二を殺すと叫ぶと伐は気だるそうに欠伸をしながら雄二はゴリラだから人殺しにはならないと言い、明久はその一言に全身全霊を込めて雄二を殴り飛ばそうとした時、雄二の拳がキレイに明久の顔面に吸い込まれて行き、明久は勢いよく吹っ飛んで行く。

「……器物破損とかにはなるな」

「……お主は何がしたいのじゃ？」

伐は明久と雄二の様子を見て、もう1度、欠伸をすると秀吉は伐の様子にため息を吐き、

「それで、黒須！！　その思惑つてのは何だ！！」

「あ？　それが物を頼む態度か？」

雄二は明久をぶっ飛ばした後、伐に改めてチケットの事を聞くが伐は屋上の床を指さしながら土下座でもしろと言いたげに雄二の態度は物を頼む態度ではないと言つと、

「ぐ」

「あ、あの。黒須くん、流石にそれはちょっとやり過ぎじゃないかな？ と」

雄二は高圧的な態度で出ても伐から情報を引き出せない事をすでに理解しているが土下座などではないと思ったように表情を引きつらせると2人の様子に瑞希は苦笑いを浮かべて伐を止め、

「……仕方ねえな。プレオープンチケットなんだが、召喚大会の準優勝者は普通何だが優勝に送られるチケットは少し特殊だな」

「優勝者のチケットが特殊？」

「ああ、如月グループがウェディング体験と言うものを予定していたな。優勝者のチケットはそれに該当する」

伐は気だるそうに優勝者のチケットにはウェディング体験と言うものが付加されていると説明する。

「な、何だと!？」

「雄二、何を慌てておるのじゃ？ あくまで体験であろっ」

「秀吉、いい加減な事を言うな。翔子とそんなもんに行ったら本番にされちまう!！」

雄二は翔子の性格から翔子が優勝してしまうと自分にとって最悪の状況になると判断したようで顔を青くして叫ぶと、

「安心しろ。如月グループも協力して本番にしてくれるから」

「く、黒須さん、それは一体、どう言う事でしょうか？」

伐は気だるそうに翔子の意志だけではなく如月グループも協力する  
と言うと雄二は顔を引きつらせて伐に聞き返し、

「あ？ ウエディング体験を行った高校生カップルがその後、如月  
グループ系列で結婚、幸せな結婚生活を送りました。めでたし、め  
でたしってところだろ」

「めでたくねえ！？」

伐は如月グループの思惑の本質を簡単に話すと雄二は全てを理解し  
たように声を上げる。



## 第51問

「く、黒須、召喚大会に出場でも何でもするから、詳しい話を聞かせろ。いや。聞かせてください」

「……土下座までする必要があるのかのう？」

雄二は今の自分の状況を理解すると伐に向かい土下座をして伐の持ってきた話の詳細を教えて欲しいと言い、秀吉は雄二の様子にため息を吐くが、

「当然だ。翔子に優勝されちまったら、俺の人生は終わる。それだけは阻止しないといけないんだ」

「どうせ、代表様には頭が上がらないんだ。たいした変わらないだろ」

「勝手に籍を入れさせるな!？」

雄二の顔は血の気が引いてきており、真っ青な顔色をして翔子が召喚大会に出場されて優勝されるのだけは不味いと言つと、

「坂本、どうして、素直にならないの？ この間、映画館でデートしてたのを見たけどお似合いじゃないの」

「本当です」

「おい!？ どうして、腕に拘束具を付けられて引きずりまわされているのを見てそんな事が言えるんだ!？」

瑞希と美波は雄二と翔子のデートの様子を見てお似合いだと言うが雄二はその時の事を思い出して2人を怒鳴りつける。

「……そう言うプレイなんだろ」

「ちげえよ!? 俺には縛られて喜ぶ。趣味はねえ!!」

「そうか。むしろ、縛りたいか?」

伐はどうでも良いようで気だるそうに欠伸をしながら言うと雄二は声を上げるが、伐はどうでも良さそうに返し、

「……坂本、あんた、最低ね」

「坂本くん、そう言うのはいけないと思います」

「お前ら、バカなのか!? どうして、そんな答えに行きつくんだ!?!」

瑞希と美波は雄二を少し軽蔑するように言うと雄二は人の話を聞かない瑞希と美波の様子に頭を押さえて叫ぶが、

「本題に移るぞ。すぐに黙らないなら、この話は代表様めいに持って行く」

「……お願いします」

伐は面倒になってきたようで雄二に黙れと言うと雄二は再度、土下座をして伐に話を聞かせて欲しいと言い、

「この間、お前達にデータを取らせた腕輪を覚えているな？」

「ああ。それがどうかしたのか？」

「あれも召喚大会の優勝者に与えられる賞品なんだが、優勝者は召喚大会終了後にデモンストレーションをする事になっているんだが、白金の腕輪を快く思っていない人間がいてな」

「待つんじゃない。そんな事をして何の得があるのじゃ？」

伐は雄二に『白金の腕輪』を快く思っていない人間がいる事を話すと秀吉は意味がわからないと声を上げるが、

「……デモンストレーションが失敗させて学園長に責任をなすりつけて、学園長を失脚させて文月学園ウチに取られた生徒を取り戻そうって事か？」

「そう言う事だ。それを防ぐためにお前とあのバカに動いて貰う」

雄二は伐の言葉でだいたいの事を察したようで眉間にしわを寄せると伐は頷き、

「待てよ。何となく状況は理解したがどうして、俺と明久だ？ 優勝を狙える人間。お前とAクラスの奴とかで……おい。腕輪の不具合が直ってないのか？」

「いや、腕輪は問題ないが、せつかくだ。不具合があるって言う噂を文月学園ウチを潰したいと思っている奴らにだけは聞こえるようにしておこうと思っただけ」

雄二は自分と明久では優勝は難しいと言つと白金の腕輪の修理が終  
わつてないと思つたようだが伐は雄二の言葉を否定すると他に考え  
があるようて口元を小さく緩ませる。

## 第52問

「どう言う事？」

「……俺達に囷になれって言うのか？」

伐の言葉に美波は意味がわからないように首を傾げるが雄二は伐の思惑を理解したようで目つきを鋭くすると、

「ああ。仕掛けてきてもお前らのクラスなら守るのは島田ぜっぺきくら……と木下いもうちの2人だしな。対処しやすい」

「黒須、今、ワシを女子扱いしたであろう!!」

伐は何かあった時にFクラスは守りやすいと言うと守るべき立場に置かれた秀吉は声を上げるが、

「……しかし、俺達にそんな事を仕掛けてくるか？ 俺と明久の成績を考えるとそこまでしてこないだろ？」

「普通はな。お前らみたいな最下層のバカが勝てるとは思わない。だけど、噂で腕輪は点数が低いと暴走しないとしてある。そうなりと自分を過大評価しているバカは念には念を入れてとか考えて勝手に墓穴を掘ってくれる。プライドがどれだけ高くても策に自信も裏付けもないから不安になるんだ。あまりの小者っぷりに笑えるだろ？」

「……お前、既に犯人に心当たりもあるのかよ」

雄二は伐が考えている事は無意味だと言うが伐は気だるそうに言い、雄二は伐の言葉にため息を吐く。

「ああ。だからこそ、仕掛けてくる方法も予測できる。お前らが勝ちを得ていると優勝するんじゃないか？ と疑い始める。自分を過大評価するバカは自分の策が崩れるとお前のように気づいても認めないで目をそらすか、力づくで修正しようとするバカの2種類、今回ののは後者だ」

「……仕掛けてくる方法は？」

伐は仕掛けてくる人間の反応のわかっていると言うと雄二は対策を考えたように目つきを鋭くするが、

「……今はその時じゃねえよ。少なくともお前らの長所は何かを考えて動くって事じゃねえからな。策士を気取ってるより、感情のままだに動いた方が良い場合もあるんじゃないか？ その方がお姫さまは喜ぶぞ」

「は？ どう言う事だ？」

伐は今はまだ早いと言うと屋上の隅で意識を失っている明久に目線を送ってから、小さくため息を吐き、雄二は伐の言いたい事がわからないように首を傾げると、

「……自分から目を逸らしているバカは哀れだな。まあ、バカはバカなりに動いた方がいい結果が出るって事だ」

「……黒須、それってウチらの事をバカにしてるって事よね？」

「何度も言わせるな。バカをバカにして何が悪い。少なくとも自分達の長所も短所も理解していないバカに文句を言われる筋合いはねえよ」

伐はFクラスをバカにすると美波は伐を睨みつけるが伐は美波の言葉を鼻で笑う。

「バカはバカで動け、余計な事は今回は俺がやる。姫路、お前は俺の手伝いをしろ」

「は、はい!？」

伐は瑞希に自分の手伝いをするように言うが瑞希は意味がわからないように声を裏返すと、

「……察しが悪いな。俺とお前でそのバカ2人をフォロ<sup>だんな</sup>ーするのに召喚大会に出ると言うてるんだ。Fクラスには坂本と吉井以外で使えるバカはいないから、俺が出るんだ」

「は、はい。わかりました。頑張つて優勝しましょう」

「……おい。話を聞いていたか。優勝はそのバカ2人がするんだ」

伐は眉間にしわを寄せて瑞希に明久と雄二のフォローをするために召喚大会に出ると言うが瑞希は慌てて優勝すると言い、伐の眉間のしわは瑞希の返事にさらに深くなって行く。

## 第53問

「ちょっと待ちなさいよ!? 何、勝手に瑞希をパートナーにするのよ?」

「……状況を把握できねえバカが口を出すな」

美波は伐が瑞希を自分のパートナーにして召喚大会に出ると言った事に何か悪意のようなものを勝手に感じ取り、瑞希は自分が守ると言いたげに伐に敵意を向けると伐は気だるそうにため息を吐き、

「な、何よ。その態度、瑞希、こんな奴と召喚大会に出ちゃダメよ!!! 絶対に危ない事に巻き込まれるから」

「で、ですけど、く、黒須くんは昨日、お父さんを助けてくれましたし」

「それこそ、怪しいわよ。瑞希を召喚大会に巻き込むための自作自演って事だって」

美波は伐の態度の声を大きくして瑞希に召喚大会に出ないように言うが瑞希は昨日、伐に助けて貰ったため、むげにはできないと首を振ると美波は意地にもなっているのか、伐が瑞希を助けた事が怪しいと言い始め、

「……島田、それは流石に乱暴ではないかのう」

「……バカもここまでくると笑えねえな。吉井に並ぶぞ」  
ばかだいひょう



秀吉は美波の様子に大きく肩を落とすと伐は美波の頭の悪さを明久と同程度だと言い切り、

「な、何で、アキと同列扱いされないといけないのよ!! だいたい、あんたに問題があるんでしょ。そんな人間に瑞希を預けたら、何をするかわからないでしょ!!」

「……落ち着け。島田。俺は黒須が姫路を選んだのは間違いないと思う。黒須の策なら敵は少なからず、俺と明久に嫌がらせみたいなものを仕掛けてくる可能性がある。島田と秀吉は同じクラスだから警戒していれば良いが、姫路はAクラスだ。腕っ節や緊急時に対応する能力等、黒須を護衛にするのは間違ってる」

美波は明久と同列扱いされた事に声を荒げるが伐はすでに美波の相手をする気はないため、美波が1人で騒ぎたてているだけであり、雄二は頭を乱暴にかくと伐が警戒している事を理解しているようで美波を止めに入る。

「雄二、それはどう言う事なのじゃ?」

「黒須の流している噂では低得点取得者に優勝されるのは都合が悪いんだよ。そうなると俺達への嫌がらせをしてくる可能性は高いだろ。そう考えるとこの間までFクラスにいた姫路は狙われる可能性はある。同じクラスの黒須がそばにいるのは正しい」

秀吉は雄二の言葉に眉間にしわを寄せて聞くと雄二は自分達を動揺させるために瑞希にまで被害が出る可能性があると言い、

「……心配するな。ちゃんと霧島きりしまの安全も見といてやるよ」

「だ、誰が翔子の心配をしていると言った!？」

伐は雄二の言葉の中に自分と関わりの深く、伐や瑞希と同じクラスの翔子の事を心配している事も読み取っており、気だるそうに言う  
と雄二は翔子の事など心配していないと声を張り上げるが、

「……姫路、戻るぞ。そろそろ、木下姉がいつまで遊んでるんだと言ってここに駆け込んでくるからな」

「は、はい。そうですね」

伐は雄二の事など気にする事なく瑞希に教室に戻るぞと言い、瑞希は慌てて伐の後ろを追いかけて行き、

「ちょ、ちよつと、坂本、本当に良いの？」

「ああ。少なくとも、黒須が動いているって事は協力をしている分には不利益になる事はないと思うし、確かに白金の腕輪は試召戦争をする上で必要なんだよ。まったく、痛いところばかり付いてきやがる。嫌になるぜ」

美波は雄二の言葉を聞いても納得がいかないようであり、雄二に聞き返すと雄二は口では嫌になると言いながらも何か考える事があるのか小さく口元を緩ませており、

「……雄二、お主は何を考えておるのじゃ」

「何でもねえよ」

秀吉は雄二の様子に雄二がおかしな事を考えていると思ったようで

声をかけると雄二は直ぐに首を振り、

「俺達も教室に戻ろうぜ。いつまでもここにいると鉄人が怒鳴りこんできそうだ」

「そうね……アキはどうする？」

「ほつといて良いだろ」

明久を置いてFクラスの教室に戻って行く。

その後、明久が気絶している屋上に青筋を立てた優子が怒鳴りこんでくるが優子の声が屋上に響くだけだった。

## 第54問

「……おい。黒須、お前は何がしたいんだ？」

「あ？ 仕方ねえだろ。もう直ぐ開店時間なんだからな」

清涼祭1日目の開演時間前に伐はFクラスの出し物である中華喫茶『ヨーロッパ』に足を運ぶと伐のメイド服姿に雄二はため息を吐くと、

「……………」

「ちょ、ちよつと、何で、雄二があんな美少女と仲よさげに話をしてるんだよ？ 霧島さんがいるのに、殺しても良いよね？ 問題なんてないよね」

その隣で康太はものすごい勢いでシャッターを切り、明久は完全に伐を女の子だと思っっているようで拳を握り締めて雄二への呪いの言葉を吐いていると明久の言葉は教室中に感染して行き、

「みんな、立ち上がれ！！ あのゴリラを血祭りに！！？」

「…………うるせえよ。俺が話してるのを邪魔すんじゃないよ」

明久は雄二を虐殺しようとするが伐は気だるそうに明久の鼻っ柱に蹴りを入れると明久は勢いよく吹っ飛び、

「…………黒須、あんたは何をしてるのよ？」

「あ？ 他人の話を聞かねえバカが悪いんだろ。まあ、肋骨を折るのは終わってからにするか。今、動けなくなるのは都合が悪いからな」

美波は伐の行動に顔を引きつらせるが伐はこの程度ではお仕置きは終わらないと言い切りながらも吹っ飛んだ明久の近くに移動すると2度ほど、明久の腹を蹴りあげ、

「な、何をするんだよ！？」

「あ？ 気付けた？ 足りないなら鼻骨くらい、折ってやるよ」

「す、すいませんでした」

「頭の位置がたけえよ」

明久は見た目が完全な女の子の伐に顔面を蹴られるとは思っていなかったようで驚きの声を上げるが伐は淡々とした口調で言う「明久は伐の様子に土下座をして許しを請うが伐は当然、明久の頭を踏みつける。」

「や、止めてよ！？ あ、あれ？ な、何だろう？ 凄く、胸がどきどきして来た？」

「……黒須、そろそろ、止める。明久がおかしなものに目覚めそうだ」

明久は伐に踏みつけられる事に何か新しい悦びを覚えそうであり、雄二は顔を引きつらせながら伐を止めると、

「ほら、今日のトーナメント表だ。決勝まであがってこないとこの間の続きでお前ら2人の四肢の骨を砕くか、肋骨を折って肺に突き刺してやるからな」

「待て！？ 明らかにダメージが増えてるだろ！！ だいたい、やつて良いのは明久にだ」

「ちょっと待て！！ バカ雄二！！」

伐は持ってきた召喚大会のトーナメント表を渡すと明久と雄二に必ず決勝まで上がって来るように脅し、明久と雄二は驚きの声を上げ睨みあいを始め出すなか、

「……ねえ。黒須、本当に瑞希を守ってくれるんでしょうね？」

「ああ？ 必要な事だからな。必要な手には手は抜かねえよ・お前らバカと違って俺は状況が見えるんでね」

美波は自分達がおかしな事に巻き込まれているため、1人、他のクラスにいる瑞希の事を心配すると伐は気だるそうに答える。

「……島田<sup>せうで</sup>、他人の事を心配する前に自分の心配をしな。お前の攻撃力はそれなりだけどな。状況を理解出来ねえと大切なものを失うかも知れねえぞ」

「な、何よ？ 何か、わかってるなら、教えなさいよ」

『そこまで責任持てるか。少しは足りねえ頭を使って考えろよ。日本語が読めさえすればBクラスくらい行けるとか言ってるんだろ？』

「ちょ、ちよつと、黒須、あんた、何で、ドイツ語を話せるのよ！？」

伐は美波に忠告だと言うとFクラスの教室を出て行こうすると美波は伐の肩をつかむと伐はドイツ語で美波に向かい頭を使えと言い、美波はいきなり耳に響いた聞きなれた言葉に驚きの声を上げると、

「……前にドイツ人の客が付いてたんだ」

「客？ 客ってあんたは何をしてるのよ！？」

伐は気だるそうに『お客』から教わったと言うと美波は何以下を想像したようで顔を真っ赤にするが伐は気にする事なく教室を出て行く。

## 第55問

「……さてと、どうなるかね？ 問題はあいつが現れるかだな」

「あ、あの。黒須くん、何か心配事ですか？」

伐はAクラスの教室に戻る途中でぽつりと漏らすと瑞希は伐を探していたのか息を切らしており、伐を見かけるなり駆け寄ってくる。

「……別に何もねえよ。それで、何かようか？」

「あ、あの。さっき教室に音楽室からピアノが運ばれてきたんですけど」

「ああ。木下姉ふじこが聞いてないって言って青筋立ててるわけだな」

「は、はい」

伐は瑞希に何も無いと言うと瑞希が自分を探しに来た理由を聞き、瑞希は申し訳なさそうに話し始めると伐は翔子と勝手に打ち合わせをしていたが優子にピアノを運びこむ事は言っていなかった事を思い出し、頭をかくと瑞希は伐の様子に苦笑いを浮かべ、

「まあ、弾けば黙るだろ」

「そつでしようか？」

伐はどうでも良さそうに言うと瑞希は流石に伐が勝手にやりすぎている気もするため首を傾げると、



「代表様や学園長と言う名の最高権力者もとい妖怪ばあには許可はとつてある。あいつに文句を言われる筋合いはねえよ」

「で、ですけど、黒須くんは1人で何でも決め過ぎです。きちんとお話をすれば皆さんわかつてくれるはずですよ」

「……別にわかつて貰う必要なんてねえよ。だいたい、世間も知らねえバカに説明したつて無駄だよ」

「ま、待つてください!？」

伐は文句は一切聞く気はないと言うが瑞希は伐に何度も助けられているせいか伐を良い人だと理想を押し付けているところも見えてきており、伐は舌打ちをすると1人で教室に向かって歩き出し、瑞希は慌てて伐の後を追いかけて行く。

「黒須くん!! これはいったいどう言う事よ!!」

「……うるせえな。きゃんきゃん騒ぐな。聞こえてる」

「待ちなさい!! 聞こえてるなら、説明をしなさいよ!!」

伐は不機嫌そうな表情で教室のドアを開けると伐の姿を見た瞬間に優子は伐を怒鳴りつけ、伐は優子の相手をするのが面倒なため、優子の横をすり抜けて行くが優子が納得するわけもなく伐の腕をつかもうとするが、

「避けるな!!」

「……うるせえな。代表様に許可はとつてあるんだ。お前に文句を言われる筋合いはねえよ」

「……黒須が手伝うと決まった時に許可をした」

伐が優子に捕まるわけはなく、優子の腕を伐は交わすと気だるそうに翔子から許可はとつてあると言い、翔子は伐にピアノを置く事を許可したと言う。

「だ、代表！？ それなら、どうして、ピアノが運ばれて来た時に何も言ってくれないんですか？」

「……驚いた？」

「……代表もお茶目な所があるんだね？」

「そ、そうですね」

優子は伐と翔子の間で交わされた約束を聞いていなかったため、翔子に詰め寄ると翔子はくすりと笑い、愛子と美穂は翔子の様子に苦笑いを浮かべると、

「黒須くん、せっかくだし、1曲、弾いていただけませんか？ 開演までまだ時間もありますし、黒須くんの演奏を聴けば、木下さんも納得してくれると思います」

「賛成。黒須くん、1曲弾いてよ。優子も黒須くんの演奏が良ければ納得するよね？」

「まあ、代表が許可してたとなると納得するしかないんだけど、あ

たしが文句を言いたいのそれはそれじゃないのよ」

瑞希と愛子は伐に演奏で優子を説得するように言うが優子は伐の自分勝手な態度が気に入らないようであり、伐を睨みつけたまま言う  
と、

「あ？ 俺の演奏を聴いたって木下姉<sup>ふじよし</sup>は納得しねえよ。だいたい、音感もない人間に理解出来るとは思えないからな」

「音感がない？」

「な、何でもないわよ！！ 久保くんも気にしないで！！」

伐は優子には理解できないと言うと利光は伐の言葉に首をかしげ、優子は慌てて誤魔化そうとするが、

「黒須くん、優子ってひょっとして音痴？」

「……ああ。そこら辺の才能は全部、木下弟<sup>いもつと</sup>に持って行かれたみたいだ」

「黒須くん！！ 根も葉もない事を言わないで！！」

「……証拠ならあるぞ」

「止めて！？」

愛子は優子の様子に苦笑いを浮かべながら伐に優子が音痴だと確認すると伐は気だるそうに答え、優子は伐を怒鳴りつけて訂正しろと言うが伐は懷からボイスレコーダーを取り出して再生ボタンに指を

置くと優子の顔は真っ青になって行き、

「……黒須くんはどこからああ言う情報をつかんでくるんだろうね？」

「わ、わかりません」

伐と優子の様子にクラスメート達は改めて伐を敵に回さない事を心に刻む。

## 第56話

「……なんだ？ あのセンスの欠片も感じられない髪形の2人は」

「本当ですね。Fクラスをバカにするなんて許せません」

「……落ち着け。お前1人で行ってどうなる」

清涼祭が始まり、伐と瑞希が召喚大会から帰ってくるとクラスの教室の真ん中の席で2人組の男子学生がFクラスの中華喫茶をバカにしており、瑞希は頬を膨らませて2人組に駆け寄ろうとするが伐は瑞希の首をつかんで彼女を静止すると、

「黒須くん、良いところに戻ってきてくれたわ。あの2人をどうにかして」

「どうしてか、わからないんだけど、Fクラスをバカしてて、Fクラスの営業妨害ってのもあるけど、清涼祭自体にも影響が出そうだよ」

伐と瑞希が教室に戻ってきたのを見て、優子と愛子が2人に駆け寄ってきて、伐にあの2人を排除するように言う。

「……そうだな。何だよ。黙らせろと言ったのはお前らだろ」

「だからと言って、力づくはダメよ。問題になるとあたし達Aクラスの品格に関わるわ」

「品格だ？」

「そうよ。力づくなら、人数をかければ黒須くんを待つ必要もないでしょ」

「まあ、それもそうだ。変な噂が出て客が減ると俺の儲けに関わる……おい。今の客に誰でも良いから他のクラスの友人はいないのか？」

伐は気だるそうに2人組を片付けに行こうと優子は伐の腕をつかみ、暴力での解決は止めるように言う。伐は依頼料がクラスの利益から出されるため、面倒くさそうに頷き、しばらく考えるような素振りをすると何かを良からぬ事を考え付いたよう。小さく口元を緩ませ、

「……優子、もしかしたら、力づくの方が安全だったかも」

「……仕方ないでしょ。暴力沙汰はいろいろと不味いんだから、ちよっと待って、えーと、何人かいるわ」

「うん。ボクも水泳部の先輩とかいるよ」

愛子は伐の表情に苦笑いを浮かべるが優子はため息を吐くとお客さんを見渡し、知り合いと目があったよう。小さく手を振ると相手も同じように返してくれ、愛子も部活の先輩が来てくれていると言うと、

「なら、今から俺があれを弾いてくるから、知り合いにあの2人が騒いでいるのが邪魔だと言わせる。小さな声でも良い。俺達、スタッフではなく客から出た苦情なら、あいつらは出禁にだってできるし、あいつらがFクラスをつぶしにかかっているようだからな。名前と所属クラスを調べて同じように他のクラスにも営業妨害をする

迷惑な奴らと回せばおかしい事はできなくなる。と言うか、そこま  
で知れ渡れば西村にとっ捕まえてどこかに閉じ込められる」

「なるほど、世論を使うわけね。でも、上手く行くかしら？」

「あ？ その時は力づくで黙らせれば良い。それより、真面目に仕  
事をしろよ。少し、本気で弾くからな。呆けるなよ。弾き始めたら、  
知り合いにうるさい客がいてすいませんと言って来い。そうすれば  
勝手に声は広がる」

伐はあの目障りな2人組を処分するための作戦を話すと優子は上手  
く行くのかと言うが伐は問題ないと言うと気だるそうにピアノに向  
かって行こうとした時、

「ここです」

「ここはダメだ。他の店にしよう」

「吉井くん、美波ちゃん、坂本くん、いらっしやいませ。きてくれ  
たんですね」

小さな子供を連れた明久、雄二、美波が店のなかに入ってきて、瑞  
希は嬉しそうに駆け寄って行く。

## 第57問

「……いらっしやいませ。こちらがメニューです」

「翔子、ちよつと待て！？ 俺のメニューがおかしいだろ！？」

小さな子供は美波の妹の葉月と言うようで葉月は自己紹介をした後、瑞希が4人を席に案内すると翔子がメニューを渡すとそこで雄二が騒ぎはじめ、

「……騒ぐな」

「いだ！？ く、黒須くん、どうして僕が叩かれないといけないのさ。騒いだのは雄二だろ！！」

「あれは代表様の所有物だから俺には関係ねえよ」

伐はピアノを弾く前に明久達の席に立ち寄ると騒ぎ始めている明久の頭を叩くと明久は伐を見上げるが伐は明久の言葉など知るかと言  
い、

「目的はあれなんだろ？」

「う、うん。それで黒須は何か考えているの？」

気だるそうに中央付近の席でFクラスを批判している2人組を指差すと美波は伐が何か考えているのかと聞く。

「一先ずは黙らせるがここで騒いでるって事はお前らは追い出した



んだろ」

「ああ。つたく、何が目的でこんなくだらねえ事を……待て。考えが短絡的すぎるだろ」

「今更、気づいたのかよ。悪鬼羅刹も程度が低いな。所詮は元か」

伐はあの2人組が騒いでいるのはFクラスのせいだと言うと雄二は翔子から距離をとりながら、そこで初めてあの2人組が伐の言っていた文月学園の転覆を謀っている人間の手先だと気づいてため息を吐くが伐は今まで気が付かなかった雄二の様子に呆れたように言う  
と、

「一先ずはあのバカ2人には痛い目に遭って貰う。制裁つてのは暴力<sup>ちから</sup>だけじゃねえんだ。木下姉、工藤」

「わかってるわよ」

「準備はできてるよ」

伐は優子と愛子に声をかけるとピアノに向かって歩き出して行き、

「姫路さん、黒須くんは何をするつもり？」

「あの2人に黙って貰うそうです」

「どうやって？」

明久は伐が何をするつもりかと聞くと瑞希は伐の演奏が楽しみなように小さな笑みを浮かべると美波は笑顔を見せる瑞希の様子が不思議

議に思えたようで首を傾げた時、

「あのお姉ちゃん、ピアノ、上手です」

「う、嘘？　く、黒須がピアノを弾いてる？」

伐の指は流れるようにピアノの鍵盤を弾いて行き、葉月は伐の演奏に目を輝かせると美波は伐のような人間がピアノを弾けるとなど思っていないかったようで顔を引きつらせるが、

「おい。姫路、黒須はピアノであの2人を黙らせるつもりなのか？　俺やバカの明久でもこの演奏が凄い事はわかる。だが、あの2人が黙るとは思えないぜ」

「その事なんですけど」

雄二は伐の演奏の中でもFクラスをバカにする2人組の様子にため息を吐き、瑞希に声をかけると彼女は苦笑いを浮かべ、

「……すいません。騒がしくて」

「なるほど、そう言うことか？」

瑞希はこの喫茶店のスタッフとして明久達に頭を下げると雄二は伐が考えている事を理解したようで楽しそうに口元を緩ませ、

「……ちつ、何なんだよ。せっかく、こんなに良い演奏が聴けて気分が良いのに、あの髪形がおかしな2人は何なんだよ」

「雄二？　……ああ、そう言う事？　まったく、気分が悪いよね？」

「どのクラスのバカだよ。こんな良い演奏の価値もわからないなんて信じられないよね」

雄二は他の客にも聞こえるように2人組を批判すると明久も気づいたようで雄二の言葉にのっかり、

『あれって？ 3 - Aの常村と夏川だろ。下品な顔してるからな。音楽とか理解できないんだろ？』

『ああ。あの不細工な面だしな。芸術は無理だろ。わかってても無理してるの全開だし』

雄二と明久の言葉を皮切りに2人組に対してきつい言葉が上がり始め、2人組は自分達に向けられる言葉に逃げるように喫茶店を出て行く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8657s/>

---

嘘と話術とノラ猫 i f ~ ノラ猫と陽の当たる場所 ~

2011年9月16日01時16分発行